

1928年2月第16回総選挙で勝利を取めた田中義一政友会内閣だったが、1928年6月4日、張作霖爆殺事件が発生。田中はこの処理を巡り迷走し、遂に1929年7月2日、総辞職する¹。総裁職は犬養毅が継いだが、元老西園寺公望は、この日の内に野党民政党総裁の浜口雄幸を推薦。同日、浜口内閣がスタートした。この時期の千葉県を見ると、川島正次郎の盟友である福永尊介知事が在職中の1929年1月30日に病死した為、代わりに宮脇梅吉がその職にあった。しかし宮脇は政友会系（田中内閣三土忠造大蔵大臣の実弟）の為、新しく成立した浜口内閣によって休職に追い込まれる。そこで1929年7月5日、新たに後藤多喜蔵が鹿児島県知事から転任する。この浜口内閣は日本銀行総裁の井上準之助を大蔵大臣に迎えたことで知られる通り、以後、緊縮財政、更には金解禁へと突き進んでいく。とは言え衆議院の議席数では政友会より少なく、解散総選挙も時間の問題となりつつあった。

今回の総選挙に関しても、千葉県第1区の場合、野田地域の投票結果を事例とした櫻井良樹の研究が貴重である。櫻井によると、今回の総選挙はそれまでの政党支持があてにならなかったと言う²。本章でも、この櫻井の成果を共有しつつ、分析を重ねていく。

第1節 立候補への道程

(1) 前哨戦—1929年12月東葛飾郡県会議員補欠選挙—

1929年11月2日、東葛飾郡選出の県会議員秋山永治（民政党）が病死した。この補欠選挙を巡り、政友会と民政党が対立を深めていくこととなる。まず社会民衆党が東葛飾郡支部長の本山豊治の候補者擁立を検討していた（『房総日日新聞』1929年11月25日付）のに対して、両党は候補者難に陥っていた。例えば『東京日日新聞』1929年11月6日付千葉版によると、政友会は議席奪回を目指し、本多が坂巻林之助（後に本多後援会松戸町分会長）を推したのに対して、「川島代議士系方のものはこれを喜ば」ず、第3章で登場した松本栄一（1928年県会議員選挙で川島が擁立するも落選）を推し、纏まる気配を見せなかったと言う。そこで「当選後は県会議長要職にすゑる」（『東京朝日新聞』1929年11月8日付房総版）条件の下、第1章～第3章で登場した前県会議員の齋藤三郎の擁立を試みた。一度は齋藤の「内諾」（『東京朝日新聞』1929年11月10日付房総版）を得たものの、ここでも親族である義父の齋藤岩松が反対の意向を示し、「本多、川島両代議士外数名が齋藤氏宅を訪問、厳父

口説き落としを行つたがなかなか諾と言はず」(『読売新聞』1929年12月13日付千葉版)、承諾を取り付けられなかった。更に『房総日日新聞』1929年11月14日付によれば、齋藤の「親分」と目されていた吉田甚左衛門も、国政選挙に出ないのなら県議会議員選挙に出る必要は無いと述べ、齋藤の立候補を「引き止め」ていた。第3章で論じた通り、齋藤の支援者であった吉田は、前回1928年2月第16回総選挙への出馬を模索していた彼を断念させたことに続き、今回もまた齋藤の立候補に反対したのである。

政友会は齋藤の説得を続ける共に、民政党との統一候補者擁立も模索する。前者に関しては、吉植庄一郎(千葉県2区代議士)が齋藤に立候補を勧めたものの、彼は「今回の補欠選挙に本多、川島両代議士の応援を得て出馬しても、次の代議士選挙には右両代議士と同士討ちをせねばならぬ関係から今更」(『東京日日新聞』1929年12月19日付千葉版)と理由を述べ、立候補を固辞した。前回1928年2月第16回総選挙で政友会公認候補の座を川島と争い敗れ、出馬辞退の辛酸を舐めていた齋藤は、国政への転身が見込めないことから、補欠選挙と一線を画す。従って政友会は、後者の選択肢を取るしかなかった。即ち12月15日、川島と本多は民政党の鶴沢宇八(千葉県第2区代議士)及び県支部幹事長の石橋保(香取郡選挙区県議会議員)と会談し、「党争を避けて自治の円満を計る」(『東京朝日新聞』1929年12月17日付房総版)視点から、本人が涉るにも関わらず、慶應義塾理財科卒の学歴を持つ流山町会議員(民政党相談役)の秋元三左衛門(天晴味醂合資会社社長)を共立することで落ち着いた。

実は民政党においても、水面下で単独候補の擁立を模索していた。県議会議員の成島勇を中心に、代議士の祖父、県議会議員から代議士へと転身した父を持つ布佐町青年団長の榎本治郎右衛門、中山町(『読売新聞』1929年11月14日付千葉版)・柏町及び我孫子町(『東京日日新聞』1929年11月12日付千葉版)から推薦された中山町長の中村勝五郎に打診していたのである。しかし榎本は「家族の猛烈な反対に遭つて決意も鈍」(『東京日日新聞』1929年12月7日付千葉版)る。民政党支持者の中村だったが、親交の深い政友会代議士の志村清右衛門及び県議会議員の浮谷権兵衛との関係を考慮して難色を示し、中山町会議員一同の立候補要請も「固辞」(『房総日日新聞』1929年11月15日付)する。更に八幡町の金物商の川上勇治が選挙資金を負担して、同町及び中山町の民政党支持者が高原正高なる人物の出馬を検討したものの、「容易に出馬せざる」(『房総日日新聞』1929年12月6日付)状況であった。しかし立候補届締め切り寸前となる12月16日夜、民政党は「引っぱりダコになつた秋元氏の態度を危ぶんで」(『東京朝日新聞』1929年12月18日付房総版)、急遽、

本人の承諾を得ないまま、榎本の単独候補に切り替えたのである。

ここに候補者本人の承諾の無いまま、政党からの「推薦」(『読売新聞』1929年12月18日付千葉版)候補同士の対決と言う異例の選挙戦がスタートした。但し選挙後の回想記事(『読売新聞』1929年12月24日付千葉版)を見る限り、川島は秋元を政民統一候補とすることに賛成ではなかったようである。即ち12月15日、民政党との会談前、民政党の内諾情報を受けて、川島は梨本太兵衛の擁立を本多に提案した。しかし本多が「承知せず」、「本多邸で本多川島両氏の大激論」の末、結局、川島が補欠選挙から手を引き、本多の推す秋元の推薦となった。同一政党ながらも、同じ選挙区で議席を争ってきた過去の経験から、依然として川島と本多の対立は根深く、それは補欠選挙の行く末を規定したのである。

補欠選挙戦は、政友会の場合、「松戸松栄館に本多代議士以下幹部の対策協議会を開き、各町村選挙委員等に任命を行ひ、今明日中一斉に立候補推薦状を有権者に発送、大馬力をかける」(『読売新聞』1929年12月20日付千葉版)と報じた通り、秋元を推した本多がその指揮に当たった。民政党の場合は、選挙事務長に元県会議員の大川五兵衛を据え、選挙事務所も大川邸とし、「猛運動を開始」(『東京朝日新聞』1929年12月22日付千葉版)すると息巻いていた。

しかし立候補未承諾の秋元が県庁への辞退届を模索していたことから、問題が発生。『東京日日新聞』1929年12月22日付千葉版によれば、そこに齋藤三郎と大久保一朗(県会議員)が現れ、「政友派が貴下を推薦したのであるから辞退するなら辞退届を政友派に渡して呉れ、民政派に渡すとは不都合である、承知せねば壮士を送る」と秋元に詰め寄った為、秋元は松戸警察署に「保護を願った」。この後、秋元は政友会と話を付けて、「辞退届を県庁に提出しなければ、自動車で自身出県、締め切り前に辞退届を提出する」(『東京日日新聞』1929年12月24日付千葉版)ことを条件に、政友会に辞退届を渡した。政友会は代替りの候補を模索したが見つからず、そのまま県庁に辞退届を提出し、榎本の無競争当選となった。なお冒頭で述べた社会民衆党は、結局、候補者を擁立出来なかった。

この政友会の不手際と不戦敗を目にした川島は「本多派があまり策を弄したからこんなもとなつたのである、どうせ妥協するなら何故梨本太兵衛氏で妥協しなかつたか、民政派は梨本氏なら結構だと言明してみたのであるし、本多一派さへ承知すれば何等文句なしに妥協成立した」(『東京日日新聞』1929年12月24日付千葉版)とコメントし、本多への不満を露わにした。こうして同じ政友会の川島と本多のしこりは溶解せぬまま、両者は年明けの1930年2月第17回総選挙で3度目の対決を迎える。

(2) 川島正次郎

1928年2月第16回総選挙で初当選を果たした川島が選んだ地盤涵養のツールは、第4章で示した通り、本多貞次郎や多田満長のような個人後援会の結成では無く、議会報告演説会を通じた有権者との直接的結び付きであった。具体的に見よう。『東京朝日新聞』1928年7月10日付房総版によると、7月10日に船橋町蓬莱座及び中山町小栗原公会堂で川島・山口義一（大阪府第6区）・植原悦二郎（長野県第4区）が、7月12日に松戸町常盤館及び市川町三松館で川島・安藤正純（東京府第3区）・岡田忠彦（岡山県第1区）が、7月13日に浦安町演技館及び行徳町寿座で田子一民（岩手県第1区）・内野辰次郎（福岡県第4区）がそれぞれ登壇した。また『千葉毎日新聞』1928年8月5日付によると、8月7日に国分村安国寺及び同村清水寿三郎方で、8月8日に馬橋村小学校でも開催された。年が明けても川島は引き続き活動報告演説会を開催し、有権者との直接的な結び付きを志向する。例えば1929年3月19日（『千葉毎日新聞』1929年3月17日付）に浦安町浦安亭で川島・伊藤仁太郎（東京府第3区）・高橋熊次郎（山形県第1区）が登壇。また3月30日（『千葉毎日新聞』1929年3月30日付）に中山町小栗原公会堂で川島・前述の安藤正純・西方利馬（山形県第1区）・土井権大（兵庫県第4区）が登壇。更には5月8日（『東京日日新聞』1929年5月8日付千葉版）、前述の安藤正純を応援弁士に迎えて、柏町柏館及び流山町赤城クラブでも開催された。

第4章で示した通り、当時の川島は鈴木喜三郎派の一員だったが、前述の弁士を見る限り、必ずしも同じ派閥の構成員だけから応援を得ていた訳では無い。1928年10月時点での党内派閥に基づき³、川島の応援弁士を分類すると、川島と同じ鈴木喜三郎系1名（田子）、旧革新倶楽部系3名（岡田・植原・土井）、中立1名（山口）、「態度疑問のもの」5名（安藤・伊藤・高橋・西方・内野）であった。川島は派閥職の薄い代議士や旧革新倶楽部系代議士と交流があったようだが、派閥が異なれども、代議士同士の関係性は柔軟であったと思われる。この議会報告演説会を通して、代議士及びその応援弁士と有権者が政治を語る空間を共有することとなった。川島は地方議員を介在させた後援会とは異なる、有権者との直接的な結び付きを試みていたのである。議会報告演説会において、川島の帝国議会での活動が報告されていたことは、想像に難くない。

そこで1928年から1929年にかけての川島の議会活動を確認したい。川島の議会における初めての発言は、第56帝国議会に遡る。1929年2月6日の競馬法中改正法律案第2回委員会において、競馬を「富籤」と位置付ける司法省刑事局長の泉二新熊（政府委員）に対して、川島は「馬

ノ能力ヲ判定シテ買フノデ」決して富籤では無いと発言したものの、大審院判事出身の泉二に反論され、結局、川島は「富籤ニ近イモノデアル」と前言撤回に追い込まれてしまう⁴。苦い議会デビューとなった川島だが、2月12日の第4回委員会において、「或ル政党ガ或ル地方ノ人ヨリ巨額ノ金ヲ貰フ約束ヲシテイル」と暗に政友会を批判した佐藤啓（山形県第1区民政党）に対して、「明白ニ其事実ヲ明ニシテ戴キタイノデアリマス、ソレガ万一他人カラ聞イタ噂ニ過ギナイモノデアルト云フモノデアアルナラバ、此議論ヲ御取消ヲ願ヒタイ」と具体的な証拠の提出を求めて反論し、会場から拍手を得た。この他、例えば川島は未成年者飲酒禁止法中改正法案外一件委員会で、安部磯雄が提出した「公娼制度廃止に関する法律案」を審議した際、川島は「密淫売窟ノ根絶方法、更ニ進ンデハ芸妓取締規則ノ廃止ヲ併セテ御提案サレナイト云フコトハ、私ハ大ナル矛盾デハナイカ⁵」と述べ、これに反対した。川島は公娼だけを廃止しても、その提供のを廃止しなければ、本質的解決にはならないと考えていた。川島はこれらの内容を議会報告演説会で報告し、国政と有権者を繋げようと企図していたのであろう。

ところが川島は、第3章で示した通り、前回1928年2月第16回総選挙で彼を支えたはずの野田地域において、議会報告演説会を開催していない。『野田新聞』1929年4月13日付（野田市立興風図書館蔵）は、その背景を次のように報じている。

大争議当時、表面には現はれず裏面に多少動いたとしても、其後失職した七百余名の喰ふ事の出来ない者の為に、職なきものの為に、一片の葉書か何かに依つてなり、将来の方法、否、当時の処すべき方針でも教へ示してやつたか、彼れの一枚の葉書はこうした方面になく、一般有志のみに対する解決を祝すの挨拶であつた、当時記者は彼れを訪ね、そうした事と松戸、柏辺で議会報告演説会を催しながら、野田あつての彼れが何故来町せぬかと問ふに答へて、野田はヤカマシイ処であるから考えへてみると云ふ一言に返す言葉もなく、それ切りになつてゐる

記者と川島のやり取りが事実であるとするならば、川島は野田醤油争議（1922～1928年）が出した失職者に対する配慮を欠き、野田町の有権者に引け目を感じていたと言う。結局、川島はこの地で議会報告演説会を開催することは無かったことから、同紙は川島を「その場限り有権者をないものかしにする候補者」と鋭く批判するに至ったのである⁶。これは、川島に危機感を与えずにはいられない。だからこそ1929年7月2日に浜口雄幸民政党内閣の成立後、川島は選挙事務長だった梨本太兵衛、県会議員の大久保一郎を招き、「東京において何事か画策」（『東京日日新聞』1929年7月5日付千葉版）したのであろう。

この1929年は、浜口雄幸民政党内閣による金解禁を巡る議論が喧しかった。結果、第57帝国議会の休会中、翌年1月11日からの金解禁及び金本位制への復帰が決定される。休会明けの1930年1月21日、浜口内閣は第57帝国議会を解散した。当時の千葉県知事は、1929年7月5日に鹿児島県知事から転任した後藤多喜蔵。この下で、川島らは議席を争う。議会解散翌日、川島は「私は現在の選挙区で出馬することに決してみます、選挙に当たっては誤れる現内閣の政策を打破して不景気転換のため及び農村経済政策の確立のために戦ひます」（『東京日日新聞』1930年1月22日付房総版）と述べ、早々に千葉県第1区からの出馬を宣言し、昭和恐慌に喘ぐ経済と農村生活の再建を標榜した。また民政党から政友会に復党したライバルの本多も「私は産業振興と国難的な財界救済、政治の革正に努力する」（『東京日日新聞』1930年1月22日付房総版）と述べ、浜口内閣の経済政策の批判を並べ立てた。しかし結論を先取りして言えば、川島が今回の総選挙で党本部から公認を得て立候補出来たのは、本多と同じく、民政党を脱党して政友会に復党した、千葉市及び千葉郡を地盤とする現職代議士志村清右衛門を抑えたからであった。

1880年に千葉郡幕張町馬加に生まれた「有数の資産家⁷」志村は、東京高等商業学校卒業後、大阪住友銀行に入行。退行して千葉郡会議員に当選後、1915年6月県会議員補欠選挙、1915年9月県会議員選挙、1919年9月県会議員選挙、1924年1月県会議員選挙で連続当選を果たした。更に志村は1925年5月第15回総選挙において、旧千葉県第1区（千葉市及び千葉郡）から政友本党で立候補して初当選。加えて1928年2月第16回総選挙において、千葉県1区から政友本党を合併した民政党候補として当選していた⁸。「床次直系」（『房総日日新聞』1930年1月30日）と評された志村は、その後、本多と共に政友会に復党する。

しかし志村は1929年10月頃から「肋膜炎で重態に陥り」（『東京日日新聞』1930年1月22日付千葉版）静養中であったことから、「再起せず」（『千葉毎日新聞』1930年1月25日付）との憶測が流れ、加えて党本部は「志村氏の後任を立てず」（『東京朝日新聞』1930年1月16日付房総版）との方針を決めた。従って千葉県第1区は政友会から現職の鈴木隆・本多貞次郎・川島正次郎、民政党から多田満長の合計4人の立候補が予想されるに至った。但し志村本人は不出馬を諒解した訳ではなく、それ故に彼の立候補を巡る噂が続出する。

政友派は三名の公認も勢力伯仲して、安全に三名の当選を確保する事は少しく至難、即ち当選は二名宛となり政友の一名は落選の憂き目を馴る惧れ無きに非ずやである、況や公認四名に於いてをや、斯くて大混戦とならば其結果は民派の二名をして戦はずして有力化せしむるものと、幹部は勿論各都市の有志をして憂慮せしめてゐる、

而して政友派として稍有利な地位に置かれるのは本多、鈴木の両氏は共に安全なるに反し地盤乏しくさなぎだに不利な地位にある川島氏と病軀の爲め活動意に任せぬ志村氏が共倒れとなる惧ある事極めて賭易き理合、志村氏が飽迄肯じな場合、志村、川島両氏共非公認で闘ふ事になる。

ここでは、政友会の鈴木と本多の当選は確実なもの、当選 1 回に過ぎない川島と病床に伏している志村の両名が政友会から立候補した場合、共倒れになる可能性が高いと報じている。加えて両名とも現職代議士の爲に立候補調整は難しく、交渉が決裂した場合、彼らは非公認でも出馬するとも報じている。前回 1928 年 2 月第 16 回総選挙で県会議員の斎藤三郎と政友会公認候補の座を争った川島は、今回、志村と公認候補の座を争う状況にあった。現職代議士と雖も、当選回数と序列があるならば、当選 1 回の川島は、千葉県第 1 区において、まだ絶対的・圧倒的な存在では無い。川島が政友会公認候補として立候補出来るか否か、今回もまた流動的だった。

さて『東京朝日新聞』1930 年 1 月 24 日付房総版によれば、志村は病体を押して「立候補を声明」し、既に「宣言書やあいさつ状も出来ている」と言う。『千葉毎日新聞』1930 年 1 月 31 日付によれば、千葉市及び千葉郡を範囲とする政友会千葉県支部千葉支会は、志村の「健康状態は世間伝へらるる程に悪化して居らず」と判断し、1 月 29 日に幹部会を開催。「多年市郡の爲めに貢献された志村清右衛門氏にして、果たして再起の意志ありとせば、大義名分の上からも支会は一致結合」することとなり、志村の立候補を承認したのである。但し病床の志村は「郷党のこの誠意に感激して熱涙滂沱」しながらも、その場での「起否の解答」は避けている。志村の体調は万全では無かったようである。

そこで政友会千葉県支部千葉支会は、このままだと公認候補 4 名で共倒れが起きかねないと考え、「定員四名の第一区で政友派が四名公認する事は無謀の識を免れないから公認を三名にせられたいと要求した、之に対して本部が如何なる態度に出づるか興味ある問題だが、結局、志村、川島両氏非公認になるであらう」（『読売新聞』1930 年 1 月 31 日付千葉版）との報道にある通り、党本部に志村と川島の一本化を打診した。『東京朝日新聞』1930 年 2 月 2 日付房総版によれば、川島も 1 月 27 日に県支部の「秦、森、吉植三幹部」へ候補者の一本化を依頼したのに対し、志村も 1 月 29 日に「吉植氏と会見、倒れるまでやる旨」を告げ、立候補への強い意思を示した。

とは言え志村も立候補調整の必要性を感じていたようである。例えば 1 月 31 日、志村は新聞記者に「川島君は届出る場合僕と相談してやる事にしてゐたが、アノ日は『大安』とかで大変日がいいからとも角届出て置

かうといふ事ですましたものだが、その後届出はしても運動はしないからよろしく、といて来た、川島君はあす（一日一筆者）大阪から帰つて僕のところにくるはずになつてゐるから、その時トクと相談して川島君が出るか、僕になるかをキメようと思つてゐる、どつち道政友会が四人を立てる訳には参らぬ」（『東京朝日新聞』1930年2月1日付房総版）と語り、両者の直接会談を示唆した。『読売新聞』1930年2月2日付千葉版が「政友では金力の鈴木氏、京成電車関係の本多氏共に有力たる事は言ふを要しない、政友の乱立で戦はずして有力化した民派の二氏は人気は素晴らしいが全然縁故の無い新顔の篠原氏は決して楽観は許されない、川島氏は地盤に乏しいが元氣は澁刺、志村氏は狭少乍ら千葉市郡の地盤は堅いが病体活動意に任せぬ」と報道する通り、川島も志村も必ずしも有利な選挙情勢下に置かれておらず、共倒れ回避は必要不可欠だった。なお「新顔の篠原氏」に関しては、後述する。川島は「立候補を届出て文書（ハガキ）による準備運動もしてをり、かたがた軍資金調達もやつて居」（『東京朝日新聞』1930年2月1日付房総版）たことを踏まえると、志村に公認が下りた場合でも、無所属からの出馬を想定していたようである。

そして両者が直接会談する2月1日を迎える。前回1928年2月第16回総選挙における川島と斎藤三郎の公認問題の時と同様、政党本部や政党支部が具体的に調整に乗り出した事実は確認出来なかった。栗屋憲太郎が指摘する通り、当時の政党支部が代議士と県会議員の連合体であるならば¹⁰、強力な調整力は発揮し難い。とりわけ千葉県の政党支部幹部は「地方幹部は人物の如何などを問わず、別にかばんの重さうな候補者を物色する¹¹」と評されており、公平な視点での調整は困難を極めた。両者の直接会談に先立ち、川島は「志村君がどうしてもやるといへば僕は先輩に対する儀礼として潔く辞退する、そして志村君が演舌出来ないといへば僕が代つて演説して歩かうと決心してゐる、軍資金が足らなければおよばずながら僕がお手伝ひしてもいい」（『東京朝日新聞』1930年2月2日付房総版）と述べた。これは、むしろ自分に公認が出た際、自分の選挙運動に志村が尽力することを暗に求めたものであろう。会談の結果は、「病氣を心配されてゐたが」（『東京朝日新聞』1930年2月2日付房総版）志村も出馬を決定し、決裂に終わったのである。

しかし翌2月2日、「主治医椎名博士、親友折原元代議士等により『生命が惜くばもう一期待て』と切に辞退を勧告されて遂に断念し、後輩川島正次郎氏のために地盤を譲」（『東京日日新聞』1930年4月12日付）ることになったと報じられた。事態は急転直下する。『東京朝日新聞』1930

年 2 月 5 日付房総版によれば、2 月 3 日、志村は「親戚その他とトクト協議の結果、からだあつてのもの種だ、といふので意をひるがえ」し、志村は政友会千葉県支部千葉支会の幹部会座長である折原巳一郎に対して、改めて立候補の「辞退」（『千葉毎日新聞』1930 年 2 月 5 日付）を告げたのである。実際、1930 年 4 月 10 日、志村は鬼籍に入ることから、志村の体調は必ずしも良好では無かったのではないだろうか。

志村の辞退により、彼が地盤としていた千葉市及び千葉郡の票の行方が焦点となる。そこで同日夜以降、政友会千葉県支部千葉支会は幹部会を開き、連日の協議を重ね、7 日、「川島正次郎候補を支会公認候補」（『千葉毎日新聞』1930 年 2 月 9 日付）として決定する。そして 2 月 9 日、千葉市加納屋で会合を開催し、「市郡所属の代表的有力者七十余名といふ想像以上の大衆を迎へて」（『千葉毎日新聞』1930 年 2 月 11 日付）川島の推薦を決議した。但し志村が政友会 → 政友本党 → 民政党 → 新党倶楽部 → 政友会と渡り歩いて来た人物であっただけに、その支持層は多様で、最終的に「従来の種種なる関係上、結局、政友派の主力は川島氏の有に帰し、其の一部は本多氏を擁護し、他の一部は鈴木氏との従来の離れ難い関係上、同士の傘下に馳せ参するの結果」（『千葉毎日新聞』1930 年 2 月 11 日付）となる。ここからは、必ずしも志村派の全てが川島の支援に廻った訳で無いことを窺える。第 3 章で示した通り、1928 年 2 月第 16 回総選挙の際、川島は県会議員の川口為之助を通して、千葉市及び千葉郡から集票した。この川口の支持に加えて、志村派の勢力一部を受け継ぐ区こととなり、川島は一層、千葉市及び千葉郡で勢力拡大の機会を得たと言えよう。

以上、投票日 2 週間を切った段階で、漸く川島は志村を抑えた。川島が党本部の公認を得たのは、更に時間が掛かり、2 月 12 日のことである。即ち同日、党本部から「公認、総裁の決済済んだ、他との関係上少し遅れる、公認候補として行動せられ一向差支ない」（『読売新聞』1930 年 2 月 13 日付千葉版）との電報が届く。そして『読売新聞』1930 年 2 月 15 日付千葉版によれば、翌 13 日、党本部から公認通知が届き、川島は鈴木と本多に続く 3 人目の政友会公認候補の座を勝ち取ると共に、漸く川島は宣言書を各有権者に向けて発送出来たのである。

このようなギリギリの状況に置かれていた川島は、前回 1928 年 2 月第 16 回総選挙の時と同様、地域の名望家による推薦会やボトムアップを経していない。前述した政友会千葉県支部千葉支会による川島の推薦は、志村の立候補自体を受け、その支持団体の一部が支持先を変えたことに過ぎず、性質が全く異なる。また東葛政友派が「二十五日、柏町に会合、同郡下選出の立候補について詮衡会を開く」（『千葉毎日新聞』1930 年 1 月 26 日付）と報道されてはいるものの、そこには川島の名は無く、候補

者が誰を指すか判然としない。前回総選挙同様、今回も川島の立候補そのものが流動的な状況からの出馬だったがゆえに、推薦会やボトムアップは難かったものと思われる。しかし結果的に、それらが無いまま立候補しても、川島は当選することから、地域における影響力を拡大させていくと思われる。

(3) 本多貞次郎

民政党から政友会に復党した本多は、川島正次郎と同じ政党となった。しかし積年の行き掛かり上、川島と本多は「地盤関係で融和を欠」(『読売新聞』1930年1月11日付千葉版)く関係であり、正にライバルであった。次の報道を紹介しよう。

本多氏が南部京成沿線に本拠を有するに対し、川島氏は北部方面を中心とし、本多氏は前回民政から出馬してあるので京成による地盤はたとひ動かすべからざるものありとするも、なほ前回民政側から投ぜられたかなりの得票を失ふと同時に、新たに前回川島氏に集められた政友側の得票を加ふるものと見られ、それだけ局面は変わるものとして予想されるが、本多氏も最近南部地方民政更新クラブの進出があるので、両氏とも極力千葉郡市より更に市原方面までの進出を計らざるを得ないであらう¹²

東葛飾郡のどの町村を北部や南部に設定するかは難しい。ただ確かなのは、本多の政友会復党により、地盤を共有する現職の政敵同士が同一政党に所属する事態に陥ってしまい、両者における敵対関係に拍車が掛かったことである。しかも民政党の政治団体「民政更新クラブ」(詳細不明)も存在するらしく、両者共に東葛飾郡以外の地域からの集票に取り組みなければならない状況にあった。

連続当選3回の本多ではあったが、今回の総選挙は「本多氏も相とう苦戦は免れざるの形勢にあるも、一方青年のするどい意気で押出された川島氏、亦ふん戦せざるを得ないであらうと予想されるが、目下、川島氏のえん声は至る所にたい積して来た」(『房総日日新聞』1930年1月21日付)と報道されている通り、青年層に支持された川島の勢力も侮れなかった。但し川島への不満の声も存在しているようであり、反本多が必ずしも川島に流れていないことが窺える。例えば「東葛反本多熱のかう騰してをつた郡民は、殆ど民政党に入党」(『房総日日新聞』1930年1月31日付)との報道は、それを物語る。反本多の受け皿はライバル川島ではなく、民政党であった。だからこそ後述する通り、民政党は東葛飾郡を地盤とする第3の候補を擁立し、反本多票を汲み取ろうとする。

議会解散4日後の1月25日、本多は「切れるやうな新しい紙幣で二千円の供託金を地方裁判所の供託局へ納付し、更に県庁に立候補正式の手

続き」(『千葉毎日新聞』1930年1月26日付)をした。その後、川島とは異なり、個人後援会を数多く組織した本多は、第4章で示した通り、後援会「推薦」も取り付け、選挙運動の従事していく。但し本多の場合、従来の名望家による候補者のボトムアップや推薦も見出すことが出来る。例えば『東京日日新聞』1930年1月26日付房総版によると、1月25日に松戸町松栄館で坂巻林之助(松戸町本多後援会明町分会の主幹者)ら主導の候補者選衡会(参加者約100人)が開催されると共に、柏町富士見ホテルで県会議員大久保一朗と前県会議員斎藤三郎ら主導の会合(参加者約80人)が開催された。また『東京朝日新聞』1930年1月28日付房総版によれば、1月25日に元県会議員の逆井貞八ら55名が二川村で開催した推薦会において、本多は53票・斎藤三郎(元県会議員)は2票を獲得し、本多の推薦が承認された¹³。更に『東京朝日新聞』1930年2月1日付房総版によると、1月29日、我孫子町我孫子亭において、県会議員の大久保一朗と元県会議員の斎藤三郎は「地方有志海老原氏以外、外十五名を集め協議会を開」き、本多の応援を決定した。紆余曲折を経た立候補過程であった川島と比べて、本多の場合、推薦会を経た立候補であった。

(4) 新たな民政党候補の登場

与党民政党は、君津郡出身の多田満長に加えて、東葛飾郡における反本多票を汲み取る為、もう1名の公認候補の擁立を考えていた。例えば『東京日日新聞』1930年1月21日付房総版によると、1月20日午後3時、民政党千葉県支部長の鶴澤宇八の事務所において、総選挙対策協議会が開催された。支部長の鶴澤、土屋清三郎代議士(千葉県第3区)、多田満長候補、支部幹事長の石橋保(香取郡選挙区の県会議員)の他、県会議員の中村満(市原郡選挙区)・大野英三郎(印旛郡選挙区)・林敬司(香取郡選挙区)・成島勇(東葛飾郡選挙区)・島田弥久(千葉郡選挙区)、更には東葛飾郡の有力者とされる田中丑蔵・大川五兵衛(元県会議員)らが集まり、県支部主導の下、第1区のもう1人の民政党候補を「輸入候補」とすることを決した。『読売新聞』1930年1月16日付千葉版によると、当初、東京市会議員などを中心に候補者が模索されていたが、実現しなかった。しかし民政党千葉県支部の幹部の中には、「何分、短時日の選挙戦に地元民の全然関知せぬ人物を持って来たのでは甚だ不安である」(『東京朝日新聞』1930年1月16日付房総版)との不安を漏らす者もいた。最終的に擁立されたのは、熊本税務監督局長を務める現職大蔵官僚の篠原陸朗(48歳)。篠原は「東金町素封家篠原蔵司氏の養子で、東京帝大法科出身大蔵省主計課長より熊本税務監督局長に転じたもので、省内でも評判の敏腕家」(『東京日日新聞』1930年1月22日付房総版)

と報じられている。篠原は東京市に生まれ、その後、「県下有数の資産家¹⁴」で元千葉県会議員（山武郡選挙区）の篠原蔵司の養子として幼少期を東金で過ごしたものの、東葛飾郡と地縁が無い為、正しく輸入候補・落下傘候補であったと言えよう。その後、仙台高等学校を経て、1909年に東京帝国大学法科卒業。司法官試補を経て、高等文官試験に合格。1910年に大蔵省入省後、主に税務畑を歩き、本省の主計局主計課長や理財局国債課長などを経て、熊本税務監督局長の職にあった¹⁵。高等文官試験に合格していることから、官僚としての歩みは川島とは大きく異なる。清水唯一朗は、高文試験に合格する官僚の絶対数が増加する反面、植民地を別として、局長以上のポストは増えていないと指摘する¹⁶。そこに官僚の政党化現象が加わり¹⁷、官僚の在り様そのものが変化したこの時代、篠原は代議士への転身と言う大決断を下したのである。

ここで注意しなければならないのは、県支部と地域の間には候補者を巡るズレがあった点である。例えば民政党千葉県支部が東京で総選挙対策協議会を開催していた同日（1月20日）午後2時、松戸町松栄館において、東葛民政派有志約80名が協議会を開催している。元県会議員（東葛飾郡選挙区）で「郷党の間に信望¹⁸」ある酒井市郎右衛門を座長として協議した結果、「議会解散の場合は輸入候補を排斥し、地方自治体に最も理解ある正義の士を擁立せんことを期す」（『東京日日新聞』1930年1月21日付房総版）宣言決議文を満場一致で可決し、翌日に民政党本部と県支部に持参・陳情することとなった。地域の側は東葛飾郡と縁ある地方議員の擁立を模索しており、県支部主導の候補者擁立に異議を唱えていたのである。この動きは「二十六日、松戸町に於いて同郡下の総選挙選出候補者の詮衡会を開く」（『千葉毎日新聞』1930年1月26日付）との報道、「さきに東葛飾郡民政党青年幹部連が輸入候補排斥の熱を高めて、協議会に於て遂に輸候補排斥を決しせる」（『日新時報』1930年2月5日付¹⁹）との報道から窺える通り、県支部を揺さぶり続けた。その結果、「絶対に輸入候補を排斥し選挙民に関係ある地方民中より候補者を物色」（『読売新聞』1930年1月24日付千葉版）し、最終的に県会議員（東葛飾郡選挙区）の成島勇の擁立を描きつつあった。当時39歳の成島は、県会議員や衆議院議員を歴任した成島巍一郎の3男として富勢村に生まれ、32歳の若さで富勢村の村長も務めており、名実共に地域と縁ある名望家であった。

地域からの突き上げを受けていた県支部は、篠原の擁立に向けて、地方議員層の更なる抱き込みを図る。例えば『東京朝日新聞』1930年1月26日付房総版によると、1月25日午後、民政党千葉県支部の鷗沢宇八支部長は東葛飾郡と千葉市と千葉郡選出の県会議員（島田弥久・成島勇・浮谷権兵衛・宇賀山金次郎）、地元代表者の加藤太三郎（元県会議員）・

大川五兵衛（元県会議員）・田中丑蔵・西川測吉（千葉市会議員）・内山徳太郎・仲田徹（元県会議員）を東京の自邸に招き、篠原との対面の場を設定する。この場は、篠原推薦会の様相を呈したと言えよう。参加者からは「税務監督局長のままで立候補するのは不穩当」（『東京朝日新聞』1930年1月28日付房総版）との指摘を受け、篠原は即日官職を辞した。両者の信頼関係は少しずつ築かれつつあった。

こうして県支部主導の下、篠原擁立の裾野が広がっていく。『東京日日新聞』1930年1月26日付房総版によれば、1月26日、東京の支部長の鶴澤宇八郎で会合が催された。参加者は鶴澤支部長、島田弥久、千葉日日新聞社長で千葉市会議員も兼ねる大澤中、成島勇、宇賀山金次郎の県会議員、加藤太三郎・大川五兵衛などの東葛飾郡選出の元県会議員、仲田徹・田中丑蔵・高橋栄蔵・西川測吉・「有数の資産家²⁰」で元津田沼町長の医師の田久保節造（元県会議員）、北澤春平（千葉市会議員）、中村勝五郎（中山町長）の15名。加えて勝正憲（大蔵省参与官）なる人物も同席していた。勝は東京帝国大学法科卒業後に大蔵省に入り、主に税務畑の役職を歴任し、1928年2月第16回総選挙で郷里の福岡県第4区から当選していた民政党代議士で、篠原の先輩で且つ彼と近い境遇に置かれていた。合計16名のいる場で、篠原の立候補が正式決定されたのである。篠原も前述の本多貞次郎同様、地域の有力者からのボトムアップのプロセスを経ている。

前述した松戸町有志の意向、即ち輸入候補の拒否なる意向は汲み上げられること無く、逆に彼ら自身、篠原を「応援するや否につき協議」（『読売新聞』1930年1月28日付千葉版）せざるを得ない状況に追い込まれた。協議結果は確認出来なかったが、後掲表1を見る限り、篠原は松戸町から275票しか獲得出来ていない。同町は篠原支持で纏まり切れなかったと思われる。民政党県支部主導の候補者擁立を受けて、篠原は「いや一寸思案に困りましたが、安達内相がやれとのこと、それに鶴澤さんや土屋さんが地元の有志の人々が御熱心に勧めてくれますので、又東金は私の郷里で、選挙区こそ違へ第一区とも満更御縁がない訳でもありません」（『東京朝日新聞』1930年1月28日付房総版）と語り、浜口内閣の安達謙造内務大臣の関与も示唆すると共に、同時に千葉県との繋がりが²¹も強調し、「輸入候補」批判に反論していく。ここにおいて、千葉県1区からは多田と篠原の2人の民政党候補が誕生したのである。1月27日、県支部は会合を開催し、「篠原候補は東葛千葉郡市、多田候補は君津市原両郡を本拠として活動」（『東京日日新聞』1930年1月29日付房総版）することを決し、勢力地を棲み分けた。そして『東京日日新聞』1930年2月7日付房総版を見ると、具体的票数が報じられている。即ち篠原陣営は東葛飾郡から15,000票、千葉市郡から1,300票、君津郡から

1,000票を予定し、合計18,000票での当選を見込んでいたようである。

東葛飾郡を地盤とする第3の候補の出現は、「本多氏の多年植ゑつけた金城湯池とも称される地盤だが、わが党天下のもとに篠原氏の出馬は同地に異常なる衝動を与へ」(『東京日日新聞』1930年1月24日付千葉版)たとの報道が示す通り、川島と本多に強い危機感を与えた。例えば『読売新聞』1930年2月5日付千葉版は「千葉市郡の志村勢力がソツクリ川島氏と行くなら川島氏多少分はある際、千葉市郡が幾分散逸を免れないにしても、土地の児といふ強みがある、一方篠原氏は輸入の不利はあつても、東葛民政派の大部分を掌中に納め、千葉市郡の援助あり、然かも候補者少いといふ強みあり、川島篠原両者の優劣は容易に断じ難い」と報じたが、それは本多が強いものの、川島と篠原の勢力が拮抗していたことを物語る。

(5) 無産政党の模索

今回の選挙を見ると、戦前期中選挙区制度下の千葉県第1区において、最初で最後の無産政党候補者がいた。『東京朝日新聞』1930年1月25日付房総版を見よう。1月24日、一市三郡(千葉市・千葉郡・東葛飾郡・君津郡)の借地借家人組合・農民組合・小作人組合・漁民組合などが共同戦線を張り、無産団体協議会創立大会を開催したと言う。参加者は約5,000人を数え、この場で印旛郡白井村在住の石橋源四郎(全日本農民組合芝千葉県連委員長)の擁立を決定する。しかし石橋の総得票数は、後掲表1が示す通り、1,215票に過ぎない。前述の創立者大会の参加者数が誇大に報道されていた可能性、参加者の多くが有権者では無い可能性などが想起される。次回以降、無産政党候補者がいないことから、この1,215票は棄権か、或いは他候補者への投票へと繋がっていくものと思われる。

第2節 選挙運動

(1) 本多貞次郎

選挙事務長には娘婿で「千葉県会にその人あり」(『東京朝日新聞』1930年2月7日付房総版)と評される県会議員(東葛飾郡選挙区)の浮谷権兵衛を据えた。自宅に隣接する市川町の葛飾瓦斯会社に選挙事務所を置くと共に、1月28日には市川町小学校と船橋柏亭で政見発表会を開催した。宮脇梅吉(前千葉県知事)、浮谷権兵衛、利光丈平(京成電鉄取締役)、「人と為り淡白にして慈心に富、貧病者の薬価を免ずる事其数を知らず、是れを以て、其徳を信じ、診療を乞ふもの常に其の門に湊まる²²」市川町在住の吉岡利光(医師)らが弁士となり、「一、産業の振興 二、国難

的経済界の救済 三、教育機関の改善 四、地方金融の円滑 五、小商工業者の救済 六、農漁村の振興と開発 七、交通機関の整備」(『千葉毎日新聞』1930年1月29日付)を訴えたと言う。経済政策の優先順位が高いのは、昭和恐慌期ならではのものであろう。また交通機関の整備に関しては、京成電鉄社長の本多の真骨頂であった。なお『東京日日新聞』1930年1月28日付房総版は、この他にも船橋九日町と松戸町にも事務所が設置されたと報じている。選挙事務所は一か所では無く、複数個所に置かれていることが窺える。

本多の演説会は、『千葉毎日新聞』1930年2月5日付によると、4日行徳町、5日八幡町・大柏村、6日松戸町、7日川間村・七福村、9日土村・高木村、10日国分村・馬橋村・小金町・中山町、11日新川村・法典村・流山町・塚田村の東葛飾郡各地で開催され、後に千葉市と千葉郡会場も追加される。地域的には、どうやら地盤の東葛飾郡とそこに隣接する千葉市及び千葉郡が対象だったようである。例えば『千葉毎日新聞』1930年2月13日付によると、17日は津田沼町久々田公会堂(13時)、津田沼町大久保演芸館(13時)、検見川町稲毛館(13時)、千葉市亥鼻館(17時)、蘇我町今井福正寺(17時)で開催され、浮谷権兵衛、斎藤三郎(前県会議員)、宮脇梅吉らが弁士となり、床次竹二郎の出席の可能性も囁かれていた。当日、床次の出席は無かったものの、「聴衆は階上階下鮪詰めギッシリの満員で、最初の程は反対党の廻し者から低級な野次を飛ばしたが、応援論客の熱弁が征せられ鳴りを鎮めて静聴した」(『千葉毎日新聞』1930年2月19日付)と言う。当時の演説会において、ライバルのそれに潜り込み、野次を飛ばすことが常態化していたようである。この中で本多は、電車の敷設・瓦斯社の新設・水道の敷設などの所謂「空手形を乱発」(『野田新聞』1930年2月17日付)し、有権者に自身への投票を呼び掛けていた。

本多の選挙運動の特徴として、京成電鉄社員の動員が挙げられる。例えば『東京日日新聞』1930年2月7日付房総版によれば、本多陣営は「社規によつて選挙区に居住させてある社員従業員」を基礎票とし、加えて船橋に第1章で登場した前県会議員の松崎新次郎、松戸に坂巻林之助、柏に丸山鉄五郎、野田に斎藤三郎、市川に浮谷権兵衛を配置した結果、東葛飾郡13,000票・千葉郡市4,000票・市原郡3,000票の計20,000票を見込んでいたと言う。しかし後掲表1と比較すれば、東葛飾郡9,679票・千葉郡市2,312票・市原郡477票・君津郡345票の計12,813票であったから、票読み通りにはいかなかった。特に京成電鉄は1926年4月と1930年4月の労働争議を経験しており²³、社員を選挙区内に居住させたとは言え、必ずしも彼らが本多の思惑通りの投票行動を取った訳ではなからう。この票読みの失敗は、後述する通り、本多の初めての落

選へと繋がっていくこととなる。

(2) 篠原陸朗

『千葉毎日新聞』1930年1月28日付によると、1月27日、篠原の代理人の山本俊は供託金を納め、県地方課に立候補を届け出た。『東京日日新聞』1930年1月29日付房総版の報道の通り、選挙事務所が千葉市の羽出屋旅館、事務長が更科村「屈指の徳望家²⁴」の県会議員の島田弥久（千葉郡選挙区）、参謀が共に千葉市会議員の北澤春平と西川測吉であったことを踏まえると、篠原は東葛飾郡を地盤とする候補でありながら、千葉市と千葉郡の有力者によって支えられていた。1月30日開催の千葉郡市民政会総会が篠原の初めての演説会となっていることは（『東京日日新聞』1930年1月31日付千葉版）、それを裏付けよう。いわば篠原陣営は、捻じれ構造を抱えていたのである。

だからこそ篠原陣営は陣営の引き締めを図る。例えば島田弥久と北澤春平は、民政党千葉県支部が擁立した候補であるにも拘わらず、改めて支部の名で、東葛飾郡・千葉市・千葉郡在住の支部役員に対して篠原への「援助」（『千葉毎日新聞』1930年2月4日付）を乞う文書を配布している。島田は「勅任官を止めさせて立候補させた以上、死して止む決意で極力必勝を期して猛運動をやる外に戦法はない」（『東京日日新聞』1930年2月7日付房総版）と述べ、自身の選挙戦のように、運動に身を投じていく。この甲斐あってか、後掲表1の通り、篠原は千葉市から1,986票、千葉郡から4,526票獲得した。島田の運動は功を奏したと言える。なお東葛飾郡に関して言えば、1月31日に「中山町及び四隣町村有志」（『東京日日新聞』1930年1月31日付千葉版）が協議した結果、同地域が篠原支持に廻ったことを確認出来る。実際、後掲表2が示す通り、篠原は川島と本多を退けて中山町で525票（得票率52%）、隣接する八幡町で323票（得票率40%）獲得している。新聞報道と実際の選挙情勢は、一定程度、リンクしていたようである。

次に演説会を見てみよう。『千葉毎日新聞』1930年2月5日付及び『房総日日新聞』1930年2月6日付によれば、篠原の演説会は6日に富勢小学校・田中村大寶寺、7日に生実小学校・千葉市第三小学校・蘇我家政女学校、8日に白井小学校・更科村真光寺・川崎小学校、9日に手賀村布施小学校・泉小学校、10日に流山赤城倶楽部・松戸常盤館、11日に中山小栗原公会堂・船橋蓬萊館・市川三寶館、12日に津田沼町二宮小学校及び大和田小学校、13日に布佐蕪市場・湖北龍泉寺、14日に検見川小学校・幕張小学校、15日に土村増風邪寺・風早塚崎寺、16日に鎌ヶ谷村・法典村・船橋町・中山町、17日に千城村小学校・都村小学校、18日に行徳常磐館・南行徳・浦安常設館、19日に千葉市大演説会が予定された。地域

的には前述の本多同様、東葛飾郡・千葉郡・千葉市だったようである。現職官僚出身ゆえに、篠原の応援弁士には官界の人物が多かった。例えば『読売新聞』1930年2月4日付千葉版及び『房総日日新聞』1930年2月6日付によると、2月3日の野田興風館での演説会には井上準之助（大蔵大臣）と前述の勝正憲（大蔵省参与官）が駆け付けたと言う。井上敬介によると、民政党は党人派に対する官僚の代弁者の党外人（伊沢多喜男・幣原喜重郎・井上）の優越と言う構造問題を抱えており²⁵、正に篠原はこの党外人の系列下に置かれた候補者だったと言えよう。更に『千葉毎日新聞』1930年2月11日付によると、10日夜に千葉亥鼻館で開催された政見発表演説会において、現職の小泉又次郎逋信大臣が駆けつけている。特に小泉のそれは「人気を呼び聴衆殺到し立見するの余地なく切り切れず、引返すものも多数あつた」（『東京朝日新聞』1930年2月12日付房総版）と報道された通り、多くの有権者の熱気に包まれていた。また『房総日日新聞』1930年2月13日付によると、2月13日に八幡座（八幡町）・三松館（市川町）・小栗原公会堂（中山町）・蓬萊座（船橋町）で開催された演説会には、大蔵官僚出身の磯野定次郎（台湾銀行常務取締役）や理化学研究所長の大河内正敏（貴族院議員）が弁士として参加した。これらの弁士の幅の広さは、篠原の出自が可能せしめたものであり、自らの経歴の産物に他ならなかった。

しかし県支部主導の輸入候補である為、篠原には後援会が無かった。これを補ったのが、前述の民政更新クラブや東葛南部民政同志会（『東京朝日新聞』1929年12月13日付房総版）などに代表される、東葛飾郡の民政党系政治団体であった。この他、『房総日日新聞』1930年2月7日付は、「民政たう第一区こう認候補」を応援する為に、津田沼町の齋藤林作・織戸一郎・田久保節造・岩崎義孝らが津田沼俱樂部（会員380名）を結成したと報じている。その名称から判断すれば、篠原の個人後援会とは言い難く、民政党系の政治団体と思われる。但し、これらの団体に関しては、第4章で示した史料「政治結社調²⁶」（1934年1月現在）を見ても、その名が確認出来無い。恐らく1934年1月時点では、存在していなかったものと思われる。

さて篠原を悩ませたのが、同じ民政党候補の多田満長の動向である。選挙戦が熾烈を極めていくと、「三日に至るや、今まで互に地盤協定の出来てゐたはずの多田派の事務所が千葉駅前蕪市場に開かれるとすると、四日朝には市内到る所に『多田満長』『篠原陸朗』両氏の立看板が向かひ合い、一方、篠原派では三日夜、これまた多田派の向ふを張つて、市原郡牛久町牛久の三橋昇氏方に事務所を開設するといふ始末で、果然千葉郡市、市原は民政両候補の同士討ちが見られることになつた」（『東京朝日新聞』1930年2月5日付房総版）、「多田候補は四日、市川町に現れ山

口影虎氏を参謀として政友派の地盤を食ひいらんとしてゐるので、自然篠原氏も君津、市原方面へ進出のやむなきに至る」(『東京朝日新聞』1930年2月5日付房総版)等と報道された。多田と篠原の勢力地の棲み分けは前述したが、これが遵守されていない様子を窺える。このように互いの地盤を侵食していく多田と篠原の不合理的な関係は修復されること無く続き、「随所に同志討ちの無策を見せ」(『読売新聞』1930年2月15日付千葉版)、「同じ民政党候補を中傷する事実無根んことを述べるとは何事だ」(『東京朝日新聞』1930年2月16日付房総版)と報じられるに至る。中選挙区制度の中、地盤が違えども、民政党候補同士もまた激しく議席を争っていたのである。いわば民政党候補の同士討ちを受けて、中村勝五郎(中山町長)は「丸裸となつて篠原氏のため活動せんとの意向」(『読売新聞』1930年2月15日付千葉版)から町長職を辞し、篠原の応援に全力を尽くすことになったと言う。

篠原の選挙資金の詳細に関しては、確認出来無かった。ただ1点、「非常な勢を示し来つた。又た実弾の豊富」(『千葉毎日新聞』1930年2月18日付)との報道がある。与党民政党候補ゆえに、少なくとも野党政友会よりも豊富な資金力に支えられていたことは間違いなからう。なお升味準之輔の指摘によれば、公認料は1万円だったようで²⁷、これをベースとしていたものと思われる。

(3) 川島正次郎

現職代議士の志村清衛門の立候補を抑えた川島は、『千葉毎日新聞』1930年1月29日付によると、1月30日、代理人の橋本四郎に側近の松本栄一・梨本太兵衛を帯同させ、保証金の供託と県地方課への立候補を届け出た。そして『東京日日新聞』1930年1月30日付房総版によると、川島の選挙事務所本部は前回と同じく松戸町、選挙事務長も引き続き梨本太兵衛が務めることとなった。この他、『東京日日新聞』1930年1月31日付千葉版によれば、選挙事務所は船橋、柏、野田、行徳、千葉市、千葉郡にも設置したと言う。複数の地域に選挙事務所があったことは、前述の本多や篠原と同様である。

選挙運動の中核の第1点は、演説会である。『東京朝日新聞』1930年2月8日付房総版によれば、7日に中山町中山クラブ・葛飾村小学校・八幡町小学校、8日に明村小学校・馬橋小学校・小金町小学校・高木村善光寺・11日に富勢村小学校・田中村小学校・梅郷小学校・新川村小学校・野田小学校・七福村小学校が予定されていた。また『千葉毎日新聞』1930年2月13日付によれば、12日に東葛飾郡浦安・千葉郡大久保・千葉郡大和田・千葉郡検見川、13日に犢橋・都賀・千葉市、14日に更科・千城・白井・都、15日に蘇我・生濱・椎名・誉田が予定されていた。更に『東

京朝日新聞』1930年2月11日付房総版によれば、16日に八木村・富勢村・田中村・新川村・梅郷村・七福村・野田町、18日旭村・福田村・関宿村・二川村・川間村・木間が瀬村・浦安町・南行徳町、19日に松戸町・市川町・船橋町が予定されていた。川島は東葛飾郡から徐々に千葉市郡にシフトし、そして再び東葛飾郡に戻るというスケジュールを立てていた。本多や篠原同様、地理的には地盤の東葛飾郡とそれに隣接する千葉市及び千葉郡が対象となっていたようである。演説会では、「しん時代の代議士、普選時代の候補者たらんとするものが、演説一つ出来ぬものが、果して候補者としての資格があるであろうか²⁸」と論じられた通り、代議士には聴衆の面前で雄弁に語り得る能力が求められていたが、それは弁士も同じであろう。川島の応援弁士は、例えば『千葉毎日新聞』1930年2月14日付によると、12日の検見川の演説会で、川口為之助（県会議員）・軍司善次（文学士）・板倉源一郎（経済学士）・小林八郎（法学士）・矢田秀夫（法学士）・下河原金平（政友会本部特派員）・一瀬房之助（弁護士）らが熱弁を振るい、「盛況で聴衆約七、八百名」を数えたと言う。特に一瀬は千葉市会議員（副議長）を務めると共に、千葉郡千葉町に事務所を構えたのに加えて、匝瑳郡八日市場町・君津郡木更津町・香取郡佐原町・安房郡北條町にも出張所を設置しており、県下に名を馳せた弁護士であった²⁹。また『千葉毎日新聞』1930年2月15日付によると、13日千葉市の演説会では、川島の母校専修大学弁論部の現役学生である杉本一夫と松井政吉が弁士に入った。杉本は川島の「人格論から説き起して熱弁を振」い、松井は「緊縮財政の生んだものは即ち大なる不景気で、其の為め農村は疲弊、農民は困憊の極に達し一日の生活費十五銭で暮らさねばならぬ。之を刑務所に収容されてある刑務者の十四銭の食費に比較して余りに其差が少な過ぎると実例を挙げて浜口内閣の無慈悲な政策をこき下ろし」、約2,000名の聴衆から拍手喝采を浴びたと言う。川島の母校専修大学の学生合計14名は「合宿」（『房総日日新聞』1930年2月13日付）して準備を重ね、2班に分かれて、この日だけでなく、例えば2月16日の野田町興風会館における演説会などにも同行し、「同窓の先輩川島氏」（『房総日日新聞』1930年2月19日付）のために獅子奮迅の活躍を見せ、当選の原動力となった³⁰。篠原のように大物弁士はいなかったものの、母校の学生に象徴される若い力を背景に、川島は連続当選を目指していく。

第2点は、頒布を受けた有権者名簿に基づき送付される³¹、各種郵便物（推薦状・挨拶状・依頼状など）である。これらは各地域の博物館等で今日まで数多く所蔵されており、当時の様相を窺わせてくれる。例えば川島が染谷亮作（元川間村村長）に宛てた印刷物を2点、取り上げよう。1つは「立候補挨拶状」（1930年2月付）³²。そこでは「金解禁の

功を急いだがため今や世の中は不景気のドン底に陥り、国民は生活を脅かされ毎日不愉快な日を送っております」と浜口内閣の金解禁政策を批判すると共に、「政界の英傑犬養」の下で「産業立国、不景気退治」を掲げて選挙に挑むと記されている。そして犬養毅（政友会総裁）と川島のツーショットの写真入の推薦状も同封されており、犬養との関係を前面に押し出したものであった。もう1つは「投票依頼葉書」（1930年2月17日付）³³。そこには「偽善ノ面皮ヲ剥ゲ 虚喝ノ舌根ヲ抜ケ 犬養毅」・「川島を男にして下さい そして犬養さんの下でうんと働かして下さい 願ひです 川島正次郎」と印刷された文言が写真入りで掲載されている。やはりここでも犬養との関係が強調されている。何れも政策では無く、主に有権者の心情に訴える文面であることは、前回1928年2月第16回総選挙のそれと変わらない。中選挙区制度の下、選挙区の面積が総体的に拡大されている中、党総裁とのツーショット写真入りの郵便物は、候補者のイメージを有権者に浸透させる役割を担ったと言えよう。

しかし前回の選挙と異なり、『東京朝日新聞』1930年1月28日付房総版が「野田醤油関係の有権者は約二千名に達しているので、候補者にとっては重役連の意向が極めて重要視されてゐる、前回は大争議中で政友会が争議側を押へたといふので、上下こぞつて政友派の川島氏を応援したが、今回は民政党の多田、篠原両氏何れかに好意を有つている」との報道を見る限り³⁴、野田醤油会社の経営陣の意向が野田地域の有権者の投票行動に大きな影響を与えていたようで、今回は川島を支援し無い状況が確認出来る。最終的に野田醤油の経営陣は、「野田町有志八名は、その後、態度を決定につき協議を重ねてゐたが、結局、政友派の高梨県議と茂木前県議を除く六名だけが野田醤油重役と行動を共にして、民政派の篠原氏を応援することを決定」（『東京朝日新聞』1930年2月1日付房総版）したとの報道通り、政権与党である民政党を支持するに至った。『野田新聞』1930年2月17日付を見ても³⁵、本多を「いづれの方面からしても出馬するのが間違であつた」と、川島を「代議士にならねば喰ふ事の出来ない人、即ち彼れを生かさんが為人命救助的有様」と批判しているのとは対照的に、篠原を「普選に現れた人物本位主義、世相にふさわしき人格の士、一票を加へて選びたき候補」と持ち上げた。これは、野田地域が総体的に民政党支持の雰囲気であつたことを物語る。唯一、野田地域で政友会への支持を窺えるのが、「野田町下駄商組合員等は、極秘で寄々協議中であつたが、政友派本多候補を極力応援することになつたといふ、なお民政派篠原候補応援としては野田町肥料商組合、織物商組合、理髪組合、魚商組合等が何れも十日各々総会を開き申合せた」（『東京日日新聞』1930年2月11日付房総版）との報道である。ここには職種別の支持候補も記されており、下駄商組合は本多支持、肥料商組合・

織物商組合・理髪組合・魚商組合は篠原支持に廻っている。しかし、ここに川島の名は無い。つまり川島は、前回総選挙の際、自身の初当選の原動力となった野田地域、更には同地域の業界団体からの支持を調達出来無い状況に追い込まれていたのである。だからこそ川島は、「川島氏は東葛飾を本拠とするも、本多氏との同士討ちは免れぬところであり、しかも民政派篠原陸朗氏の出馬は確定的であるとされ、到底他郡からの力を借りなければその勝算は期し難い」（『東京日日新聞』1930年1月19日付房総版）と報道された通り、東葛飾郡以外の地域からの集票に力を入れなければならなかった。

そこで目を付けたのが、千葉市及び千葉郡であった。川島の場合、前述の通り、志村清右衛門の地盤の一部を受け継ぐと共に、前回1928年2月第16回総選挙から川島を支持し続けた県会議員の川口為之助がいた。特に川島の川口への信頼は厚く、代理人として彼を政友会本部に派遣し、選挙資金を受け取らせたこともあった。この時、3,000円～7,000円の公認料³⁶が渡されたものと思われる。そこで政友会幹事長の森格が「こんどの川島はどうかね」と尋ねたところ、川口は「こんどの選挙は私がやるんですよ」と答えており³⁷、川口の選挙への力の入れ具合が窺えよう。川口は、川島の選挙を自分のものと同列に認識し、全力を尽くしていく。その一例として、川口は2月9日夜、再び千葉郡市政友会幹部会を開催し、約70名の出席者と協議を重ね、川島支持を再確認して、陣営の引き締めを図った（『東京朝日新聞』1930年2月11日付房総版）。但し「前回志村氏を支持した旧本党系は鈴木前代議士を援助し、前回鈴木前代議士を支持した川口郡（県）議其他の純政友系は川島候補を援助する事となり、完全に鈴木、川島両派に分裂した、従つて最初から支会と別れて本多前代議士を援助する一派と千葉郡市政友は三つに分れた」（『読売新聞』1930年2月11日付千葉版）との報道にある通り、志村は不出馬となったものの、その全てが川島に流れていないことは、ここでも窺える。千葉市及び千葉郡の政友会票は3分割されていたからこそ、川口は組織の引き締め躍起となった。

川口の集票は続く。例えば次の推薦文書を配布した。

今回の衆議院議員総選挙に当たり、我立憲政友会の千葉支会は前代議士志村清右衛門氏を候補者として推薦仕り候処、同氏は已み難き支障の故を以て固辞せられ候に付、数次詮衡を重ねたる結果、候補者として前代議士川島正次郎氏を推薦することに決定致し候間、同氏の当選を期するため貴下の甚大なる御同情と御後援を仰ぎ度、此段得貴意候³⁸

これにより、「川島氏は政友三名の中で一番力が弱く見られていたが、千葉郡、市一万票の志村氏絶対地盤を継承しただけに、見方によつては或

は鈴木氏より有望とも思はれる」(『東京日日新聞』1930年2月12日付房総版)程の勢いを付け、「志村派との合流調つて、着々、千葉郡市への進出を計り、飛躍的戦術を続けて」(『東京朝日新聞』1930年2月14日付房総版)といった結果、後掲表1の得票数となる。即ち千葉市及び千葉郡から川島は4,098票、本多は2,312票、鈴木は879票を獲得した。前回1928年2月第16回総選挙において、志村が千葉市及び千葉郡から獲得した9,717票の内(第3章表2)、川島はその約42%に当たる票を集めたことになる。第6章表3及び第8章表1で示す通り、川島はその後、千葉市及び千葉郡から1932年2月第18回総選挙で5,177票、1936年2月第19回総選挙で5,370票を獲得することになるが、着実にこの地域からの集票力を高め続ける。従って川島は、この地を東葛飾郡に次ぐ“第2の地盤”とすることに成功したと言えよう。それは、川島が戦前期総選挙で連続当選を果たす原動力の1つに他ならない。

最後に、川島が君津郡への進出の足掛かりを作ったことに触れよう。そもそも君津郡には旧千葉8区元代議士(政友会)である木村政次郎(東京毎夕新聞社長)の政治団体である君津大正倶楽部が存在した。木村が引退した今、この君津大正倶楽部の行方が注目を浴びることとなる。そのような中、君津郡北部の一部が「東葛飾郡にて苦戦を予想されている川島正次郎前代議士を応援する事になるらしい」(『千葉毎日新聞』1930年1月28日付)と報道された。前回総選挙で46票しか集められなかった君津郡の方から、川島に接近し始めたのである。ここで大きな役割を果たすのが、川島の母校専修大学同期生の黒川鍋太郎である。前回1928年2月第16回総選挙での君津郡46票の内、実は38票が黒川の郷里である金谷村からだった。その黒川は、次の文書を地元で配布した。

みな様のお心もちただありがたいとおもひます。せんきょについて、私の方から。ごゑんりょしましたが『おまへのたすける候補者ならおれもたすけよう』といはれる人たちがいたるところにおり『えんりょしておるばあいでない』私の親友川島正次郎はいま金もち候補者のはさみうちにあつて非常な苦戦です。しかしこのたたかいは石にかぢりついてでも勝たなければならぬたたかいです。私をたすけると思つて川島を男にして下さい。さいごのおたのみをします³⁹

この文書が川島の得票に如何なる力を与えたかは、定かではない。しかし「川島派はかばかしく進出して来ないが大正系残党の自由投票が相当あるらしい見込」(『東京日日新聞』1930年2月19日付房総版)との報道が為される等、チャンスは少なく無く、最終的に後掲表1の票を集めた。即ち川島は君津郡から199票(内金谷村70票)獲得し、前回の4倍以上の成果を残したのである。川島の全得票数の僅か2%を占めるだけだが、これをベースとして、第6章表3で示す通り、次回1932年2月

第 18 回総選挙で 1,224 票を獲得することを忘れてはならない。川島は専修大学時代に培った人脈の積み重ねを背景として、次第に君津郡にも勢力を広げ、衆議院議員であり続ける力を手に入れるのである。

(4) 選挙戦終盤の攻防

選挙戦終盤、総括や票読みが報道される。例えば「現在の所では多田氏、篠原氏安全、之れに次ぐは本多氏、鈴木氏、川島氏、以上の三候補は共に伯仲の間と見られて居る」(『千葉毎日新聞』1930年2月18日付)との報道は、総体的に与党民政党の有利と野党政友会の不利を反映したものであり、前述した各候補者の選挙運動と対応するものであった。また『東京朝日新聞』1930年2月17日付房総版は「絶対安固と伝へられる本多派は、背後に闘士川島派の奇襲を受け、正面には篠原派の猛撃に合ひ、相当苦戦を伝へられて来たが、殊にほとんど金城湯池とされる京成沿線中地元市川、船橋両町のグラつきと中山町議等の篠原応援とで突然形勢一変」と報道し、川島と篠原に挟撃された本多が苦戦する様相を伝えている。実際、後掲表 2 で示す通り、本多は市川町で 30.5% (前回 54.6%)、船橋町で 27.8% (前回 37.1%)、中山町で 14.0% (前回 35.2%) しか獲得出来ておらず、何れも前回より大幅に票を減らしている。前回 1928 年 2 月第 16 回総選挙とは所属政党 (民政党 → 政友会) は異なるものの、本多の足元は川島と篠原によって切り崩されており、苦戦を強いられていたのである。投票日前日、床次は染谷亮作 (元川間村村長) に対し、「ホンダクセンタノム⁴⁰」との電報を打電していることは、それを物語ろう。しかし本多に関しては、真逆の総括報道も確認出来る。例えば『房総日日新聞』1930年2月19日付は「本多候補の最高点はなん人も否めないところであらう、民政新候補しの原氏に大分地盤をしん食されては居るが、なんと云つても永年築き上げた堅るゐをみすみす敵の奪取に任せもしまい」と報道している。また『房総日日新聞』1930年2月15日付にも、浮谷事務長を中心とした「同志斎藤三郎、大久保一朗、高なし忠八郎」らの奮闘により「東葛の恩人」本多の当選を確実視している。既に示した通り、櫻井良樹は今回の総選挙はそれまでの政党支持があてにならないと指摘したが、正に読めない展開を見せていた。

一方、川島に関しては、前述の通り、引き続き野田地域における苦戦の報道が確認出来る。確かに『東京日日新聞』1930年2月13日付房総版によると、西村政信 (七福村) と島村幾蔵 (川間村) が川島派として選挙運動に携わったと言う。しかし後掲表 2 の通り、七福村 21.0% (前回 51.9%)、川間村 12.2% (前回 52.5%) の得票率に過ぎず、それ程に大きな助力にならなかったようである。そこで投票日前日、「野田醤油会社、総武鉄道では今日の投票日には特に作業時間を三時迄に繰上げ、有

権者従業員の便宜を図る」との企業側の対応を好機と捉え、野田に的を絞り、「一と塊り四千票と言はれる野田醤油王国野田町をめぐって各候補の突撃振は物凄く、川島候補の如き野田を得ると否とに依つて当選の岐るる処と全主力を此方面に注いで」（『読売新聞』1930年2月20日付千葉版）いく。にも拘わらず「劣勢の川島派死物狂ひ」（『読売新聞』1930年2月16日付千葉版）の状況は変わらず、投票日前日の『東京日日新聞』1930年2月19日付房総版によると、政友会千葉県支部の予想ですら、川島は「いま一息」であり、当選は難しいと考えられていたのである。

そして新人篠原は「会社側の応援候補」（『野田新聞』1930年3月15日付＜野田市立興風図書館蔵＞）として、野田醤油会社の全面的支援を受けており、有利に戦いを進めていた。

こうして選挙運動は終了する。そこで投票終了後に報じられた各紙の選挙総括記事を見てみよう。例えば『東京日日新聞』1930年2月20日付によれば、本多は「地盤として金城湯池の南北東葛一帯に根強い強陣を張り、余勢をかつて千葉郡市、市原の野に転戦、東葛では民政篠原候補と対峙、同志川島候補の本拠松戸方面ではやや同士討ちの観を免れず、名主たる金権候補南総へ進出して相当の収穫」で演説回数延べ約50回であった。篠原は「千葉市の本居を出でて、東葛だけで一万三千票を稼がうと大童、小泉通相、横山政務次官などの応援に気を良くして初舞台の割に度胸振りよく評判宜しい方だ、最終日の十九日は再び井上蔵相を千葉市に迎へて最後の奮闘がかりそめにも勅任官をやめての立候補所謂背水の陣」で演説回数延べ約60回であった。なお篠原の陣営の下には、前述の弁士に加えて、商工政務次官の横山勝太郎も駆けつけていたようである。川島は「苦戦また苦戦、時に自転車走らせて東葛の奥地に奮闘の意気を見せてゐるが、これだけでは到底及ばぬと見たか、千葉郡市に猛然と戦線を開いた、本多、鈴木の同志と共に地盤の喰い止めに相当楽でない戦ひを続け」、三候補中、最も苦戦が強いられていた。

この他、『東京朝日新聞』1930年2月20日付房総版も見てみよう。本多は「京成沿線の金城湯池は篠原氏に食はれ、前回の如き成績はとても望み難く、その上背後に川島派から痛撃激しかつたが、川島氏との間に余程の開きあるものと見える」と報道されたが、実際、川島に敗れることから、この報道と実際の情勢の間にはズレがあった。篠原は「井上蔵相のもつとも力強い応援にあり、あるひは鈴木氏を壓すとも伝へられる」と報道された通り、後掲表1の通り、3位の鈴木隆（政友会）に7,903票の大差をつけ、2位当選を果たすこととなる。川島は「何人も確実といふものなきに反し、何人も悲劇したる形勢でないと称されるのが川島氏で、全く逆賭し難い、氏も又十分これを知り、けふ投票締切りまで必死の努力を傾注し、十九日早朝、『善戦よく最後の言論戦にて必勝を期す、

よろしく頼む』の長電を發し、氏独特のカクレたる票をこはんとすると報道され、最後の最後まで粘り強く集票に取り組み、正体不明の「カクレたる票」に望みを繫いだ。

得票数予想は、『東京朝日新聞』1930年2月22日付房総版によると、東葛飾郡での川島の予想得票は約9,000票。実際、後掲表1で示す通り、川島は8,638票を獲得しており、ほぼ予想に近い。この他、『房総日日新聞』1930年2月21日付も票読みを試みている。例えば東葛飾郡の場合、本多10,000票、篠原8,000票、川島6,500票と予想している。しかし現実には、後掲表1の通り、本多9,679票、篠原10,464票、川島8,638票となり、本多のみ予想より票を減らし、逆に篠原と川島は予想よりも多く得票している。

第3節 選挙を終えて

(1) 本多の落選

特筆すべき点は、いち早く準備に取り掛かり、選挙期間中も優勢が伝えられた本多の落選であった。新聞報道から、その原因を5つに纏めてみよう。1つ目は、『千葉毎日新聞』1930年2月23日付が「第一区の本多翁の落選は、某事件が障害をなし、言論が自由ならざりし為めに、従来翁の後援に力ありし野田醤油会社の一徒が、御用候補を応援した為とも伝へられ候」と報じた通り「野田醤油会社」の支援を受けた篠原の存在そのものである。2つ目は、この「某事件」、即ち『東京日日新聞』1928年9月18日付千葉版の報じた通り、京成電鉄の千葉市乗り入れの際、本多が市議員を買収した容疑である。3つ目は、『東京日日新聞』1930年2月23日付房総版が「敗因は政友戦線の不統一が原因だ、一区から政友二名の当選は両派で認めてゐたものだが、鈴木氏の得票の少ないのは地元君津、市原に重きを置かず、同派の本多氏の地盤に侵食して、却つて本多氏の落選を招いたのがよくないと思ふ」と報じた通り、鈴木選挙戦術である。4つ目は、『読売新聞』1930年2月23日付千葉版が「政友が千葉市郡を本拠とする候補者を選ばず東葛本拠の二名」を選んだことと報じた通り、同一政党からの3名の立候補（定数4名）を許した政友会の選挙戦術そのものである。5つ目は、『房総日日新聞』1930年2月26日付が「本多氏は老年であり、今回一回出れば今後は出馬しないのもうけるなら此段とばかり運動費を事務長から渡されて一部分だけを出して大部分はふることにねじ込み」と報じた通り、選挙ブローカーによる買収資金の中間搾取の影響が大きく、買収が有効に作用し無かったことである。特にこれは同情も多く、「東葛の恩人（中略）千葉県に至ほう」（『房総日日新聞』1930年2月15日付）本多はが「私服を肥やさん

と」(『房総日日新聞』1930年2月28日付)した「一部の悪らつな人共の不心得から落選」(『房総日日新聞』1930年2月26日付)したと捉えられていた。

一方、「猛襲も甲斐なく川島氏勢弱し」(『房総日日新聞』1930年2月21日付)と終始劣勢が伝えられていた川島の当選は、「千葉郡市の援助が因を為すと雖も必死の努力が報みられた」(『読売新聞』1930年2月23日付千葉版)からこそのものであり、前述の川口為之助や旧志村派の一部を核とした千葉市及び千葉郡からの集票が功を奏した。第4章で示した通り、多田や本多と異なり後援会を組織していなかった川島だが、演説会や印刷物の配布を中心としたその選挙運動が功を奏した。ライバルの本多陣営幹部某が「川島涙の運動は上よりも寧ろ下にてつ底した為である」(『房総日日新聞』1930年2月26日付)と評した通り、名望家や地方議員よりも、数で勝る一般有権者との結び付きを重視する戦術が、川島の勝因の1つだったようである。この他、「川島氏の戦さ上手には驚く外はない」(『東京日日新聞』1930年2月23日付房総版)と評されており、推測の域を出ないが、「上手」な買収の存在も窺えよう。選挙後、川島陣営の岡田兼吉は「勝算の見込はなかつた、前回に応援してくれた郡下の有力者は殆ど本多氏を応援したためその苦心たらなかつた、金がないために応援者も少なく如何に馬力をかけても当選見込はなかつた」(『東京日日新聞』1930年2月22日付房総版)と語り、喜びを隠さなかつた。事実、第3章表2及び後掲表1が示す通り、東葛飾郡における川島の得票数は前回は大きく下回る。

(2) 得票率から見た地盤

表1: 1930年2月第17回総選挙結果一覧

1位(民) 多田満長			2位(民) 篠原陸朗			3位(政) 川島正次郎		
東葛飾郡	5,988	16.0%	東葛飾郡	10,484	55.2%	東葛飾郡	8,638	66.2%
千葉市	2,301	6.2%	千葉市	1,986	10.5%	千葉市	1,180	9.0%
千葉郡	2,317	6.2%	千葉郡	4,526	23.9%	千葉郡	2,918	22.4%
市原郡	7,261	19.5%	市原郡	1,508	7.9%	市原郡	104	0.8%
君津郡	19,448	52.1%	君津郡	472	2.5%	君津郡	199	1.5%
全体	37,315	100.0%	全体	18,976	100.0%	全体	13,039	100.0%
4位(政) 鈴木隆			5位(政) 本多貞次郎			6位(無) 石橋源四郎		
東葛飾郡	997	7.7%	東葛飾郡	9,679	75.5%	東葛飾郡	581	47.8%
千葉市	242	1.9%	千葉市	507	4.0%	千葉市	135	11.1%
千葉郡	637	4.9%	千葉郡	1,805	14.1%	千葉郡	219	18.0%
市原郡	4,251	32.7%	市原郡	477	3.7%	市原郡	94	7.7%
君津郡	6,856	52.8%	君津郡	345	2.7%	君津郡	186	15.3%
全体	12,983	100.0%	全体	12,813	100.0%	全体	1215	100.0%

出典:衆議院事務局『第17回衆議院議員総選挙一覧』より作成

表2:東葛飾郡各町村の得票数及び得票率一覧

町村名	投票総数	本多(政友会)		川島(政友会)		篠原(民政党)		多田(民政党)		鈴木(政友会)	
		得票数	得票率	得票数	得票率	得票数	得票率	得票数	得票率	得票数	得票率
船橋町	3,229	899	27.8%	697	21.6%	725	22.5%	607	18.8%	248	7.7%
葛飾村	880	408	46.4%	167	19.0%	210	23.9%	74	8.4%	4	0.5%
法典村	276	22	8.0%	15	5.4%	214	77.5%	11	4.0%	9	3.3%
塚田村	175	63	36.0%	17	9.7%	94	53.7%	1	0.6%	0	0.0%
八栄村	600	134	22.3%	270	45.0%	101	16.8%	42	7.0%	46	7.7%
浦安町	1,895	132	7.0%	350	18.5%	31	1.6%	1374	72.5%	2	0.1%
行徳町	1,429	201	14.1%	471	33.0%	395	27.6%	345	24.1%	1	0.1%
南行徳村	749	104	13.9%	186	24.8%	203	27.1%	245	32.7%	1	0.1%
市川町	2,545	775	30.5%	351	13.8%	533	20.9%	795	31.2%	28	1.1%
八幡町	816	221	27.1%	166	20.3%	323	39.6%	88	10.8%	6	0.7%
中山町	1,006	141	14.0%	296	29.4%	525	52.2%	25	2.5%	8	0.8%
国分村	486	157	32.3%	185	38.1%	38	7.8%	93	19.1%	0	0.0%
大柏村	462	217	47.0%	132	28.6%	74	16.0%	29	6.3%	6	1.3%
鎌ヶ谷村	638	256	40.1%	126	19.7%	160	25.1%	54	8.5%	2	0.3%
松戸町	1,565	416	26.6%	582	37.2%	275	17.6%	269	17.2%	2	0.1%
明村	797	195	24.5%	231	29.0%	81	10.2%	283	35.5%	1	0.1%
八柱村	527	234	44.4%	220	41.7%	26	4.9%	40	7.6%	0	0.0%
高木村	522	156	29.9%	277	53.1%	39	7.5%	38	7.3%	1	0.2%
馬橋村	514	126	24.5%	187	36.4%	152	29.6%	27	5.3%	0	0.0%
小金町	597	284	47.6%	187	31.3%	88	14.7%	15	2.5%	1	0.2%
流山町	878	240	27.3%	187	21.3%	370	42.1%	67	7.6%	1	0.1%
八木村	531	247	46.5%	96	18.1%	151	28.4%	18	3.4%	1	0.2%
新川村	641	259	40.4%	107	16.7%	239	37.3%	28	4.4%	3	0.5%
田中村	855	282	33.0%	183	21.4%	338	39.5%	43	5.0%	1	0.1%
柏町	1,068	243	22.8%	252	23.6%	348	32.6%	193	18.1%	5	0.5%
風早村	682	397	58.2%	123	18.0%	127	18.6%	17	2.5%	1	0.1%
土村	513	203	39.6%	119	23.2%	131	25.5%	43	8.4%	5	1.0%
手賀村	784	281	35.8%	160	20.4%	260	33.2%	38	4.8%	37	4.7%
富勢村	609	64	10.5%	27	4.4%	501	82.3%	16	2.6%	0	0.0%
我孫子町	777	172	22.1%	115	14.8%	272	35.0%	174	22.4%	34	4.4%
湖北村	527	107	20.3%	119	22.6%	203	38.5%	23	4.4%	71	13.5%
布佐町	551	84	15.2%	54	9.8%	307	55.7%	9	1.6%	82	14.9%
旭村	494	185	37.4%	147	29.8%	123	24.9%	30	6.1%	4	0.8%
野田町	3,048	393	12.9%	837	27.5%	1,109	36.4%	575	18.9%	66	2.2%
梅郷村	644	116	18.0%	97	15.1%	342	53.1%	72	11.2%	11	1.7%
福田村	689	150	21.8%	249	36.1%	226	32.8%	33	4.8%	26	3.8%
七福村	496	171	34.5%	104	21.0%	115	23.2%	46	9.3%	57	11.5%
川間村	845	360	42.6%	103	12.2%	308	36.4%	39	4.6%	29	3.4%
木間ヶ瀬村	750	290	38.7%	187	24.9%	247	32.9%	22	2.9%	1	0.1%
二川村	763	126	16.5%	185	24.2%	235	30.8%	24	3.1%	190	24.9%
関宿町	514	165	32.1%	74	14.4%	234	45.5%	24	4.7%	6	1.2%
合計	36,367	9,676	26.6%	8,638	23.8%	10,473	28.8%	5,989	16.5%	997	2.7%

出典:『第17回衆議院議員総選挙一覧』より作成

2月20日の投票の結果は、表1の通り、鈴木（政友会）が4回目の、川島（政友会）が2回目の、君津郡を地盤とする多田満長（民政党）が3回目の挑戦にして初めての当選、篠原（民政党）が初当選を果たした。民政党から政友会に復帰した本多は初めて落選する。これは、政友会の苦戦（218議席⇒174議席）を象徴していたのであろう。なお千葉県第1区の投票率は81.1%（全国80.7%）、棄権率は17.2%（全国16.5%）となり、前回のそれに比べると投票率は上昇し、棄権率は下降した。

次に表 2 を作成した。ここからは、次の 3 点が読み取れる。第 1 は、地盤協定について。まず政友会の場合、本多と川島を比較すると、殆どすべての町村で両者は激しく競い合っている。しかも地盤協定に関する新聞報道が無いことから、恐らく地盤協定が存在していないか、若しくは存在していても遵守されていなかったようである。川島と本多のライバル関係は 1924 年 2 月第 15 回総選挙以降、連綿と続いている。本多の政友会復帰により、両者の政党が重複した為、一層、地盤協定の締結と遵守は困難を極める。従って川島と本多が鎬を削り合い続ける以上、両者の間では一方に投票を嚮導する「集団投票⁴¹」は成立し難い。しかし鈴木に関しては、0 票の町村が 5 つある。前述の新聞報道通り、鈴木は東葛飾郡に侵入していたが、この票の片寄りを見る限り、1928 年 2 月第 16 回総選挙同様、少なくとも彼に投票しない程度の合意があったと思われる。次に民政党の場合、君津郡を地盤とする多田が、満遍なく全ての町村で一定程度の票を集めているが、櫻井良樹は、北部は篠原、南部は多田と言う地盤協定が存在したと指摘する⁴²。それを窺わせる事例として、多田が 1 票だけ獲得した塚田村に注目したい。本章で既に指摘した通り、多田と篠原は票の棲み分けに苦勞していたが、塚田村でのこの偏りは、2 人の間で地盤協定が機能し、篠原への投票が嚮導されていたのであろう。この他、野田地域でも、民政党候補の「地盤の協定」(『野田新聞』1930 年 2 月 17 日付<野田市立興風図書館蔵>)の存在が報じられたが、実際の得票率を見る限り、協定が締結されていたとしても、塚田村のケース程には機能しなかったようである。

第 2 は、川島が前回 1928 年 2 月第 16 回総選挙で高い得票率を誇った浦安町 (44% → 18%) と野田地域町村 (平均値 55% → 平均値 22%) で著しく票を減らした反面、引き続き松戸地域 (平均値 46% → 平均値 38%) と行徳町 (45% → 33%) で比較的高い得票率を維持したことである。特に野田地域に関しては、既に本章で示した通り、川島への強い批判が選挙結果に直結し、篠原の後塵を拝した。このように考えると、著しく票を減らした浦安町や野田地域町村は、川島の地盤では無かったと言えよう。但し野田醤油会社の支援を受けていた篠原との票差は、野田町だけでも 272 票に過ぎず、得票率で言えば差は 8.9% でしかない。地盤で無いながらも、川島は野田地域でそれなりに健闘していた。ここで川島と本多の地盤町村を確定したい。仮に① 2 回以上連続して相手より高い得票率の町村、② 2 回以上連続して全候補者の中で最も高い得票率の町村を条件とした場合、川島の地盤は行徳町・八栄村・松戸町・高木村・福田村となり、本多の地盤は葛飾村・大柏村・鎌ヶ谷村・八柱村・小金町・八木村・新川村・土村・手賀村となる。これらの町村は、前回 1928 年 2 月総選挙に引き続き、同じ候補者に投票した有権者が多かったのである。な

お篠原の地盤に関しては、初めての立候補であったことから、次回総選挙の得票率分析の結果で判断したい。

第3は、特定の政党を支持する町村の存在が窺えることである。例えば民政党候補の得票率が異常に高いのが、篠原の法典村 77.5%・富勢村 82.3%、多田の浦安町 72.5%である。また前回総選挙と重ねて見ると、法典村で民政党が 60.8%（本多 50.2%＋志村 10.6%）、富勢村で民政党が 83.6%（本多 83.2%＋志村 0.4%）が占めている。これらは民政党の支持者が多い町村だが、中でも富勢村の場合、第6章表4・第8章表2・第9章表2で示す通り、候補者が誰であっても、常に民政党候補者へ8割以上の票が投じられている。政党の影響力が低い千葉県第1区東葛飾郡だったが、富勢村の極めて多くの有権者は民政党候補者に票を投じていたのである。従って富勢村の中には、有権者が特定個人や組織に嚮導された「集団投票⁴³」の論理を読み取れる。

(3) 費用

表3:選挙運動費内訳一覧

項目	本多(政友会)		川島(政友会)		篠原(民政党)		
	費用	割合	費用	割合	費用	割合	
報酬	選挙事務員	40	0.5%	30	0.4%	50	0.6%
	傭人	637	8.4%	756	10.4%	724	8.8%
家屋費	選挙事務所	176	2.3%	117	1.6%	232	2.8%
	集会会場	1022	13.5%	1004	13.9%	1270	15.4%
通信費	1734	22.9%	1414	19.5%	1156	14.0%	
船車馬費	632	8.4%	678	9.4%	818	9.9%	
印刷費	2301	30.4%	1477	20.4%	2368	28.7%	
広告費	371	4.9%	238	3.3%	382	4.6%	
筆墨紙費	88	1.2%	40	0.6%	119	1.4%	
休泊費	0	0.0%	182	2.5%	250	3.0%	
飲食物費	467	6.2%	458	6.3%	792	9.6%	
雑費	98	1.3%	846	11.7%	78	0.9%	
合計	7566	100.0%	7240	100.0%	8239	100.0%	

出典:『千葉県報』号外(1930年3月8日付)より作成

注:単位は円だが、銭と厘は切り捨てた

選挙費用の一端を確認する為、表3を作成した。選挙後に各候補者が県知事へ提出した公的な選挙費用の総額とその内訳である為、実際のものとは乖離すると思われるが、どの項目に多く費用を割いていたかが窺える。野党候補の川島と本多の場合、前回に比して選挙費用が減少傾向にある為、選挙資金は潤沢で無かったのであろう、1928年2月第16回総選挙の第3章表4と比較しよう。川島の場合、印刷費用(33.4%→20.4%)と雑費(20.1%→11.7%)が減少している反面、通信費(13.7%→19.5%)と集会場費(8.8%→13.9%)が増加すると共に、それまで支出の無かった傭人への報酬が支出されていることを特徴とする。推測の域を出ないが、第1は立候補挨拶状や投票依頼葉書の郵送回数及び対象に関する何かしらの変化、第2は演説会などの集会の強化、第3は選挙スタッフの

増加などを想起し得る。本多の場合、傭人への報酬（15.5%⇒8.4%）・印刷費（34.0%⇒30.4%）を削減しており、その分を広告費（2.6%⇒4.9%）・集会会場（11.4%⇒13.5%）・通信費（20.5%⇒22.9%）・船車馬費（5.7%⇒8.4%）に廻していることが特徴となる。川島と傾向が似ており、同様の変化の可能性は高い。

それでは彼らは、如何なる方法で選挙資金を調達していたのであろうか。例えば河原宏によると、「七勝五敗」（選挙費用 7 万円なら当選・5 万円なら落選）であることから、民政党は幣原喜重郎や仙石貢を通して三菱財閥から、政友会は三井財閥から政治資金を調達していたと言う⁴⁴。しかし前回 1928 年 2 月第 16 回総選挙と異なり、その内実を物語る史料は少ない。川島個人に関して、管見の限り、野田市立興風図書館蔵『野田新聞』1930 年 2 月 17 日付で確認出来るだけである。

東葛銀行のゴテゴテ問題中、某事業家と東葛銀行頭取とを引合せたと言ふ口実のもとに、下層者流の二十円三十円の預金者にすら支払の出来ぬ状態にある銀行より、二三千円と言ふ報酬を受け、昨年十月末、松戸検事局に呼び出され、その事実を自白した

この報道が事実であるならば、川島は選挙資金を調達する為、東葛銀行から資金援助を受けていたようである。1930 年 4 月に倒産する、いわば倒産寸前の銀行から資金援助を受けた川島は、司法から疑惑の目を向けられていた。川島はこのような各種企業や団体を通して、政治資金を調達し、選挙資金に充当していたのであろう。なお東葛銀行は、第 3 章で登場した齋藤三郎が頭取を務めていた。当時の頭取が齋藤か否かは不明だが、前述の通り、齋藤が本多の選挙陣営に名を連ねている以上、東葛銀行が川島と関係を持つとは考え難い。

（4）違反

司法省刑事局が作成した資料によると、千葉県の場合、367 人逮捕中、起訴 294 人（80.1%）・不起訴 73 人（19.9%）となっており、前回 1928 年 2 月第 16 回総選挙と比べて、数値が逆転している⁴⁵。恐らく民政党は確実な選挙違反容疑者を検挙したようである。今回の選挙は「クリーン」だったと縷々、指摘されるが⁴⁶、逮捕者は少なくとも、起訴され、実際に裁判を受ける被告が多い以上、当時の世相がこれを「クリーン」と捉えたとは言い難い。

ここでは、有権者の買収に絞ろう。川島の場合、千葉郡生濱町における買収容疑で、千葉市及び千葉郡における集票の中核的役割を担った川口為之助（県会議員）が起訴された。『東京朝日新聞』1930 年 3 月 21 日付房総版によると、千葉市吾妻町の川島選挙事務所において、川口は鈴木智一に生濱町有権者買収費用 200 円及び謝礼 20 円を手渡し、鈴木は 3

名の有権者を各 10 円で買収したと言う。ここからは、買収費用 200 円の
内、30 円しか使用されていないことが分かる。残りの 170 円は、恐らく
鈴木智一の懐に入っており、買収費用として機能しなかった。まさに鈴
木智一なる人物は、選挙ブローカー的な存在であった。なお川島陣営の
買収行為は、報道上、この件のみで終息する。

むしろ大きな問題に発展したのは、鈴木隆の買収であった。『東京朝日
新聞』1930 年 5 月 4 日付房総版によると、一連の買収行為に関わった
35 人の名前・職業・年齢が報道された。特筆すべきは、町村会議員が必
ず関与していた点である。例えば海産物商の山崎保光（船橋町会議員）
は多田一郎（鈴木隆秘書）から合計 4,000 円を受け取り、合計 59 人を
2,051 円で買収したと言う。元金 4,000 円の内約半分しか使われておら
ず、残りは恐らく山崎の懐に入ったと思われる。「大部分の買収費はブ
ローカーの懐へ」（『東京朝日新聞』1930 年 5 月 6 日付房総版）との報道は、
正鵠を得ていた。鈴木隆は一連の事件を受けて、政友会千葉県支部長を
辞任し、後任には森轟昶（千葉県第 3 区）が就任する。なお、この問題
は、1931 年 4 月 30 日、千葉県地方裁判所で判決が言い渡され、鈴木は
禁固 4 ヶ月（求刑 10 ヶ月）の有罪判決を受けたものの、即日控訴し、引
き続き審議されていく⁴⁷。

これに対して、多田満長及び本多の買収を窺わせる新聞報道は、管見
の限り、確認出来なかった。唯一、本多陣営の「実弾戦」（『野田新聞』
1930 年 2 月 17 日付）を巡る報道があった程度である。この相違はどこ
に求められるのであろうか。推測の域を出ないが、輸入候補の篠原を除
き、買収報道の無い多田及び本多、買収が露見した川島及び鈴木、この
両者を比較すれば、個人後援会の有無が挙げられよう。特定個人を代議
士に導くことが至上命題である個人後援会は、候補者とのパーソナルな
結びつきの度合いが強い。従って買収行為があったとしても、後援会な
るフィルターで濾過すれば、露見の可能性は低いと言えよう。

第 4 節 選挙後の代議士の政治活動

（1）川島正次郎

連続 2 期当選を果たした川島は、次の 3 点の変化を見せた。第 1 は、
応援されるだけの存在から脱皮を図り、他者を応援する側の役割を担い
つつあった点である。例えば『東京日日新聞』1930 年 9 月 14 日付千葉
版によると、1930 年 8 月 25 日、川島は神奈川公会堂（横浜市）で開催
された横濱政友院外団主催の不景気打開演説会に弁士として参加してい
た。そこで浜口雄幸民政党内閣の経済政策を批判した為、神奈川署員か
ら中止命令を受けたものの、演説を続け、後日の警察への出頭が命ぜら

れた。しかし川島は出頭しなかった為、治安警察法違反として告発されたと言う。

第2は、1期目以上に議会での活動が目立つ点である。事例を2つ紹介しよう。1つは初めての本会議（第59議会）での発言である。川島は治安警察法改正を巡る議論の中で登壇し、「現ニ現在ノ政府ガ行ッテ居ルガ如キ、少シデモ内閣ニ不利益ナル記事、若クハ現内閣ノ施政ヲ糾弾スル言論ハ、直チニ中止スルガ如キハ、甚ダ怪シ」と発言した上で、「現内閣政府ノ頭ヲ改造スルコトハ賛成デアリマスケレドモ、法案ヲ改造スルコトニハ賛成致シマセヌ」と述べ、浜口雄幸民政党内閣を攻撃した⁴⁸。もう1つは第59議会の中央卸売市場法中改正法律案委員会での発言である。川島が市場関係者の支持を得ていたことは、既に第2章で示した通りである。また以降の第6章及び第8章でも論じる通りである。川島は自身の支持団体を保護する為、議会で発言を繰り返していたのである。即ち法案提出者の民政党の藤田若水（広島県第1区）が「生産者消費者ガ不利益」だから「生産者カラ消費者ニ直接ニ行ケル途ガアレバ、直接ニ行ッタ方ガ宜イチャナイカ」と卸売人・仲買人の存在を否定するのに対し、川島は「実例」を示せと激しく詰め寄る⁴⁹。この2つの事例だけでも、有権者は川島に対して、時の政権与党を激しく攻撃する舌鋒鋭い多弁の士としての印象、支持団体の為に汗をかく代議士としての印象を抱くことは、想像に難くない。前述した、また後述する地元選挙区における議会報告演説会の背景は、ここで培われていたのである。なお川島は第58議会後の1930年5月18日党大会で政務調査会理事、第59議会後の1931年3月29日党大会で引き続き政務調査会理事を命ぜられた⁵⁰。党内主流派に所属していた川島は、当選2回でありながら、着実に党務のキャリアを積んでいく。

第3は、一層、地元選挙区における議会報告演説会を数多く開催し、有権者との結び付きを志向していた点である。他の千葉県第1区の候補者に関しては、新聞報道を見る限り、そのような活動が殆ど確認出来ない。国政の現状を地元有権者に提供する演説会は、川島と有権者を繋ぐ有効な回路であった。1930年2月第17回総選挙後の最も早い例としては、1930年4月26日の野田町共栄館における演説会が挙げられる（『東京朝日新聞』1930年4月24日付房総版）。本章で既に示した通り、川島は野田地域で議会報告演説会を開催していなかった筈だが、今回の総選挙で野田地域からの集票が振るわなかったからであろう、その反省を踏まえて、この地で演説会を設定したと思われる。中でも大規模に宣伝・実施されたのが、1930年6月11日、政友会総裁の犬養毅を迎えた演説会である。例えば『千葉毎日新聞』1930年6月10日付によると、この日は野田町興風館（16時～19時）と松戸町常盤館（20時～23時）の2

会場が設けられたと言う。内容は犬養「在野党の立場に於て」・川島「総選挙より臨時議会へ」・大口喜六（愛知県第5区）「なぜ不景気になったか」・砂田重政（兵庫県第1区）「景気はどうして直るか」で、合計4名であった。時期的に世界恐慌や昭和恐慌の最中だけに、経済政策に関する内容が目立つ。特に野田町のそれは参加者が2,500人を越え、「後ろより続く殺到の聴取は収容し切れずして空しく場外に佇立する素晴らしい盛況」だった。また松戸町は「大雷雨」の悪天候ながらも、「無前の盛況成功裡」に終わった。当選2回の40歳の川島が、有権者に対して、政友会総裁の犬養と結び付いていることを示した瞬間であった。この他にも、『房総新聞』1930年9月11日付によると、9月14日に柏町柏館と我孫子町我孫子倶楽部で開催された「不景気打破大演説会」では、田子一民（岩手県第1区）と中野寅吉（旧福島県第7区元代議士）が応援弁士として駆けつけている。『房総新聞』9月13日付によると、9月15日に八栄村三咲小学校で開催された「農村振興演説会」では、同じく中野寅吉が応援弁士として駆けつけている。『房総新聞』9月16日付によると、9月19日に行徳町と中山町小栗原公会堂で開催された「不景気打破演説会」は、井上孝哉（岐阜県第2区）・大口喜六・加藤久米四郎（三重県第1区）が応援弁士として駆けつけている。年が明けても、川島の地元選挙区での演説会は続く。例えば1931年6月8日、津田沼大久保演芸館と二宮村櫛田館で演説会が開催されている。川島の他、代議士の安藤正純（東京府第3区）と坂本一角（東京府第7区）が弁士として応援に駆け付け、浜口内閣の緊縮財政による「不景気打破」（『読売新聞』1931年6月7日付千葉版）を論じた。また1931年6月20日、船橋町蓬莱座でも開催されている。弁士は川島の他、高橋熊次郎（山形県第1区）・田子一民（岩手県第1区）・太田正孝（静岡県第3区）・松本栄一（弁護士）が務め、ここでも「景気打破を表看板」（『千葉毎日新聞』1930年6月19日付）に掲げた内容であった。更に『東京朝日新聞』1930年7月5日付房総版1931年7月14日によると、松戸町常盤館・流山町小学校でも開催されている。1928年10月時点での党内派閥に基づき⁵¹、川島の応援弁士を分類すると、鈴木喜三郎派の川島の下には、同じく鈴木派の田子、久原房之助派の坂本、水野錬太郎派の加藤、旧革新倶楽部系の砂田と大口、「態度疑問」の安藤・井上・高橋となる。旧革新倶楽部系の代議士と派閥色の薄い代議士からの応援に加えて、それ以外の派閥にも人間関係を拡大していた様子が窺える。但し参加者数が判明しておらず、効能は必ずしも明らかではない。ともあれ他候補者に見られない演説会を頻繁に開催することで、川島は有権者に対し、議会で活躍する代議士としてのイメージを提供することとなったと思われる。

こうして成長を遂げた川島だが、衆議院派遣の欧米視察に参加し、活

動の幅を広げていく。『読売新聞』1931年7月28日付千葉版によれば、川島は政友会の本田義成（東京府第1区）ら3名と共に、8月中旬に出発し、満州・モンゴル・シベリア・ロシア・フランス・ドイツを視察した上で、10月にルーマニアのブカレストで開催される第27回列国議会同盟会議に参加、12月に帰国することとなった。途中、立ち寄ったソ連に対しては、『士農工商』そのままの階級的制度が表はしてゐます、共産主義一何処へ行く、といふ感じを受けました」（『千葉毎日新聞』1931年10月6日付）との印象を述べている。共産主義国ソ連に対する川島の分析視角は⁵²、この時に初めて培われたのであろう。但しベルリン滞在時に満州事変が勃発した為、急遽、予定を変更。会議には参加せず、スイスのジュネーヴで開催された国際連盟理事会を見学後、イタリアのナポリ発の船便で11月24日に帰国した。

連盟理事会を傍聴した日本人は、「本社特派員及び新聞記者の外に川島氏ただ一人」（『東京朝日新聞』1931年12月9日付房総版）であったことから、川島の発言は各新聞で大きく報じられる。例えば『読売新聞』1931年12月3日付千葉版において、川島は満州事変を「特定国家間の地方的係争」と捉え、従って「国際連盟の問題」としてはふさわしくないと述べていた。続けて日本代表として参加していたフランス大使の芳澤謙吉（犬養毅の娘婿）に対しては、フランス語が「拙な」く、結果として中国代表の後塵を拝し、日本の立場が苦境に追い込まれていったとも述べている。なお『千葉毎日新聞』12月3日付にも、同様の川島の発言が報じられている。また『東京朝日新聞』1931年12月9日付房総版では、「あちらへ行つて感じた事は日本といふ国の世界的位置ですね、欧州人の頭にはチョンまげ時代の日本キリ知つてゐない」と日本の対外宣伝力の低さを嘆くと共に、「日本は公使館費といったものを削つてもオリンピック派遣費の七万円をうんと増額してやりたい」と、そしてせめてもスポーツを通じて日本の存在を彼等に知らせてやりたい」とも述べ、スポーツを通じた日本の発信力の強化を提唱している。特にスポーツへの着目は、戦後の川島の東京五輪担当大臣（池田勇人内閣）就任、専修大学総長時代のスポーツ重点化⁵³等に繋がると言えよう。川島にとって、唯一の国際連盟理事会の目撃者と言う肩書は、ある種の箔となり、地盤と政党を同じくするライバル本多貞次郎との差別化に資すると思われる。

（2）本多貞次郎

個人後援会を持つにも関わらず、本多は初めての落選を経験した。本多はこの後、「京成電車社長を辞すると共に、公私一切の職を捨て、市川町の自邸をたたんで東京市に引揚ぐるとの決意」（『読売新聞』1930年2月25日付千葉版）を示し、自邸は「別荘」（『房総日日新聞』1930年2

月 26 日付) にする予定だと報道された。すると市川町会議員は、一同、「引留の策をたん願」(『房総日日新聞』1930 年 2 月 28 日付) したと言う。一度は政界からの引退を決意した本多だが、恐らく系列下の地方議員からの慰留を受けて、再起に向けて歩み出すこととなる。それは、第 6 章で示すこととする。

(3) 篠原陸朗

初当選後の篠原は、川島同様、議会報告演説会を開催し、有権者との直接的な結びつきを志向する。例えば野田市立興風図書館蔵『野田新聞』1931 年 6 月 28 日付の記事を紹介しよう。即ち 6 月 9 日 16 時、野田町興風会館大講堂で開催された。篠原が与党民政党であることから、浜口雄幸内閣の櫻内幸雄商工大臣(島根県第 1 区) が応援弁士として野田町を訪問した。櫻内は醤油関連の工場などを見学後、演説会に出席。そこでは、内外情勢や内閣の政策を説明したと言う。しかし何と云っても、野田町だけに、櫻内は「天下のキッコーマン」の「海外進出雄飛、世界の醤油王国としての実現を望む」と語り、演説で野田町の人々を奮い立たせた。この後、篠原が登壇し、「氏一流の経済論」を語った。そして最後に、本章で縷々、登場した篠原の大蔵官僚時代の先輩、前大蔵省参与官の勝正憲(福岡県第 4 区) も登壇し、「時間のなかつた関係上、簡単ではあつたが篠原氏を紹介」。演説会は「近来稀の満員を以て大成功」となり、19 時 20 分に解散した。まさに「我等の町の代表代議士演説会」に相応しい内容であつたと報じられている。

しかし篠原の議会報告演説会は、管見の限り、これのみであつた。川島が演説会を重ねたのに対し、極めて対照的であつた。篠原は、有権者との直接的な結びつきを積み重ねることが出来なかつたようである。これは、第 6 章で示す通り、1932 年 2 月第 18 回総選挙における篠原の苦戦、更には落選へと繋がっていくこととなる。

- 1 田中義一内閣の崩壊から浜口雄幸内閣の成立に関しては、村井良太『政党内閣制の展開と崩壊——一九二七～一九三六年——』（有斐閣 2014年）第1章及び第2章、小山俊樹『憲政常道と政党政治——近代日本二大政党制抗争と挫折——』（思文閣出版 2012年）第5章及び第6章が詳しい。
- 2 櫻井良樹「選挙分析から見た昭和初期における野田市域と東葛飾郡」（『野田市史研究』第12号 2001年）143頁。
- 3 「十月下旬における政友会の実情」（国立国会図書館憲政資料室蔵『鶴見祐輔関係文書』R39）。
- 4 帝国議会会議録検索システム「競馬法中改正法律案委員会 第二回 昭和四年二月六日」12頁。
- 5 帝国議会会議録検索システム「未成年者飲酒禁止法中改正法律案外一件委員会 第五回 昭和四年三月二十二日」21頁。
- 6 野田市立興風図書館蔵『野田新聞』1930年2月1日付によると、川島は「前回総選挙を以て働いた有志を熱海方面へ招き」、慰労会を催す等、その働きを誇ることは忘れていなかった。
- 7 『房総 町村と人物』（多田屋書店 1918年）156頁。
- 8 加藤政之助監修『立憲民政党史』下巻（原書房 1973年）726頁によると、志村はこの時、民政党本部幹事を務めていた。
- 9 『読売新聞』1930年1月18日付千葉版。
- 10 栗屋憲太郎『昭和の歴史⑥ 昭和の政党』（小学館ライブラリー 1988年）226頁。なお政党支部に関する研究は、極めて少ない。県レベルのそれを分析したものとしては、明治期の政友会埼玉県支部を事例とした小山博也『明治政党組織論』（東洋経済新報社 1967年）、全国的府県を俯瞰した升味準之輔『日本政党史論』第4巻（東京大学出版会 1975年）及び第5巻（1979年）が挙げられる程度である。そのような中、大西比呂志『横浜市政史の研究——近代都市における政党と官僚——』（有隣堂 2004年）第6章は、神奈川県支部と横浜支部を分析した貴重な研究である。
- 11 社説「政党地方幹部を排除せよ」（『房総日日新聞』1930年1月11日付）。
- 12 『東京朝日新聞』1930年1月18日付房総版。
- 13 千葉県第1区の場合、予備投票による推薦候補者決定の形式は、他に見られない。理由は2つ考えられる。1つは、競争者が前回1928年2月第16回総選挙で川島と政友会公認候補の座を争った斎藤三郎だからであろう。この斎藤を担ぎ出そうとする支援者の存在は、『千葉毎日新聞』1930年1月31日付からも確認出来る。但し、かかる類の報道はそれ以降、確認出来ず、斎藤は後述の通り、本多の選対スタッフの一員となる。もう1つは、予備投票なる形式を導入すれば、当選者に立候補の正当性を付与することが出来るからであろう。
- 14 『房総人名辞書』（千葉毎日新聞社 1909年）530頁。
- 15 野田市立興風図書館蔵『野田新聞』1930年2月1日付によると、篠原は当時の千葉県知事である後藤多喜蔵の「親友」と共に、浜口雄幸民政党内閣の閣僚の中に「親族」と言う。
- 16 清水唯一朗『近代日本の官僚——維新官僚から学歴エリートへ——』（中央公論新社 2013年）321頁。
- 17 内務官僚の事例だが、黒澤良『内務省の政治史——集権国家の変容——』（藤原書店 2013年）第1章、拙稿「1930年前後の内務官僚に関する覚書——政治思想の多元化と多様化を巡って——」（『研究紀要<二松學舎大学附属高等学校>』第11集<2012年>）が詳しい。
- 18 前掲『房総人名辞書』471頁。
- 19 野田市郷土博物館蔵『染谷静男家文書』A-0201-27。
- 20 前掲『房総 町村と人物』159頁。
- 21 『読売新聞』1930年1月28日付千葉版において、篠原は「小学校は東金」と述べている。
- 22 前掲『房総 町村と人物』217頁。

- 23 京成電鉄を含む千葉県の労働運動に関しては、三浦茂一・高林直樹・長妻廣至・山村一成『千葉県の百年』(山川出版社 1990年)第7章(高林直樹執筆)、石井進・宇野俊一編『千葉県の歴史』(山川出版社 2000年)310頁(宇野俊一執筆)、『千葉県の歴史通史編 近現代2』(千葉県 2006年)380~391頁(小川信雄執筆)が詳しい。
- 24 前掲『房総 町村と人物』126頁。
- 25 井上敬介『立憲民政党と政党改良—戦前二大政党制の崩壊—』(北海道大学出版会 2013年)270頁。この井上によると、民政党は党外人を媒介として官僚との協調を図った為、短期的な政治的安定を手に入れたものの、党の官僚依存をもたらしたとも指摘している(273頁)。
- 26 昭和9年1月「政事結社調」(岡山県立記録資料館<国立国会図書館憲政資料室蔵>『松本学関係文書』R13)。但し、この史料で登場する結社は、「政党本部支部又ハ後援団体等ニシテ届出アリタルモノ」に限定されている。
- 27 升味準之輔『日本政党史論』第5巻(東京大学出版会 1979年)267頁。
- 28 社説「雄弁部組織と選挙革正団」(『房総日日新聞』1930年1月24日付)。
- 29 前掲『房総 町村と人物』59頁。
- 30 母校専修大学の学生と川島との関係については、拙稿「専修大学と川島正次郎」(『専修大学史紀要』第5号 2013年)30~31頁が詳しい。
- 31 内務省地方局「昭和五年二月執行 衆議院議員選挙調」(国立国会図書館憲政資料室蔵『大野緑一郎関係文書』R25)。
- 32 前掲『染谷静男家文書』A-0201-21。
- 33 前掲『染谷静男家文書』A-0201-13。
- 34 この記事中、政友会が争議側を抑えたとあるが、『野田醤油株式会社三十五年史』(1962年)を見る限り、そのような記述は無い。但し1927年~1928年の労働争議の結果、「労働組合は全く影を没して明朗な労使協調が成立した」(135頁)とある。これが与党政友会の関与を示すのであろう。
- 35 前掲『染谷静男家文書』A-0201-15。
- 36 前掲『日本政党史論』第5巻267頁。
- 37 黒川鍋太郎『川口先生悲吟帖』(千葉公報社 1968年)195頁。
- 38 『千葉毎日新聞』1930年2月14日付。
- 39 『千葉毎日新聞』1930年2月18日付。
- 40 「1930年2月17日付染谷亮作宛床次竹二郎電報」(前掲『染谷静男家文書』A-0201-03)。
- 41 浅野和生「戦前選挙における町村単位の集団投票—第十六回~二十回総選挙における熊本一区の投票結果の分析—」・同「戦前期における地方選出代議士の選挙区での活動—熊本第一区、大麻唯男の研究—」・同「戦前期熊本における中央型政治家と地方型政治家」(大麻唯男伝記研究会編『大麻唯男 論文編』<財団法人櫻田会 1996年>)。
- 42 前掲櫻井「選挙分析から見た昭和初期における野田市域と東葛飾郡」135頁。
- 43 浅野和生「戦前選挙における町村単位の集団投票—第十六回~二十回総選挙における熊本一区の投票結果の分析—」、同「戦前期における地方選出代議士の選挙区での活動—熊本第一区、大麻唯男の研究—」、同「戦前期熊本における中央型政治家と地方型政治家」(大麻唯男伝記研究会編『大麻唯男 論文編』<財団法人櫻田会 1996年>)。
- 44 河原宏「第27代 浜口内閣」(林茂・辻清明編『日本内閣史録』第3巻 1981年 第一法規)191頁。
- 45 司法省刑事局「昭和三・五・七年施行衆議院議員選挙事犯調査表」(岡山県立記録資料館<国立国会図書館憲政資料室蔵マイクロフィルム>『松本学関係文書』R10)。
- 46 例えば季武嘉也『選挙違反の歴史—ウラからみた日本の百年—』(吉川弘文館 2007年)141頁。
- 47 『読売新聞』1931年5月1日付千葉版。

-
- 48 帝国議会会議録検索システム「昭和六年二月十三日 衆議院議事速記録第十二号 治安警察法中改正法律案外二件 第一読会」264～265頁。
- 49 帝国議会会議録検索システム「中央卸売市場法中改正法律案（藤田若水君外四名提出）委員会議録 第二回 昭和六年三月二十三日」4頁。
- 50 山本四郎校訂『立憲政友会史 補訂版』第7巻（日本図書センター 1990年）356頁・622頁。
- 51 前掲「十月下旬における政友会の実情」（前掲『鶴見祐輔関係文書』R39）。
- 52 戦後だが、川島は「唯物史観に立っているマルクス主義が、成功しないということは、だいたい五十年間のソビエトの歴史でわかった」として批判的見解を述べているものの、同時に「将来の政治体制は共産主義と、資本主義との長所をとったもの」が相応しいのではないかとも述べている。ややデフォルメ化した表現だが、川島は自由と平等の観点からの政治体制の構築を重視していたようである（川島「一九七〇年を迎えて」＜川島正次郎先生追想録編集委員会『川島正次郎』交友クラブ 1971年＞506頁）。
- 53 前掲拙稿「専修大学と川島正次郎」33頁。

第6章 1932年2月第18回総選挙と川島正次郎

1930年2月第17回総選挙で勝利を収めた浜口雄幸民政党内閣だったが、民政党政権下、千葉県知事は目まぐるしく変わり続ける。まず1930年8月26日、内閣の地方官大移動により、政友会と繋がりのある後藤多喜蔵（義父が原敬と親交のあった阿部浩）は休職。代わりに江木翼鉄道大臣の支援を受け¹、宮崎県知事の民政系石田馨が転任した。1931年6月27日、この石田も内務省神社局長に転任。代わりに群馬県知事から堀田鼎（元警視總監の堀田貢の実弟）が赴任した。しかし同年11月9日、翌年1月の県会議員選挙を見据えて、堀田は休職。代わりに内務省地方局財政課長の岡田周造が赴任する。

浜口はロンドン海軍軍縮条約の調印を巡り、厳しい政権運営を強いられていたが、調印後の11月14日、東京駅で襲撃を受け、重傷。病状は悪化し、1931年4月13日、首相の職を辞した²。浜口の後継は、元老西園寺公望の推薦通り、再び若槻礼次郎が務めた。第2次若槻内閣の最中の1931年9月18日、柳条湖事件が発生。いわゆる満州事変である。国家的危機に直面した若槻だが、安達謙蔵内務大臣の協力内閣運動を抑えきれず、12月11日、内閣総辞職した。なお安達は、協力内閣運動に参加した中野正剛・富田幸次郎・風見章らと共に民政党を離党。後に国民同盟を結成する。元老西園寺公望は政友会総裁の犬養毅を後継首相に推薦。12月13日、犬養内閣が誕生した。しかし少数与党であり、解散総選挙は避けられない状況であった。そこで12月8日、千葉県知事が交代。岡田は山口県知事に転任となり、警察行政に長じた大久保留次郎（元台湾総督府警務局長）が就任した。この下で、政党政治期の最後の県会議員選挙と総選挙が実施される。

今回の総選挙に関しても、千葉県第1区の場合、野田地域の投票結果を事例とした櫻井良樹の研究が貴重である。櫻井の指摘は、次の3点に纏められる³。第1は、1928年2月総選挙と比べた場合、県会議員選挙とその連動性が小さいことである。しかし、これは、投票結果レベルであって、選挙運動レベルでは関連性が見られると言う。第2は、代議士から県議員、そして各町村議員へと下降する集票システムが存在したことである。しかし両選挙の場合、県議員への支持票が必ずしも総選挙立候補者への投票数に繋がっていないと言う。第3は、民政党の各町における投票が1人に集中しており、地盤協定が厳格に実行されていたことである。本章でも、この櫻井の成果を共有しつつ、分析を重ねていく。

第1節 前哨戦—1932年1月県会議員選挙と代議士—

(1) 本多貞次郎の動向

『千葉毎日新聞』1931年11月3日付によると、1931年11月3日、政友会千葉県支部は支部事務所で県議選対策協議会を開催し、各選挙区の状況報告の上、

公認候補数を決定した。しかし具体的な候補者調整が行われた形跡は、見られない。1931年12月28日、加納屋本店で開催された県議総会も同様で、選挙対策について「種々協議」（『読売新聞』1931年12月25日付千葉版）した程度であった。他選挙区、例えば印旛郡（千葉県第2区）や山武郡（千葉県第3区）では、政友会千葉県支部の下部組織的な支会が組織的に候補者の調整に当たった⁴のとは対照的である。未だ政党支部が設置されていない東葛飾郡の場合⁵、第3章で示した1928年1月県会議員選挙同様、代議士（含候補者）が主導的な役割を担っていく。

前回1930年2月第17回総選挙で落選したとは言え、京成電鉄社長の本多貞次郎（75歳）が次回総選挙を睨み、大きく県会議員選挙に関与していく。例えば1931年12月23日、本多は「県議選候補の人選」（『読売新聞』1931年12月24日付千葉版）会議、12月26日に「県議候補者推薦会」（『読売新聞』1931年12月27日付千葉版）を開催している。当初、本多は4人の候補者を擁立しようと考えていた。その1人が「本多派では船橋町現町会議員中から物色中で野本啓三郎氏に交渉中」（『東京日日新聞』1932年1月10日付千葉版）との報道通り、船橋町の野本啓三郎なる人物であった。野本の詳細は不明だが、これは最終的に「断念」（『読売新聞』1932年1月14日付千葉版）する。もう1人が松戸町居住「本多派」（『読売新聞』1932年1月13日付千葉版）で薪炭商の福岡卯之助（54歳）である。しかし「六日、京成電車本社で本多社長と福岡両氏会見、何事か打合せる所あったが今の所出馬か否かはつきりしてゐない」（『東京朝日新聞』1932年1月7日付房総版）との報道通り、福岡本人は乗り気ではなかった。しかし「松戸町議小林善作氏外同町有力者は八日夜、同町海老屋旅館に会合、川島代議士派の候補梨本太兵衛氏に対抗して自派（本多派）からも出馬さすべく協議を行ひ満場一致で福岡卯之助氏を推すことになり、九日早朝、町議椎名宗康外三氏が出棄し推薦候補として届出た」（『東京朝日新聞』1932年1月10日付房総版）と報道された通り、本多は川島に対抗する為、松戸町会議員の協力を仰ぎつつ、福岡の擁立を推し進めていく。当の福岡は、投票日1週間前になっても「いまだ決心がつかず」（『東京朝日新聞』1932年1月13日付房総版）と逡巡していたが、1月14日に漸く「候補を辞退」（『東京朝日新聞』1932年1月15日付房総版）した。

従って実際に本多が擁立した候補者は、2人となった。1人目が、新人の浮谷竹次郎（45歳）である。1928年2月第16回総選挙と1930年2月第17回総選挙で本多の選挙事務長を務めた浮谷権兵衛（県議員）の弟である竹次郎は、農科大学（現北海道大学農学部）卒業後に宮城県農林技師などを経て、本多が社長を務める京成電鉄に入社。そして市川町会議員を2期務めた後、1930年2月に市川町長に就任しており、その職を辞しての立候補であった。前述の通り、船橋町からの候補者擁立を断念した本多は、この地域の本多支持者を「挙つて市川町の政友系本多派の浮谷竹次郎氏を極力支持」（『読売新聞』1932年1月14日付

千葉版) させることとなった。つまり浮谷は船橋町と市川町の本多支持者を基盤とする候補であった。

2人目が、染谷正治(31歳)。我孫子町生まれの染谷は、在郷軍人会我孫子分会長や東部養蚕組合長などを歴任後、1927年3月に我孫子町長に就任。1946年9月迄その職に在り続けており、まさしく我孫子を代表する名望家であった。但し本多の染谷擁立の目的は、「政友本多系から我孫子町長染谷正二氏を盛り立て成島氏に対抗せん計画」(『読売新聞』1932年1月8日付千葉版)との報道通り、川島への対抗戦略では無く、民政党県会議員候補の成島勇への牽制と言う側面が強かったと言えよう。何れにせよ、本多は2人の現職町長を擁立し、県議員に關与していく。

(2) 川島正次郎の動向⁶

川島は、3人の候補者を擁立した。1人目が、今までの川島の全ての総選挙で選挙事務長を務めた梨本太兵衛(48歳)。松戸町で回漕店を営む梨本家に入婿した太兵衛は、義父が松戸町会議員を務めていたことに加えて、自身も松戸町会議員の職にあった。「選挙費用全部も親分川島正次郎代議士が保証」(『読売新聞』1931年12月27日付千葉版)していた関係を見れば、選挙費用を負担してもらった梨本は、正に川島直系候補であった。年明け、「梨本太兵衛氏は六日同町有力者十余名と上京、川島代議士と会見、運動資金その他の打合せ」(『東京朝日新聞』1932年1月7日付房総版)、準備は着々と進められる。また「町内有志亀田百太郎、立澤捨吉、湯浅八郎氏等、御大川島正次郎氏を訪問『どうだ梨本を出すやうに後援するかせぬか』の膝詰談判を行ひ成功した」(『読売新聞』1932年1月8日付千葉版)とある通りと、梨本は松戸町の有力者からの自発的な支援も得た⁷。川島はこの梨本の当選を演出する為、染谷亮作(元川間村村長)に対して、「各町村有志諸氏の熱望に依り推薦候補として出馬致候、同君は候補者中最適任者として各方面の推賞多大なるものあり、同君を県会に送ることは我々同志の誇りなりと確信致候⁸」と推薦状を送付し、支持拡大に努めた。また政友会総裁犬養毅の署名入りの「当選致す様御尽力被為下度」との推薦状、松戸町・小金町・流山町・柏町・我孫子町・明村・八木村・田中村・土村・馬橋村・高木村・八柱村・富勢村・風早村・手賀村・湖北村・布佐町・新川村の各有志による「同志相謀り同君を県会議員候補者に推す」との推薦状も有権者に送付しており⁹、梨本は政友会・地元選出代議士・地域有力者の三重の支援を受けた、重厚な立候補であった。その結果、『読売新聞』1932年1月21日付千葉版によれば、松戸町は「本多、川島両派の対立の甚だしい処」であるにも拘わらず、「梨本氏独り舞台となつて選挙熱上らず、相当棄権者を出した模様」と報道される程、梨本有利の情勢であった。

2人目が、船橋町の弁護士松本栄一(38歳)。第3章で示した通り、松本は定数6名の前回1928年1月県議員選挙で民政党から出馬した際、川島の支援を

受けていた。この時の県会議員選挙で松本は 16 名中 15 位 (771 票) で惨敗したが、その後は 1929 年に船橋町会議員に初当選し、和歌山県出身で地縁が無くとも、地域で一定の信頼を得る立場となっていた。彼は『読売新聞』1932 年 1 月 17 日付千葉版で「船橋の松本は同じ政友でも川島系」・「船橋の松本氏は川島代議士の直属」と評された通り、生粋の川島系列下の人物であった。事実、松本は第二次世界大戦後、川島正次郎連合後援会会長を務める。但し船橋町に関しては、「地盤協定を行つたが遂に成らず、南部浮谷氏は本多系を背景に市川町を中心として松本候補の地盤にまで進出、松本候補も浮谷候補の地盤にまで切り込み」(『東京日日新聞』1932 年 1 月 15 日付千葉版) との報道の通り、浮谷と松本は地盤協定を試みたが、失敗したようである。1924 年 5 月第 15 回総選挙に始まる川島と本多の対立が背景にある以上、両者の擁立した候補同士の妥協と調整は、容易では無かった。

3 人目が、薬品店経営者・薬剤師で前県会議員の茂木林蔵 (60 歳)。『千葉毎日新聞』1931 年 11 月 3 日付によると、野田町は当初、現職の高梨忠八郎の再選を目指した。しかし立候補「推薦交渉」(『東京朝日新聞』1931 年 12 月 13 日付房総版) は失敗し、前職の茂木にシフトする。茂木は 1924 年 1 月県会議員選挙で本多の支援を受けて当選した過去があるものの、「政友派の茂木林蔵氏も川島代議士の応援を得て」(『東京日日新聞』1932 年 1 月 14 日付房総版) とある通り、この時点では本多よりも川島との関係性が強く、川島は茂木の為に選挙活動に従事する。染谷亮作 (元川間村村長) に対して、川島自らが茂木への「投票依頼書」(1932 年 1 月 17 日付) を送付していることは¹⁰、それを物語る。しかし前述の梨本への推薦が書状であったことと比較すれば、川島と茂木の結び付きは緩やかだったようである。この茂木を支援した団体として、千葉県薬剤師会が挙げられる。例えば『千葉毎日新聞』1932 年 1 月 17 日付によると、千葉町会議員を務めたこともある国松真三郎会長の名で、東葛飾郡の全会員に投票依頼状が発送されたと言う。茂木は代議士や野田町と言う地域に加えて、業界団体からの支持を得た候補であった。なお茂木に関しては、彼と激しく争った柳澤清春 (48 歳) の存在を指摘しておく。詳細は前述の櫻井良樹の研究に譲るが¹¹、そもそも柳澤は 1928 年から 1945 年まで地元新川村の村長であり続けた地域の名望家で、『東京朝日新聞』1932 年 1 月 6 日付房総版の通り、野田町の梶田定吉ら有志 37 名の満場一致の推薦を得ていた。県会議員選挙を巡る野田町の政治的意図は、統一されていなかったようである。

この他、興味深いのは、川島が君津郡選挙区に対しても、影響力を行使しようとしていたことである。例えば「鈴木代議士に好感を持たぬ一派は候補者選考のことから一層反感を有し、東京の川島代議士を密に秘策を練つて居たもので、川島氏とても今議会の解散を見越し君津郡に新に地盤開拓を望んで居た際でもあり、渡りに船とばかり氏一流の智慧を授けて反鈴木一派のきう合」(『東京朝日新聞』1932 年 1 月 14 日付房総版) とある。更に君津郡が「党中に党を樹て川島

正次郎氏を輸入」(『読売新聞』1932年1月18日付千葉版)したともある。第5章で示した通り、1930年2月第17回総選挙において、川島は専修大学の同期生である黒川鍋太郎を通じ、君津郡に触手を伸ばし始めていた。川島は同じ政友会の鈴木との対立を覚悟で、県議会議員選挙レベルにおいても、君津郡に勢力を扶植していく。但し残念ながら、川島が具体的に誰を擁立・支援したかは、管見の限り、確認出来無かった。しかし、このような取り組みは、後述する総選挙の際、川島の大きな力となってくる。

最後に、川島も本多も関与していない政友会候補として、八幡町の高原正高を紹介しよう。高原は「床次系」(『読売新聞』1932年1月17日付千葉版)との報道通り、政友会の床次竹二郎と政治的関係を持つ。定数6名の前回1928年1月県議会議員選挙で16名中13位(989票)で敗れた高原は、「前回の雪辱戦」(『読売新聞』1932年1月17日付千葉版)に燃えていた。彼の詳細は不明だが、明治大学卒業後¹²、「昭和二年頃から約一年間京成電車社長の本多貞次郎氏の秘書」(『読売新聞』1932年1月19日付千葉版)を務めており、本多との関係も深かった。恐らく高原は本多との関わりで政界に足掛かりを得て、その本多を従える床次と接点を持つに至り、立候補を決意したのであろう。その高原は地元「八幡町を中心」(『東京日日新聞』1932年1月15日付千葉版)に選挙活動を展開した。八幡町は本多の居住地である市川町に隣接しており、また川島系列の松本の船橋町にも近い。「床次系が暗躍してゐるから、肉身の共喰ひ」(『東京日日新聞』1932年1月16日付房総版)と揶揄されるのは、その地理関係ゆえのことである。

(3) 民政党の候補者擁立

政友会と異なり、民政党はこの県議会議員選挙の時点で、東葛飾郡に政党支部を設置していたようである。それは、「東葛民政支部では二十三日我孫子町我孫子クラブで県議選挙対策を協議」(『東京朝日新聞』1931年12月22日付房総版)と言う記事から窺える。東葛飾郡における政党支部の設置は、初めてのことである。しかし、この支部だが、第4章で取り上げた史料「政事結社調¹³」(1934年1月)には登場し無い。恐らく消滅したが、名称は支部だが実態を伴わない組織であったと思われる。だからこそ候補者選定に関しては、政党支部ではなく、政友会同様、代議士が主導的な役割を担っていく。

例えば東葛飾郡を地盤とする民政党の現職代議士は篠原陸朗だが、新聞報道を見る限り、その動向が殆ど確認出来ない。恐らく東葛飾郡との地縁的結合の度合いが弱く、県議会議員選挙に大きく関与していなかったのであろう。その代わりに務めたのが、君津郡を地盤とする当選2回の多田満長である。実現しなかったものの、多田は「船橋町消防組頭植草佐吉氏に交渉を進め」(『東京日日新聞』1932年1月10日付千葉版)る等、県議会議員選挙候補者の擁立を模索していた。また多田は「民政派成島勇氏は多田代議士等の応援を得」(『東京日日新聞』1932年

1月14日付房総版)たとある通り、成島勇(41歳)を支援していた。富勢村出身の成島は県会議員及び衆議院議員を務めた魏一郎の三男で、父の死後、富勢村長を務め、1928年1月県会議員選挙で初当選を果たしており、既に満場一致で「東葛飾郡東部民政党有志」(『読売新聞』1931年12月23日付千葉版)からの推薦を得、態勢を整えていた。但し東葛飾郡選挙区には、もう1人の民政党候補がいた。浦安町会議員兼町衛生関係委員の渋谷司(54歳)である。多田と渋谷の関係は不明だが、第5章表2で示した通り、前回1930年2月第17回総選挙の時、多田が浦安町総投票数72.5%に相当する1,374票を獲得していることを踏まえると、両者は何らかの繋がりを持っていたものと思われる。

なお政友会と異なり、民政党は地域の意向で地元候補を擁立しようとしていた。例えば『東京朝日新聞』1932年1月6日付房総版にある通り、1月4日に船橋で開催された県議候補選考会において、中村勝五郎が候補に挙げられている。中村家は江戸時代初期から続く名望家で、大正初年からは味噌醸造業を営んでおり¹⁴、かつて中山町長も務めていた。第5章で示した通り、中村は町長職を辞して民政党の篠原を応援する等、熱心な民政党支持者であった。この他、『東京日日新聞』1932年1月10日付千葉版によると、県会議員当選2回(憲政会→民政党)の経歴を持つ船橋町長の宇賀山金次郎が、船橋町会議員の大野善兵衛なる人物に対して、「民政入党を条件として交渉を進めてみた」と言う。中村と大野の立候補は実現しなかったものの、代議士とは切り離されたレベルでの候補者擁立自体、珍しい現象と思われる。

(4) 無産政党的候補者擁立

1932年に結成されたばかりの社会大衆党からは、堀越梅男が立候補した。堀越は野田醤油株式会社醸造工の出身で、日本労働総同盟執行委員を経て、社会民衆党の千葉県支部長を務めていた。野田醤油は、周知の通り、大正デモクラシーを背景とした労働争議が盛んな企業の1つである¹⁵。堀越に関しては、「野田町始め北部各町村で片山代議士等が応援」(『東京朝日新聞』1932年1月12日付房総版)と報道されており、弁護士で社会大衆党中央執行委員の片山哲(神奈川県第2区)が支援に廻った形跡のみ確認出来る。

(5) 選挙の結果

以上、政民両党を中心に、代議士が県会議員選挙に関与していた実態を見た。これらを纏めると、次のようになる。即ち政友会の本多貞次郎の系列下に置かれた候補者は、市川町の浮谷竹次郎と我孫子町の染谷正治の2人であった。同じく政友会の川島正次郎の系列下に置かれた候補者は、松戸町の梨本太兵衛と船橋町の松本栄一の2人であった。野田町の茂木林蔵に関しては、後述する通り、彼が2月の総選挙で本多の陣営に参加することから、川島の系列下とは捉え切れない。そして選挙区を越えた存在である政友会の床次竹二郎の系列下に置かれた候補

者が、八幡町の高原正高である。なお新川町の柳澤清春は何れの代議士の系列下には置かれていないが、後述する 2 月総選挙では本多の陣営に参加する。これに対して民政党は、多田満長が富勢町の成島勇の擁立に関わり、支援していた。そこに篠原陸朗の姿は確認出来ない。浦安町の渋谷司に関して言えば、表には出ないものの、多田の影響力が働いていたものと思われる。

選挙戦終盤を迎える中、『東京朝日新聞』1932 年 1 月 17 日付房総版は、3,300 票が東葛飾郡選挙区の当選圏と予想した。これは的中し、染谷正治は 3,402 票で最下位当選を果たし、かたや松本栄一は 3,244 票でまたも落選の憂き目に遭う。それでは実際、各候補者はどの町村でどの程度を得票していたのであろうか。総選挙と異なり、地方選挙における各候補者の各町村別獲得票数は明らかになりにくい。幸い『東京朝日新聞』1932 年 1 月 24 日付房総版及び 1 月 26 日付房総版には得票数が掲載されている。これを基に作成した表 1 ①②を見ると、次の 3 点が指摘出来る。第 1 は、前述の櫻井良樹の先行研究における指摘の妥当性である。櫻井によると、民政党の各町における投票は 1 人に集中しており、地盤協定がかなり厳格に実行されていると言う。東葛飾郡全町村に広げてみても、櫻井の指摘と同様の傾向が確認出来た。各町村の民政党支持者は、協定を理解・遵守し、投票行動に反映させていたようである。要因は定かでは無いが、例えば初めて設置された民政党東葛飾郡支部の存在、野党ならでは結束等も考えられる。第 2 は、政友会候補は 1 つの地域で票を奪い合っており、地盤協定は存在しない、または存在していたとしても全く機能していない点である。長いライバル関係にある川島と本多が地盤を持つ東葛飾郡の場合、協定を結んで票を譲り合う行為自体、実現性は乏しい。推測の域を出ないが、民政党と異なり、政友会が政党支部を設置していないことも関係していよう。第 3 は、全ての町村で一桁台の投票先が存在する点である。たとえ特定候補者や組織が投票を嚮導しても、それに全ての有権者が従っていた訳ではないと思われる。以上、選挙の結果、松本と高原が落選した為、東葛飾郡においては、本多がやや有利な形で県会議員を押えた。前回 1930 年 2 月第 17 回総選挙で落選し、雪辱を晴らしたい本多にして見れば、これは大きな収穫であった。

最後に、各県会議員の得票数を合算し、代議士候補者の基礎票を概観したい。政友会の本多の場合、浮谷 4,333 票と染谷 3,402 票の合計 7,735 票が基礎票となる。同じく川島の場合、梨本 3,550 票と松本 3,244 票の合計 6,794 票が基礎票となる。これに対する民政党の場合、成島 4,491 票と渋谷 3,504 票の合計 7,995 票が基礎票となり、ここから多田や篠原に割り振られていく。残りの茂木 4,137 票・高原 2,438 票・柳澤 4,289 票は、前述の通り、支持する代議士との関係性が明確でない為、分散することになる。

表1①:1932年県会議員選挙における各候補者町村別得票一覧

政党 候補者	政友 高原	政友 浮谷	政友 柳澤	政友 松本	政友 茂木	政友 柴谷	政友 梨本	無産 堀越	民政 成島	民政 渋谷	投票総数
八柱	14	123	6	8	0	34	236	7	2	0	430
	3.3%	28.6%	1.4%	1.9%	0.0%	7.9%	54.9%	1.6%	0.5%	0.0%	
松戸	80	103	4	4	10	145	983	12	102	1	1444
	5.5%	7.1%	0.3%	0.3%	0.7%	10.0%	68.1%	0.8%	7.1%	0.1%	
明	6	27	11	0	1	59	372	6	208	0	690
	0.9%	3.9%	1.6%	0.0%	0.1%	8.6%	53.9%	0.9%	30.1%	0.0%	
高木	3	46	4	2	0	145	172	2	20	0	394
	0.8%	11.7%	1.0%	0.5%	0.0%	36.8%	43.7%	0.5%	5.1%	0.0%	
小金	27	0	2	3	0	238	167	1	121	0	559
	4.8%	0.0%	0.4%	0.5%	0.0%	42.6%	29.9%	0.2%	21.6%	0.0%	
馬橋	12	23	30	0	3	3	163	2	241	1	478
	2.5%	4.8%	6.3%	0.0%	0.6%	0.6%	34.1%	0.4%	50.4%	0.2%	
流山	21	1	407	0	27	90	141	7	129	0	823
	2.6%	0.1%	49.5%	0.0%	3.3%	10.9%	17.1%	0.9%	15.7%	0.0%	
八木	15	0	112	0	25	113	119	0	140	1	525
	2.9%	0.0%	21.3%	0.0%	4.8%	21.5%	22.7%	0.0%	26.7%	0.2%	
田中	10	7	211	4	2	239	49	0	364	0	886
	1.1%	0.8%	23.8%	0.5%	0.2%	27.0%	5.5%	0.0%	41.1%	0.0%	
新川	0	0	513	0	111	1	19	9	71	1	725
	0.0%	0.0%	70.8%	0.0%	15.3%	0.1%	2.6%	1.2%	9.8%	0.1%	
梅郷	0	0	329	4	223	2	7	21	57	0	643
	0.0%	0.0%	51.2%	0.6%	34.7%	0.3%	1.1%	3.3%	8.9%	0.0%	
福田	0	0	291	1	202	0	7	6	187	0	694
	0.0%	0.0%	41.9%	0.1%	29.1%	0.0%	1.0%	0.9%	26.9%	0.0%	
野田	1	0	868	62	1792	9	3	350	65	0	3150
	0.0%	0.0%	27.6%	2.0%	56.9%	0.3%	0.1%	11.1%	2.1%	0.0%	
旭	0	0	176	0	236	3	3	13	16	0	447
	0.0%	0.0%	39.4%	0.0%	52.8%	0.7%	0.7%	2.9%	3.6%	0.0%	
七福	0	0	233	0	207	4	0	8	35	0	487
	0.0%	0.0%	47.8%	0.0%	42.5%	0.8%	0.0%	1.6%	7.2%	0.0%	
川間	0	0	189	0	503	0	5	7	112	0	816
	0.0%	0.0%	23.2%	0.0%	61.6%	0.0%	0.6%	0.9%	13.7%	0.0%	
木間ヶ瀬	0	0	352	0	340	0	6	14	29	0	741
	0.0%	0.0%	47.5%	0.0%	45.9%	0.0%	0.8%	1.9%	3.9%	0.0%	
二川	1	0	275	0	236	0	27	17	93	0	649
	0.2%	0.0%	42.4%	0.0%	36.4%	0.0%	4.2%	2.6%	14.3%	0.0%	

表1②:1932年県会議員選挙における各候補者町村別得票一覧

政党 候補者	政友 高原	政友 浮谷	政友 柳澤	政友 松本	政友 茂木	政友 染谷	政友 梨本	無産 堀越	民政 成島	民政 渋谷	投票総数
関宿	0	0	214	0	122	0	0	17	128	0	481
	0.0%	0.0%	44.5%	0.0%	25.4%	0.0%	0.0%	3.5%	26.6%	0.0%	
布佐	38	0	2	0	2	169	250	2	36	0	499
	7.6%	0.0%	0.4%	0.0%	0.4%	33.9%	50.1%	0.4%	7.2%	0.0%	
湖北	23	4	0	0	1	64	115	0	150	0	357
	6.4%	1.1%	0.0%	0.0%	0.3%	17.9%	32.2%	0.0%	42.0%	0.0%	
我孫子	2	0	0	0	0	512	57	0	330	0	901
	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	56.8%	6.3%	0.0%	36.6%	0.0%	
富勢	0	0	1	0	0	25	16	0	607	0	649
	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	3.9%	2.5%	0.0%	93.5%	0.0%	
手賀	3	1	0	16	0	357	164	0	220	0	761
	0.4%	0.1%	0.0%	2.1%	0.0%	46.9%	21.6%	0.0%	28.9%	0.0%	
船橋	589	677	36	1107	7	11	34	43	7	348	2859
	20.6%	23.7%	1.3%	38.7%	0.2%	0.4%	1.2%	1.5%	0.2%	12.2%	
鎌ヶ谷	95	96	0	130	6	31	29	3	6	81	477
	19.9%	20.1%	0.0%	27.3%	1.3%	6.5%	6.1%	0.6%	1.3%	17.0%	
法典	37	63	0	85	0	0	1	2	0	45	233
	15.9%	27.0%	0.0%	36.5%	0.0%	0.0%	0.4%	0.9%	0.0%	19.3%	
塚田	12	29	0	39	0	0	0	0	2	60	142
	8.5%	20.4%	0.0%	27.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.4%	42.3%	
葛飾	198	221	0	169	0	0	12	6	2	126	734
	27.0%	30.1%	0.0%	23.0%	0.0%	0.0%	1.6%	0.8%	0.3%	17.2%	
八栄	63	59	0	146	13	1	47	1	11	17	358
	17.6%	16.5%	0.0%	40.8%	3.6%	0.3%	13.1%	0.3%	3.1%	4.7%	
市川	97	1328	8	130	26	0	8	301	3	209	2110
	4.6%	62.9%	0.4%	6.2%	1.2%	0.0%	0.4%	14.3%	0.1%	9.9%	
八幡	312	202	1	112	3	0	5	24	3	79	741
	42.1%	27.3%	0.1%	15.1%	0.4%	0.0%	0.7%	3.2%	0.4%	10.7%	
中山	65	173	0	245	1	0	1	14	1	393	893
	7.3%	19.4%	0.0%	27.4%	0.1%	0.0%	0.1%	1.6%	0.1%	44.0%	
行徳	305	313	37	285	20	0	4	40	2	288	1294
	23.6%	24.2%	2.9%	22.0%	1.5%	0.0%	0.3%	3.1%	0.2%	22.3%	
浦安	31	107	1	233	0	0	22	7	7	1313	1721
	1.8%	6.2%	0.1%	13.5%	0.0%	0.0%	1.3%	0.4%	0.4%	76.3%	
国分	30	211	0	86	2	2	48	31	28	20	458
	6.6%	46.1%	0.0%	18.8%	0.4%	0.4%	10.5%	6.8%	6.1%	4.4%	
大柏	157	99	0	63	0	0	3	1	0	92	415
	37.8%	23.9%	0.0%	15.2%	0.0%	0.0%	0.7%	0.2%	0.0%	22.2%	
南行徳	130	100	0	207	0	0	12	1	0	283	733
	17.7%	13.6%	0.0%	28.2%	0.0%	0.0%	1.6%	0.1%	0.0%	38.6%	
柏	22	4	9	13	61	265	100	1	627	0	1102
	2.0%	0.4%	0.8%	1.2%	5.5%	24.0%	9.1%	0.1%	56.9%	0.0%	
土	43	0	1	20	12	273	39	0	131	0	519
	8.3%	0.0%	0.2%	3.9%	2.3%	52.6%	7.5%	0.0%	25.2%	0.0%	
風早	3	11	1	1	6	383	102	0	170	0	677
	0.4%	1.6%	0.1%	0.1%	0.9%	56.6%	15.1%	0.0%	25.1%	0.0%	
合計	2448	4032.2	4329.5	3178.5	4204.3	3182.1	3553.08	976.7	4469.2	3361.4	

第2節 立候補過程

(1) 川島正次郎

県会議員選挙直後の1932年1月21日、少数与党の犬養毅政友会内閣は第60回帝国議会を解散。投票日は2月20日となった。川島はこの2日後、有権者に対して「議会の演説に立ち委員会で民政党内閣に肉迫もして在野党の一員たる義務を尽しました。昨年は忝くも勲五等を拝受致しました。全く御後援の余光に外なりません。昨年は欧州に旅行して伯林、巴里、倫敦、羅馬等の各地を視察し、尚時恰も紛争中の国際連盟理事会の情勢を調査して政友会本部へ報告し、以て我党の連盟に対する態度決定に資した次第であります。茲に前回総選挙の御厚意を

拝謝し併せて在任中の御芳情に対し御礼申上ます¹⁶」と記した礼状を送付した。国際情勢に明るく、党務に関わる代議士イメージを謳っている。

1924年5月第15回総選挙以来続く川島と本多のライバル関係は、今回も特筆すべき事柄として認識されていた。「両派の暗闘は政民の抗争より激烈となり、県議選にも亦町議改選に到るまで総てに本多川島の両派は競争」（『読売新聞』1932年1月26日付千葉版）しており、両者の対立が東葛飾郡における各種選挙の全てに影響を与えた。特に前述の県会議員選挙の場合、そこでの候補者や当選者が誰を支援するかが焦点となる。特に野田町の茂木林蔵と新川町の柳澤清春、この両者の行く末が注目されていた。例えば「政友派川島正次郎、本多貞次郎氏のいづれに野田醤油が応援するかすこぶる重視されてゐるが、茂木、柳澤両県議が何人を応援するかが見ものである」（『東京朝日新聞』1932年1月27日房総版）との報道は、それを物語る。特に茂木は県会議員選挙で川島の応援を受けていたものの、その系列下には置かれておらず、4,137票獲得した彼の動向は、川島にとって不安材料であった。

そのような中、短いものの、特筆すべき記事が『読売新聞』1932年2月2日付千葉版に掲載された。

松戸町の川島正次郎氏後援会同志会の幹部十八名は、先の梨本太兵衛氏の県議選当時暴露した川島氏直系の某幹部の選挙費着服事件に端を発し、同氏をボイコット

これは、東葛飾郡で川島の個人後援会の存在を窺わせる数少ない史料である。ここからは、松戸町には同志会なる川島個人後援会が県会議員選挙前から存在していたこと、その同志会が幹部による選挙費用着服問題で内紛状態に陥っていたことを読み取れる。第5章で示した通り、1930年2月第17回総選挙で大きく票を減らした川島は、従来の議会報告演説会を中心した地盤涵養に加えて、本多や多田と同様、後援会と言うパーソナル且つインフォーマルな組織を設立し、自身の集票ツールの強化へと舵を切ったのである。但しこの組織は、内紛状態を抱えていたことから分かる通り、また前述の史料「政事結社調¹⁷」（昭和9年1月）から分かる通り、1934年まで継続しなかったようである。内紛もあったことから、恐らくそれまでの間に消滅してしまったものと思われる。

ともかく本多に続き、川島も個人後援会を持つ中、『東京日日新聞』1932年1月27日付房総版は次の記事を掲載した。

民政派では篠原、多田氏のうちいづれか一人を失ふものと見られるが、前回全国最高点の多田満長氏も怨敵鈴木隆氏の最近君津、市原両郡下における地盤席卷のため甚だ楽観を許さずと伝へられ、多田氏より力弱しと目される篠原氏が今回の県議選で東葛に渋谷、成島両県議を獲得したので案外強いと評されている、政友派では鈴木、川島、本多三氏の外に定員四名全部獲得すべく千葉郡議川口為之助氏に出馬勧誘をなしたが川口氏は絶対これを拒絶した模様で、前県会議長浮谷権兵衛氏も野心はあつたが親分本多が出馬する以

上断念の外はない、結局政友三民一は動かざるところで民政多田、篠原両氏の誰が落ちるかがこの選挙のヤマであらう

ここからは、次の3点が読み取れる。第1は、県会議員選挙に関与していなかった筈の代議士篠原と東葛飾郡選出の民政党県会議員2名の関係が話題に上っている点である。総選挙にもなると、代議士と県会議員は強く結び付いていく。第2は、政権与党の政友会が4人目の候補として、千葉市及び千葉郡での川島の支援者である川口為之助（県会議員）の擁立を模索し、本人に断られていた点である。しかし政友会は4人目の候補を模索し続け、『東京朝日新聞』1932年2月5日付房総版によれば、元千葉県知事の折原巳一郎（兵庫県1区元代議士）が狙上に乗れ、川島はそれに反対したと言う。折原は本多同様、「床次の直参」（『房総日日新聞』1933年11月15日付）と評され、政友本党に所属して以来の仲である。彼を候補者に擁立することは、川島の苦境を意味する為、反対は当然の対応であった。第3は、本多の系列下に置かれていた前県会議員の浮谷権兵衛が、本多の不出馬の場合、自身の立候補を模索していた点である。現実には本多は早々に立候補の準備を進めており、以後、浮谷の動きが表面化することは無い。

これ以外にも、前述の県会議員選挙で落選した高原正高を擁立する動きが見え始めた。例えば『東京朝日新聞』1932年1月30日付房総版によると、1月29日、船橋大神宮で「高原正高氏の前途を祝福祈願する会」が開催され、この場で高原を代議士候補者として推薦することを「満場一致」で可決したと言う。高原は即答を避けたものの、「同氏擁立の空気は濃厚」になった。そこで『東京日日新聞』1932年2月6日付房総版を見ると、高原の立候補はかなり具体性を帯びていることが分かる。即ち高原は高橋鉄五郎ら後援者たちと協議を進め、「雪辱戦」の為に立候補を決意したのである。但し高原は立候補を打ち明けた犬養毅内閣の床次竹二郎鉄道大臣から「極力引留め」られ、更に相談した代議士の津崎尚武（鹿児島県第3区）からも「引留め」られた。鹿児島出身の床次とその地を選挙区とする津崎、この両者との関係を見る限りにおいて、高原は鹿児島閥との何らかの人間関係を有していたのであろう。にも拘わらず後援者たちは着々と運動資金の調達を進めており、高原は再び床次に面会・相談する。これが実現すれば、東葛飾郡を地盤とする3人目の政友会候補の誕生となり、更なる政友会票の奪い合いが起こりかねない。しかし最終的には「既報高原氏が断念、その一派は篠原氏を応援せんとする」（『東京日日新聞』1932年2月14日付千葉晩）と報じられた通り、実現しなかった。恐らく床次などから反対されたのであろう。すると高原は逆に民政党の篠原の応援に入ってしまう。

また別に『読売新聞』1932年2月5日付千葉版を見ると、君津郡出身の富田照の立候補可能性も報じられている。第3章で示した通り、富田は1928年2月第16回総選挙に実業同志会から立候補したものの、最下位の7位で落選した過去を持つ。その富田は政友会に入党し、鈴木喜三郎司法大臣と鳩山一郎文部大臣からの「内意」を得たらしく、公認を待っている段階だと言う。しかし、これ以

降、富田の名も報道されないことから、立ち消えになった。

以上の紆余曲折を経ながら、東葛飾郡を地盤とする政友会候補は、従来の川島と本多の2名に落ち着いた。『千葉毎日新聞』1932年2月2日付によれば、既に川島は「出馬を準備中」と報道される。そして『千葉毎日新聞』1932年2月4日付を見ると、2月2日、立候補届出を済ませ、前回同様、松戸町に選挙本部事務所を設置し、事務長には県会議員に当選した松戸町の梨本太兵衛では無く、落選した船橋町の松本栄一を初めて選任したことが分かる。その松本は「定石通り著々進出すれば勝てますよ、うんと働いて県議選の雪辱をします」（『東京日日新聞』1932年2月10日付房総版）と語り、総選挙を自身の「雪辱戦」とも位置付けていた。今回の立候補に関しては、1928年2月第16回総選挙や1930年2月第17回総選挙とは異なり、それを遮る者も無く、スムーズに政友会本部から公認を得た。正確な日時は不明だが、党機関紙『政友』を見る限り、2月8日以前には川島に対して公認を出していたようである¹⁸。当選回数に規定される党内の政治序列を踏まえれば、既に連続当選2回の川島は、恐らく政友会の中で、立候補や公認が当然と認識された存在に成長していたと言えよう。加えて前々回及び前回同様、地方名望家による推薦会やボトムアップを経ていない。川島は推薦会に依拠し無い立候補を3回続けたが、その全てで当選する。この地の地域政治秩序は、確実に川島を中心とするものに向かいつつあった。

（2）本多貞次郎

『東京日日新聞』1932年1月23日付房総版を見ると、本多が県会議員選挙終了直後の1月22日、床次竹二郎鉄道大臣の邸宅を訪問し、選挙準備を打ち合わせたと報じている。本多は浪人中の身であったが、京成電鉄社長であり、奥健太郎の指摘する政党支部が求める代議士の条件¹⁹、即ち地域への利益誘導や莫大な金銭的援助が可能と言う意味において、東葛飾郡では欠くべからざる存在であった。本多は振り返きを狙い、選挙準備を進めていく。これを受けて、市川町の政友会員は1月26日に幹部会を開き、「満場一致」（『東京日日新聞』1932年1月27日付千葉版に）で本多を推薦することになった。なお、この推薦会が、東葛飾郡で発現した最後の事例である。

さて翌27日には政友会本部で総務会が開催され、そこで本多の公認が正式決定され、以降、「家の子連が本多邸に集まり準備に忙殺」（『東京日日新聞』1932年1月28日付房総版）され、本多派の選挙運動は本格化していくこととなる。また本多を支援する床次から「是非出馬せよ、本部は極力応援する」（『千葉毎日新聞』1932年1月29日付）旨の電報も受け取ったのも、1月27日である。1月27日こそ、本多の事実上の立候補確定日だった。

（3）篠原陸朗

今回の総選挙は、篠原にとって苦戦が予想されていた。例えば『読売新聞』1932

年 1 月 24 日付千葉版は、「任期中余りに選挙民と絶縁してみた上に、今回の県議選で最高位を占めて当選した同派の成島県議と依然意思の疎通を欠いてゐるために再起は頗る困難であらうと目されてゐる、然し北部野田地方に於て同氏のため前回大いに奔走した有力者柘田定吉氏の態度如何により有望であるとされてゐる」と報じている。どうやら 1930 年 2 月第 17 回総選挙で初当選した後、地盤涵養を怠っていたようである。上山和雄は代議士の地盤涵養を 4 点に類型化した²⁰、「演説も相当やるが只長い官吏生活から官僚臭が少し強過ぎる様な気がする」（『読売新聞』1932 年 1 月 29 日付千葉版）と評された篠原は、有権者との結び付きを欠いた。だからこそ「篠原氏の身代りに、前蔵相井上氏を輸入で担ぎ込み策を講じてゐる向がある」（『読売新聞』1932 年 1 月 28 日付千葉版）と報じられるのである。しかし『千葉毎日新聞』1932 年 1 月 29 日付によると、1 月 28 日、篠原は君津郡を地盤とする多田満長と共に千葉供託局へ供託金を納め、県地方課で立候補の届出を済ませたことから分かる通り、井上がこの地で立候補することは無かった。なお篠原の場合、本多とは異なり、川島同様に推薦会の形跡が見られなかった。これは、東葛飾郡での篠原の影響力の拡大を意味し無い。前述の通り、県会議員との結び付きが弱いことに由来する現象と思われる。

第 3 節 選挙運動

(1) 本多貞次郎

前回 1930 年 2 月第 17 回総選挙で初めての落選を経験した本多の下に、千葉日日新聞社長・千葉市会議員の大澤中が駆け付けた。大澤は前述の 1 月県会議員選挙で千葉市選挙区から立候補したものの、第 5 章で登場した一瀬房之助（弁護士）と議席を争い、2,041 票の大差を付けられて惨敗していた。その大澤は 1 月 27 日、千葉市長崎屋で「中正会」（『東京朝日新聞』1932 年 1 月 29 日付房総版）なる名称の政治団体を設立し、自ら会長に就任する²¹。この席で、大澤は本多の応援を表明した。前回 1930 年 2 月第 17 回総選挙では篠原陸朗（民政党）を支持した大澤であったが、自身の選挙に対する篠原からの助力が無かったこともあり、民政党を見限り、本多の支援も期待した上で、彼の下に馳せ参じたと思われる。これは、後の大澤の政友会入党の足掛かりとなる。この他にも、例えば『千葉毎日新聞』1932 年 2 月 13 日付によると、佚名で知られる馬場徳司の率いる馬場組（千葉市）は組織として本多支援を決定し、「本県開拓者としての功労は多く、県民との親交絶大なるもの」との文言が記載された文書を千葉市及び千葉郡の有権者に配布した。また元千葉県知事の折原巳一郎（兵庫県 1 区元代議士）も「老躯を提さげて政友本多候補の帷幕に参画」（『千葉毎日新聞』1932 年 2 月 19 日付）する。振り返きを目指した本多陣営は、充実の度合いを増した。

新たな味方を得た本多は、『千葉毎日新聞』1932 年 2 月 5 日付によれば、2 月 1 日、立候補届出を済ませ、市川町真間の自邸に選挙本部事務所を設置し、事務

長には従来の浮谷権兵衛（元県会議員）では無く、鎌ヶ谷村の三橋弥（64歳）を初めて選任した²²。ここから本多の選挙運動は本格化するが、この記事は次の2点についても報じている。1つは、「東葛中堅同志会」が本多の選挙運動の主体になった点である。“本多”や“後援会”と言う冠は付いていないものの、恐らく「東葛中堅同志会」は本多を支持した政治団体と思われる。この「東葛中堅同志会」は、第4章表4で登場した政治団体で、存在し続けていた。もう1つは、前述の通り、1932年1月県会議員選挙で4,289票を獲得（当選）した柳澤清春が、本多の支援を受けて当選した浮谷竹次郎及び染谷正治と共に、本多の為の「応援秘策を練り」上げていた点である。柳澤もまた、本多の下に馳せ参じた為、本多の基礎票は12,024票となる。更に「染谷、茂木、浮谷、柳澤を擁する本多派」（『読売新聞』1932年2月12日付千葉版）との報道からは、県会議員選挙で川島の応援を受け、4,137票を獲得した茂木が本多支持に廻っていたことが窺える。これにより本多の基礎票は合計16,161票となった。

さて『東京日日新聞』1932年2月6日付房総版によると、2月4日、本多は推薦状を有権者に一斉に発送した。この時に本多が染谷亮作（元川間村村長）に宛てた書状を見てみよう²³。そこには次の3つが同封されていた。1点目は立候補挨拶状、2点目は犬養総裁の推薦状、3点目は犬養毅・高橋是清・床次竹次郎・鈴木喜三郎・中橋徳五郎・山本悌二郎・鳩山一郎・三土忠造・前田米蔵・秦豊助が名を連ねた政友会からの推薦状である。特に3点目の推薦状に関しては、後述の川島のそれとはメンバーが異なっていることから、興味深い。川島のものには床次・中橋・山本・三土の名が無いのに対して、本多のものには森恪の名が無い。これは、本多と床次らの結び付きの強さを示す反面、川島の森との結び付きの強さを示す傍証となろう。その意味において、政党本部からの推薦状に記載される人物名は、候補者の党内における人間関係の有り様を反映するものであった。なお川島と森の関係に関しては、第7章で指摘したい。

次に演説会。『千葉毎日新聞』1932年2月6日付によれば、当初は以下の通り演説会の日程が組まれた。即ち10日に関宿町・木間ヶ瀬村・二川村・川間村・七福村、11日に小金町・高木村、15日南行徳村・行徳町、16日に中山町・八幡町・葛飾村、17日に津田沼町・検見川町・幕張町、18日に市川町・船橋町・千葉市・野田町・松戸町・柏町の計21箇所の子定であった。後述の川島に比べて、約半分の回数であった。しかし『千葉毎日新聞』1932年2月9日付は、10日に関宿町・二川村、川間村・七福村、11日に新川村・流山町・八木村、12日に八柱村・大柏村・国分村、13日に土村・高木村・我孫子町・湖北村・布佐町、14日に風早村・鎌ヶ谷村、15日に富勢村・田中村・行徳町2箇所・南行徳村、16日に八幡町・中山町・葛飾村、17日に津田沼町・幕張街・検見川町・稲毛・犢橋村、18日に船橋町・千葉市・寒川の33箇所に増加しており、当初の子定と異なる。恐らく後述する川島との比較の結果、演説会日程の改善を図ったのであろう。また『千葉毎日新聞』1932年2月16日付を見ると、具体的な場所や日時

は明らかにされてはいないが、床次竹二郎や岡喜七郎（内務官僚出身の貴族院議員）の応援が入ると報じられている。実際、記事としては書かれていないものの、『読売新聞』1932年2月12日付千葉版には、「壇上に起つ床次鉄相（野田で）」と言うキャプション付きの写真が掲載されており、その写真の中には本多の名も確認出来る。一度は床次本人が本多の演説会に登壇し、熱弁を振るったことは確かであった。そして選挙戦終盤の2月18日、千葉市千葉劇場において「政見発表演説会」（『千葉毎日新聞』1932年2月18日付）が開催される。内容は、本人の演説の後、床次鉄道大臣特派の丸山繁次、元代議士の折原已一郎、県会議員の浮谷竹次郎などが演壇に立ち、本多の選挙運動は総括に向かう。

（2）川島正次郎

初めて他の候補者と競合せず、立候補を果たした川島の本格的な選挙運動は、立候補挨拶状を選挙区の全有権者に発送したことで始まった（『千葉毎日新聞』1932年2月6日付）。例えば川島が染谷亮作（元川間村村長）に宛てた封書を見ると、次の3点が同封されている²⁴。1点目は、政友会本部からの「推薦状」である。そこには「我党の闘士 川島正次郎君を最適任と認め御推薦申上候」と記されており、犬養毅・高橋是清・鈴木喜三郎・鳩山一郎・前田米蔵・秦豊助・森恪の署名も掲載されている。前述の通り本多のものとは署名者が異なっている。川島に推薦状にだけ森の名があることから、党内における森と結び付きが窺えよう。このことは、第7章で改めて指摘する。2点目は、「各市場問屋有志」からの「推薦状」である。そこには川島が「予て御承知の如く東京市商工課長在任当時より我が食品業界の為め」尽力した人物であり、「物資配給問題の声全国に喧しき折同氏の如き斯界に理解ある士を議席に在らしめ度く」と推薦理由が記されており、合わせて東京魚市場の問屋から46人、神田青果市場の問屋から27人、江東青果市場の問屋から17人、京橋青果市場の問屋から17人、千住青果市場から13人の名が記載されていた。この市場関係者からの推薦、言わば業界団体からの応援は、次回1936年第19回総選挙でも確認出来ることも踏まえれば²⁵、東京市商工課長を務めた川島ならではのものではなかったのである。既に第5章で示した通り、川島の中央卸売市場法中改正法律案委員会（第59議会）での卸売問屋保護の発言を見ると、これに対する見返りと思われる。3点目は、新聞サイズの「立候補宣言書」（裏表刷り）である。表面には「曩に田中政友会総裁急逝されました際、私は後継総裁として犬養先生擁立の第一声をあげたのであります、今や未曾有の国難に際し犬養総裁は年来の主義政策を掲げて政治の衝に当たっているのであります、此の時に際し私は犬養総裁の麾下に於て十分働いてみたい」と記されており、政友会総裁の犬養首相との近しさを強調している。また裏面には川島の帝国議会登壇や渡欧に関する写真、川島の議会での発言などが掲載されており、候補者パンフレットの的な役割を担っている

演説会について見てみよう。『千葉毎日新聞』1932年2月6日付によると、6

日に松戸町・市川町・船橋町、7日に福田村・旭村・野田町・川間村・七福村・木間ヶ瀬村、8日に新川村・梅郷村・八木村・田中村・土村・富勢村、9日に大柏村・塚田村・鎌ヶ谷村・行徳町・国分村、10日に八栄村・八幡町・中山町・葛飾村・法典村、11日に風早村・手賀村・柏町・我孫子町・湖北村・布佐町、16日に明村・八柱村・高木村・流山町・小金町、19日に野田町・関宿町・二川村・七福村・松戸町・市川町・中山町・船橋町の計44箇所の予定が生まれ、前述の本多の当初の演説会予定数を大きく上回っていた。しかし『千葉毎日新聞』1932年2月13日付によると、11日は野田町興風館でも開催されており、14日以降は君津郡や千葉郡での演説会、18日の浦安町での演説会が追加されている。本多同様、日程と場所は流動的であり、次第に開催対象地域が拡大されていった。前述の11日の野田町興風館における演説会を取り上げると、犬養内閣の鳩山一郎文部大臣が出席して熱弁を振るったことで、大いなる盛り上がりを見せたと言う。この総選挙後、川島は鳩山一郎派に所属するが²⁶、選挙過程は代議士の政治活動を規定したと言えよう。そして選挙戦終盤の2月17日、千葉市千葉劇場において「政見発表演説会」が開催される。『千葉毎日新聞』1932年2月18日付によれば、川島本人の演説の後、応援弁士に山崎亀吉（貴族院議員）、峰田茂（専修大学教授）、政友会本部特派員の久家恒衛・大神田仁三郎・今仲薫、池田勝隆（法学士）、長原芳郎（経済学士）等が演壇に立ち、選挙運動は総括に向かう。

ところで前述の本多と比較した場合、川島が君津郡での選挙運動に力を入れたことは、注目に値する。熊本県第1区の大塚唯男（民政党）が地盤でのみ選挙運動に取り組んできた姿とは²⁷、一線を画している。例えば『東京朝日新聞』1932年1月24日付房総版は、「君津郡の選挙戦で鈴木派から分離した政友の一派は郡内に激を飛ばして同志をきょう合し二十四日夜木更津町ラジウム鉱泉浴楼上に会合し、君津政友同志会を組織し、代議士戦に川島前代議士を極力後援することを申合せざるはずだが、一方、清水、堀切正副支部長が川島派に走つたため最高幹部を失った」結果、「政友支部には残った幹部、藤代竹松、藤代金七、鶴岡長吉、竹内秀太郎諸氏が牛耳り、結束を固くして鈴木代議士を後援することになったので、木更津の政友派は名実共に二分した」と報道した。前述の通り、川島が君津郡の県議会議員選挙に関与したことを受け、木更津の政友派は鈴木隆グループと川島グループに分裂し、後者は「君津政友同志会」を名乗ったのである。更に「政友の一部では本多元代議士を後援する」（『東京朝日新聞』1932年1月29日付房総版）動きもあった。つまり『読売新聞』1932年2月3日付千葉版の通り、この地の政友会は君津政友倶楽部・君津政友同志会・君津政友革新会の3つに分派し、それぞれ鈴木・川島・本多を支援していく。なお「本多を支持する君津政友革新会の幹部中には、かつて東葛地方の社民系の闘士が混じつてゐる」（『読売新聞』1932年2月5日付千葉版）たようである。これが事実であるならば、政友会の政治団体と雖も、その構成員の中には無産政党の支持者が混在した

ことになる。この「社民党系の闘士」は、政党としての纏まる、本多個人の存在を基準として、君津政友革新会に参加したと思われる。

川島が君津郡にもその名を轟かせるようになった情勢を踏まえて、『東京日日新聞』1932年2月9日付房総版は、次の通りこの地域を総括した。即ち多田派は「県議選の際とガラリと変りスタート見事に一流戦術で人気と同情を得ている」、鈴木派は「与党に似合はず出足が鈍く、六日やつと事務所開きをしたのは確信あつてのことか」、本多派は「千票獲得は楽であらう、東部大正倶楽部系残党の活躍が目覚ましい」、川島派は「前回に運動もせず二百票を出た位で、今度は反鈴木派を率ゐて何処まで躍進するかが興味である」、篠原派は「上総銀行が消え足場がなくなり手を伸ばさない」と言う²⁸。特に川島の場合、前述の通り、母校専修大学の同期生の黒川鍋太郎（君津郡金谷村）がいた。当時の黒川は君津郡の金谷漁業組合顧問を務めており、『千葉毎日新聞』1932年2月11日付によると、その黒川の尽力の結果、組合は組合長・理事・監事・顧問名を列記した推薦状を組合員に発送し、川島を支援したと言う。前述の市場関係者票と同様、川島は個人で築いた政治資源を選挙に活かし、業界団体の支援を取り付けたのである。最後に君津郡の得票を見てみよう。後掲表4が示す通り、多田は自身の得票総数の約60%に当たる13,004票を君津郡から、鈴木は自身の得票総数の約50%に当たる11,708票を君津郡から、本多は前回の345票の約4倍に近い1,224票を君津郡から、篠原は前回より若干積み増して591票を君津郡からそれぞれ獲得している。川島の場合、前回の199票の6倍を越える1,224票を獲得している。同一制度での総選挙の継続、川島の連続当選等を背景として、川島の君津郡への進出は、ある程度、成功していたからこそ、このような票の掘り起しが可能だったと言えよう。それは第7章で示す通り、君津郡における川島の後援会結成に結実していくこととなる。

(3) 篠原陸朗

2期目を目指した篠原陣営は、『東京日日新聞』1932年2月2日付千葉版によると、前回同様、県会議員の島田彌久が選挙事務長に、千葉市会議員（市会議長）の西川測吉及び千葉市会議員の北澤春平が選挙委員に就任し、千葉市羽田屋旅館に選挙本部を設置した。東葛飾郡を地盤とする候補者にも関わらず、やはり前回1930年2月第17回総選挙同様、篠原は千葉市及び千葉郡の民政党地方議員に大きく支えられていた。『東京日日新聞』1932年2月10日付房総版によれば、島田は「篠原が一番弱いといふ人もあるが、正義が最後の勝利を占めることを僕は確信している」と述べ、前大蔵大臣である井上準之助「直系」篠原の当選に向けて、更に千葉市会議員の川島幸之助と八木担も駆使しながら、選挙運動の采配を振るう。しかし「篠原氏の郡部の得票は少くも四千、多ければ六千に達するだらうと観られる、又市部は民政票約四千弱として其七割は篠原氏」（『読売新聞』1932年2月7日付千葉版）との報道とは異なり、千葉市及び千葉郡からの得票

が伸びない。後掲表 4 を見ると、篠原は千葉市からは 1,950 票（前回 1,986 票）、千葉郡からは 3,796 票（前回 4,526 票）を獲得するに留まる。この苦戦を示すかのように、篠原の演説会を巡る報道は殆ど確認出来ない。数少ない 1 つが、『千葉毎日新聞』1932 年 2 月 10 日付に見える。即ち多田と共催の政見発表演説会（2 月 11 日）は、午後 6 時（千葉市教育会館）と午後 8 時（市原郡五井町蕪市場）永井柳太郎（民政党幹事長）の応援演説が予定されていた。しかし、これは多田と共催であり、篠原個人のものでは無く、寧ろ民政党千葉県支部としての演説会であった。

この篠原の最大の誤算は、血盟団事件（1932 年 2 月 9 日）で井上準之助が暗殺されたことである。「篠原陸朗氏は井上氏の直参の一人、前回の総選挙には井上氏の親身も及ばぬ応援演説は選挙民をいたく感動させたが、再出馬の篠原候補にとって井上氏を失ったことは何といつても痛手」（『東京日日新聞』1932 年 2 月 11 日付房総版）との報道からは、篠原と井上の関係性を窺える。頼むべき支援者を失った篠原の下から、『読売新聞』1932 年 2 月 12 日付千葉版が報じる通り、「大蔵省縁故の野田醤油」と「前回の参謀柘田氏」が「逃げを打」つ等して、陣営は苦戦の度合いを増していく。鈴木喜平（中山町長）が自ら「演説ビラ書きに筆を走らせ」（『千葉毎日新聞』1932 年 2 月 16 日付）ても、この劣勢を跳ね返すことは困難であった。加えて地盤である筈の東葛飾郡から選出された県会議員（成島勇と渋谷司）の動向が全く報じられていない。東葛飾郡の地方議員の支援が見られないこと自体、篠原の苦戦を物語っていた。

（4）地盤協定

『東京日日新聞』1932 年 2 月 2 日付千葉版は、2 月 2 日、政友会千葉県支部千葉支会が加納屋本店で会合を開き、千葉市及び千葉郡における川島・鈴木・本多 3 名の政友会候補の地盤協定を協議すると報じた。このケースは、戦前期中選挙区制度における千葉県第 1 区の詳細な地盤協定として、管見の限り、唯一の事例となる。本研究のフィールドである東葛飾郡では無いが取り上げよう。

これは、前回 1930 年 2 月第 17 回総選挙での川島と本多の「同士討ち」（『東京日日新聞』1932 年 2 月 3 日付房総版）を反省したからこそ、県会議員の川口為之助が「音頭取り」（『読売新聞』1932 年 1 月 30 日付千葉版）して、地盤協定を協議し、各町村単位で 3 人に票田が割り振られることとなったと言う。即ち『読売新聞』1932 年 2 月 7 日付千葉版によると、千葉市は「切取勝手の自由行動」地帯として協定の対象外とされ、郡部のみ協定が結ばれることとなった。即ち本多は幕張町・検見川町・津田沼町・犢橋村、川島は都村・都賀村・大和田町・睦村・豊富村・二宮村、鈴木は白井村・更科村・誉田村・椎名村・蘇我町・生濱村が割り振られた。しかし最終的には『読売新聞』1932 年 2 月 15 日付千葉版が報道する通り、鈴木が「君津郡の得票ダブ付いてゐるからと放棄を申出た」為、協定がやり直された。結果、本多の票田には新たに生濱村・蘇我町・千城村が、

川島の票田には新たに更科村・白井村・誉田村が追加された。この報道を実際の得票率で裏付ける為、表2を作成した。事実、川島と本多は割り振られた町村において、高い得票率を示す。この千葉支会による地盤協定は、一定程度、成功したのである。

しかし注意すべきは、更科村と犢橋村の得票率である。まず川島に割り当てられた筈の更科村を見ると、川島の得票率が鈴木のと拮抗している。当初、更科村は鈴木に割り振られていたが、前述の通り、途中で川島に移譲された票田である。ここからは、政党の意向、即ち鈴木から川島への投票先の変更が徹底・遵守されていなかった姿を窺える。蘇我町・白井村・生濱村においても、更級村に近い傾向を読み取れる。また本多に割り振られた筈の犢橋村を見ると、本多では無く、殆ど川島に投票されていることが窺える。加えて川島に割り振られた筈の睦村と豊富村を見ても、本多の得票率が決して低くは無い。つまり政友会千葉県支部千葉支会の意向では、町村の有権者を嚮導し切れなかったのである。換言すれば、政党の有権者への影響力はそれ程に高く無く、有権者はそれに縛られない存在であったと言えよう。僅か4つの村の事例だが、総選挙における有権者の投票基準が、政党では無く、候補者個人に求められていた証左と考えられる。

表2: 千葉郡における政友会候補得票数及び得票率

	川島		本多		鈴木		合計
	得票数	得票率	得票数	得票率	得票数	得票率	
蘇我町	24	7.3%	212	64.8%	91	27.8%	327
生濱村	65	16.2%	272	67.8%	64	16.0%	401
椎名村	24	11.9%	168	83.2%	10	5.0%	202
誉田村	312	81.0%	52	13.5%	21	5.5%	385
白井村	250	63.1%	70	17.7%	76	19.2%	396
更科村	255	54.8%	10	2.2%	200	43.0%	465
千城村	81	27.6%	191	65.0%	22	7.5%	294
都村	374	88.2%	43	10.1%	7	1.7%	424
都賀村	353	78.8%	85	19.0%	10	2.2%	448
犢橋村	399	93.9%	19	4.5%	7	1.6%	425
検見川町	51	7.2%	659	92.4%	3	0.4%	713
幕張町	112	11.7%	790	82.5%	55	5.7%	957
津田沼町	127	13.6%	800	85.8%	5	0.5%	932
二宮村	508	84.8%	89	14.9%	2	0.3%	599
大和田町	341	90.9%	32	8.5%	2	0.5%	375
睦村	315	66.3%	160	33.7%	0	0.0%	475
豊富村	251	74.0%	84	24.8%	4	1.2%	339
合計	3842		3736		579		8157

出典: 衆議院事務局『第18回衆議院議員総選挙一覧』より作成

一方、民政党に関しては、『東京日日新聞』1932年2月2日付千葉版を見る限り、多田と篠原の両者が千葉市及び千葉郡で地盤協定を締結したようだが、「千葉郡市は大体篠原氏の地盤として、多田氏は積極的の侵略をなさざる」程度の抽象的な内容であった。これは選挙戦が進む中でも、変化が見られない。事実、『東京朝日新聞』1932年2月10日付房総版によれば、千葉市は「篠原氏の地盤と認め、篠原氏で市原、君津両郡下に斬り込まぬ代りに、多田派では市内で演説会は開かぬが、一部有志が多田氏を推す事は自由である」と報道された通り、多田

が市原郡及び君津郡、篠原が千葉市と言う棲み分け程度の域を出ていない。新聞報道レベルからは、前述した政友会のように、具体的に町村を割り振る地盤協定は窺えない。

第4節 選挙を終えて

(1) 選挙結果

『読売新聞』1932年2月15日付千葉版は「川島派は青年層をガッチリ抑へ、第一線の本多氏に肉迫してゐる、篠原派は殊に大蔵省縁故の野田が川島、本多、鈴木の本派に大部分を奪はれて収穫激減らしいが、南部は中村総参謀の勢力で却々崩壊しない様子、従つて北部の損失を補填し得るかも知れない」と報じた。川島は従来通りに青年層からの支持を得ていたこと、野田醤油関連票は篠原から離れて与党政友会候補に分散していること、同じく篠原はその代わりに東葛飾郡南部からの集票で損失分を補いつつあること等が確認出来る。篠原にもまだ可能性が残されていたようである。

そこで各紙最後の情勢予測を見よう。例えば『千葉毎日新聞』1932年2月17日付は「政友本多派は東葛飾郡京成沿線に先陣を張り千葉郡市、市原、君津の一部にも進出して既に当選圏内に入り、鈴木派また君津、市原の両郡を本拠として東葛北部に進撃し、本多派同様優勢を伝へられている、川島派は東葛を中心に千葉郡市、市原、君津まで手を延ばして侮り難い勢力を納めてゐる、これに対する民政候補多田派は篠原派唯一の地盤東葛飾に猛進を策し、篠原派また多田派の本拠地を突いて随所に見苦しい同志打ちを演じてゐる」とし、3名の政友会候補の優勢と2名の民政党候補の苦戦を報じる。これは、『東京日日新聞』1932年2月18日付房総版が「政友川島、民政篠原両氏の一騎打ち」とし、最後の1議席を巡って川島と篠原が鎬を削っているとの報道と軌を一にする。しかし『読売新聞』1932年2月19日付千葉版を見ると、「市川、船橋地方を中心とする南部は俄然形勢一変し、第一区の最高を噂されてゐた本多貞次郎氏が形勢不穩の報が伝へられて、之れに代つた多田派一躍優勢を示し、篠原派は船橋中山方面で広範の違反に問はれたが依然地盤には何等の異状を見ざる如く運動員連頗る落ち着きを見せ、川島鈴木の両政友は頗る苦戦と見られてゐる」と報じている。絶対的優勢と見なされていた本多の苦戦が事実であるとするならば、川島・本多・篠原の勝負の行方は最後まで分からなくなっていたとも言える。

投票日、『読売新聞』1932年2月20日付千葉版は県庁発表の順位予想を報じた。即ち鈴木の1位は揺るがず、2位本多、3位川島、4位多田、5位篠原と報じ、篠原の落選を予想した。翌日の『読売新聞』1932年2月21日付千葉版も最終的な票読みとして、鈴木 22,000～25,000票・本多 19,000～22,000票、多田 17,000～19,000票、川島 17,000～18,000票、篠原 13,000～15,000票と報じ、篠原の落選を予想した。

実際は、表 3 の通り、1 位が鈴木、2 位が多田、3 位が本多、4 位が川島（18,758 票）で、篠原（17,319 票）は 1,439 票差で涙を飲んだ。『東京日日新聞』1932 年 2 月 22 日付房総版によれば、本多の邸宅には犬養毅総理総裁と久原房之助幹事長からの祝電が、4 位当選を果たした川島の船橋選挙事務所には同じく犬養からの祝電が舞い込んだ。こうして本多は返り咲き、川島は連続当選 3 回を果たしたのである。篠原の落選は、与党政友会の圧勝（174 議席 → 301 議席）を象徴していたのであろう。なお千葉県第 1 区の投票率は 82.9%（全国 80.0%）、棄権率は 15.4%（全国 18.2%）となり、前者は上昇の一途、併せて後者は下降の一途を辿った。

表3: 1932年2月第18回総選挙選挙結果一覧

1位(政) 鈴木隆			2位(民) 多田満長			3位(政) 本多貞次郎		
東葛飾郡	1,570	7.1%	東葛飾郡	2,804	12.7%	東葛飾郡	13,103	63.1%
千葉市	707	3.2%	千葉市	1,049	4.7%	千葉市	1,903	9.2%
千葉郡	579	2.6%	千葉郡	1,006	4.5%	千葉郡	3,736	18.0%
市原郡	7,628	34.4%	市原郡	4,294	19.4%	市原郡	790	3.8%
君津郡	11,708	52.8%	君津郡	13,004	58.7%	君津郡	1,224	5.9%
全体	22,192	100.0%	全体	22,157	100.0%	全体	20,756	100.0%
4位(政) 川島正次郎			5位(民) 篠原陸朗					
東葛飾郡	11,865	63.3%	東葛飾郡	10,033	57.9%			
千葉市	1,334	7.1%	千葉市	1,950	11.3%			
千葉郡	3,843	20.5%	千葉郡	3,796	21.9%			
市原郡	492	2.6%	市原郡	949	5.5%			
君津郡	1,224	6.5%	君津郡	591	3.4%			
全体	18,758	100.0%	全体	17,319	100.0%			

出典:『第18回衆議院議員総選挙一覧』より作成

また、この表 3 からは、前述した各代議士の持つ東葛飾郡での基礎票との関係が見出せる。民政党の場合、篠原の県会議員選挙への関わりが見られない為、政友会に絞る。本多の最終的な基礎票は 12,024 票だった筈だが、東葛飾郡では 1,079 票減じている。これに対して川島の基礎票は 6,794 票だった筈だが、東葛飾郡では 5,071 票も増やしている。これを見る限り、前述の櫻井良樹の指摘、即ち櫻井は県会議員への支持票が必ずしも総選挙立候補者への投票数に繋がっていないとの指摘は、野田地域に限定された事象で、東葛飾郡全体に視野を広げた場合、やや異なっていたようである。この背景としては、同じく櫻井が指摘した通り、恐らく 1 月県会議員選挙での野田地域の争いの熾烈さが考えられる²⁹。

(2) 得票率から見た地盤

表4: 東葛飾郡各町村の得票数及び得票率一覧

町村名	投票総数	本多(政友会)		川島(政友会)		篠原(民政党)		多田(民政党)		鈴木(政友会)	
		得票数	得票率	得票数	得票率	得票数	得票率	得票数	得票率	得票数	得票率
船橋町	3,359	1,064	31.7%	922	27.4%	1,099	32.7%	262	7.8%	12	0.4%
葛飾村	1,030	460	44.7%	245	23.8%	301	29.2%	20	1.9%	4	0.4%
法典村	293	40	13.7%	156	53.2%	80	27.3%	4	1.4%	13	4.4%
塚田村	213	58	27.2%	48	22.5%	102	47.9%	5	2.3%	0	0.0%
八栄村	615	211	34.3%	311	50.6%	78	12.7%	15	2.4%	0	0.0%
浦安町	2,028	393	19.4%	573	28.3%	414	20.4%	746	36.8%	2	0.1%
行徳町	1,528	343	22.4%	651	42.6%	343	22.4%	189	12.4%	3	0.2%
南行徳村	801	125	15.6%	329	41.1%	230	28.7%	116	14.5%	1	0.1%
市川町	2,865	1,406	49.1%	414	14.5%	720	25.1%	269	9.4%	56	2.0%
八幡町	914	335	36.7%	276	30.2%	257	28.1%	36	3.9%	10	1.1%
中山町	1,076	171	15.9%	304	28.3%	565	52.5%	10	0.9%	26	2.4%
国分村	575	259	45.0%	203	35.3%	81	14.1%	27	4.7%	5	0.9%
大柏村	505	228	45.1%	179	35.4%	91	18.0%	6	1.2%	1	0.2%
鎌ヶ谷村	701	324	46.2%	177	25.2%	169	24.1%	23	3.3%	8	1.1%
松戸町	1,629	522	32.0%	646	39.7%	316	19.4%	134	8.2%	11	0.7%
明村	891	256	28.7%	317	35.6%	215	24.1%	99	11.1%	4	0.4%
八柱村	558	287	51.4%	176	31.5%	81	14.5%	12	2.2%	2	0.4%
高木村	606	211	34.8%	245	40.4%	134	22.1%	14	2.3%	2	0.3%
馬橋村	556	169	30.4%	189	34.0%	183	32.9%	15	2.7%	0	0.0%
小金町	633	304	48.0%	224	35.4%	97	15.3%	4	0.6%	4	0.6%
流山町	892	377	42.3%	232	26.0%	227	25.4%	43	4.8%	13	1.5%
八木村	559	277	49.6%	185	33.1%	94	16.8%	3	0.5%	0	0.0%
新川村	695	333	47.9%	145	20.9%	179	25.8%	32	4.6%	6	0.9%
田中村	885	357	40.3%	237	26.8%	263	29.7%	22	2.5%	6	0.7%
柏町	1,195	523	43.8%	237	19.8%	305	25.5%	106	8.9%	24	2.0%
風早村	696	355	51.0%	216	31.0%	114	16.4%	8	1.1%	3	0.4%
土村	626	274	43.8%	245	39.1%	79	12.6%	18	2.9%	10	1.6%
手賀村	815	288	35.3%	283	34.7%	173	21.2%	44	5.4%	27	3.3%
富勢村	622	112	18.0%	78	12.5%	391	62.9%	40	6.4%	1	0.2%
我孫子町	892	346	38.8%	170	19.1%	204	22.9%	170	19.1%	2	0.2%
湖北村	608	149	24.5%	165	27.1%	157	25.8%	31	5.1%	106	17.4%
布佐町	576	110	19.1%	106	18.4%	227	39.4%	5	0.9%	128	22.2%
旭村	548	163	29.7%	243	44.3%	104	19.0%	21	3.8%	17	3.1%
野田町	3,369	842	25.0%	1,239	36.8%	851	25.3%	198	5.9%	239	7.1%
梅郷村	686	185	27.0%	265	38.6%	182	26.5%	24	3.5%	30	4.4%
福田村	725	214	29.5%	333	45.9%	146	20.1%	7	1.0%	25	3.4%
七福村	557	97	17.4%	195	35.0%	90	16.2%	10	1.8%	165	29.6%
川間村	893	364	40.8%	149	16.7%	267	29.9%	4	0.4%	109	12.2%
木間ヶ瀬村	791	337	42.6%	275	34.8%	117	14.8%	2	0.3%	60	7.6%
二川村	820	128	15.6%	172	21.0%	127	15.5%	4	0.5%	389	47.4%
関宿町	549	207	37.7%	110	20.0%	180	32.8%	6	1.1%	46	8.4%
合計	39,375	13,204	34.0%	11,865	31.1%	10,033	25.3%	2,804	5.1%	1,570	4.6%

出典:『第18回衆議院議員総選挙一覧』より作成

表4からは、次の2点が読み取れる。第1は、東葛飾郡での地盤協定の有無である。政友会の場合、川島と本多が依然として票を奪い合っており、両者の間では地盤協定が成立しなかったか、若しくは成立していたとしても遵守されていなかったと思われる。やはり長年のライバル関係がある両者の間で、票を譲り合う妥協且つ協調的行為は難しかった。しかし鈴木得票を見ると、0票が4町村、一桁台が16町村ある。新聞報道では地盤協定が確認出来なかったものの、恐らくそれらの町村に関しては、鈴木には投票しない程度の合意があったと思われる。川島と本多の人間関係とは異なり、両者と地盤を重複し無い鈴木の場合、地盤協定は成立し易いと思われる。民政党の場合、我孫子町のように得票を競い合う町村に加えて、木間ヶ瀬村のように明らかな得票数の片寄りを見せる町村が確認出来る。前述の新聞報道で見た大まかな地盤協定の中に東葛飾郡は入っていなかつ

たが、千葉市・君津郡・市原郡で地盤協定が存在していた以上、この地でも締結された可能性は否定出来無い。このように見ると、やはり東葛飾郡全体を見た場合、「集団投票³⁰」論は特定町村に限定された現象で、普遍化し難いと言えよう。

第2は、1928年2月第16回総選挙・1930年2月第17回総選挙の結果と併せると、より一層と候補者の地盤が見えることである。東葛飾郡を地盤とする候補は3人存在する為、仮に2回以上連続で33%以上の得票率を占めた地域を列挙してみよう。川島は八栄村(35.4%→45.0%→50.6%)、行徳町(45.5%→33.0%→45.5%)、国分村(30.6%→38.1%→35.3%)、松戸町(50.9%→37.2%→39.7%)、高木村(61.7%→53.1%→40.4%)、馬橋村(38.3%→36.4%→34.0%)、福田村(49.4%→36.1%→45.9%)で継続して得票率が高い。本多は葛飾村(70.2%→46.4%→44.7%)、大柏村(49.2%→46.4%→49.2%)、八柱村(50.7%→44.4%→51.4%)、小金町(58.9%→47.6%→48.0%)、八木村(62.7%→46.5%→49.6%)、新川村(35.7%→40.4%→47.9%)、田中村(29.5%→33.0%→40.3%)、風早村(35.7%→58.2%→51.0%)、川間村(37.8%→42.6%→40.8%)、木間ヶ瀬村(42.6%→38.7%→42.6%)で継続して得票率が高い。篠原は塚田村(53.7%→47.9%)、中山町(52.2%→52.5%)、富勢村(82.3%→62.9%)、布佐町(55.7%→39.4%)、関宿町(45.4%→32.8%)となるが、落選している為、全体的に得票率は減少傾向となる。しかし、その分、微増している中山町に注目したい。第2章で示した通り、1924年5月第15回総選挙において、当時、東葛飾郡の憲政会系の勢力から支援された立候補した川島は、中山町で強い支持を得ていた。しかし以降の総選挙を見ると、1928年2月第16回総選挙(第3章表5)では当時民政党の本多が35.2%、同じく当時民政党の志村が28.9%を占めており、川島は20.9%に過ぎない。また1930年2月第17回総選挙(第5章表2)では民政党の篠原が52.2%を獲得したのに対し、川島は29.4%に留まっている。中山町は、第5章で示した通り、富勢村と同様、民政党の強い影響下に置かれており、特定個人や組織が民政党候補への投票を嚮導する「集団投票」の論理が見出せる町村であった。

(3) 費用

選挙費用の一端を探る為、表4を作成した。県知事に報告する数字のため、費用の実態を表したものとは言えないが、どの項目に重点が置かれていたかが窺える。第3章表4及び第5章表2と比較すると、次の3点が確認出来る。第1は、3候補とも集会会場費に高い割が割かれており、前述した選挙運動での演説会の回数之多さと概ね軌を一にしている点である。今まで3回の選挙を比べると、川島(18.8%→13.9%→13.6%)は微減、本多(11.4%→13.5%→17.9%)は大幅増、篠原(15.4%→12.2%)は減となっている。但し『東京朝日新聞』1932年2月18日付房総版によると、2月17日現在の調査に基づき、「普選の最大武器」とされる各候補者の演説会が激減したと指摘する。千葉県第1区及び第3区の

みだが、川島正次郎 62 回・篠原陸朗 44 回・多田満長 41 回・本多貞次郎 29 回・鈴木隆 5 回、北田正平（民政党）48 回・土屋清三郎（民政党）28 回・竹澤太一（政友会）22 回・小高長三郎（政友会）20 回・岩瀬亮（政友会）18 回・安田正男（民政党）18 回・森轟昶（政友会）6 回で全合計 341 回だが、それは前回 1930 年 2 月第 17 回総選挙の約半数に過ぎないと言う³¹。恐らく 1 つの会場にかかる費用が高かったのであろう。

第 2 は、3 候補とも通信費を大幅に減らしている点である。川島は通信費（13.7%→19.5%→8.2%）、本多は通信費（20.5%→22.9%→3.4%）、篠原は通信費（14.0%→5.2%）となっており、同じ傾向を示す。しかし併せて印刷費も減少する筈だが、川島のみ印刷費（34.4%→20.4%→48.7%）が激増している。推測の域を出ないが、立候補挨拶状や推薦状を大量に印刷し、それを郵送せずに、個人宅に直接、投函した可能性も否定できない。なお本多は印刷費（34.2%→30.4%→25.9%）減、篠原は印刷費（28.7%→25.5%）微減となっており、通信費の減少に比例している。

第 3 は、川島（11.1%→9.4%→9.5%）の場合は横ばいだが、本多（5.7%→8.4%→16.1%）と篠原（9.9%→16.1%）の船車馬費が増加させており、遠方での選挙運動に力を入れていたことが分かる。川島にとっての遠方の票田は君津郡だが、そこには前述の通り、専修大学同期生の黒川がいた。黒川にある程度の集票を任せていたとするならば、その地に対する交通費の割合は減少することとなる。地盤から遠く離れた地域での集票を任せ得る人物の有無で、選挙費用の在り方は大きく変わろう。

しかし今回の選挙では、川島を始めとする代議士の政治資金に関して、管見の限り、直接的な史料を発見出来無かった。ただ升味準之輔によると、政友会候補は平均 1 万 500 円、民政党候補は平均 7,500 円と言う³²。やはり政権与党の方が潤沢な選挙資金を準備出来たことが窺える。

表4:選挙費用内訳一覧

		本多		川島		篠原	
報酬	選挙事務員	108	1.5%	0	0.0%	97	1.8%
	傭人	1409	19.0%	227	2.4%	809	15.4%
家屋費	選挙事務所	266	3.6%	230	2.4%	135	2.6%
	集会会場	1324	17.9%	1306	13.6%	641	12.2%
通信費		254	3.4%	788	8.2%	274	5.2%
船車馬費		1191	16.1%	914	9.5%	847	16.1%
印刷費		1922	25.9%	4659	48.7%	1342	25.5%
広告費		219	3.0%	70	0.7%	49	0.9%
筆墨紙費		80	1.1%	23	0.2%	69	1.3%
休泊費		51	0.7%	158	1.7%	80	1.5%
飲食物費		506	6.8%	467	4.9%	421	8.0%
雑費		87	1.2%	731	7.6%	489	9.3%
合計		7417		9573		5253	

出典:『千葉県報』号外(1932年3月15日付)より作成

注:単位は円で、銭及び厘は切り捨てた

(4) 違反

司法省刑事局が作成した資料によると、千葉県の場合、149人逮捕中、起訴84人(56.4%)・不起訴65人(43.6%)となっており、普選期で初めて両者の数値が拮抗した³³。ただ逮捕者の絶対数は287人→367人→149人と大きく減少している。平田奈良太郎(大阪区裁判所判事)が指摘した通り、今回選挙の「買収は前回程度ではなかつた³⁴」と減少傾向にあった。しかし「演説会は効目が薄く、それよりもある物の方が余程効果てき面だといふことを如実に示したもので、選挙界が如何に腐敗してゐるかが分かる」(『東京朝日新聞』1932年2月18日付房総版)と報じられたとおり、それが根絶された訳では無かつた。

さて落選した篠原の苦戦振りを示すかの如く、選挙期間中から、その違反者の摘発は度々報じられた。例えば『千葉毎日新聞』1932年2月16日付によると、篠原陣営の選挙参謀の中村勝五郎(元中山町長)から千葉市吾妻町の安藤某と日暮清次郎が150円を受け取り、1票につき10円をばら撒いたと言う。また安藤某と日暮は市川町の白井勝造に対して、1票3円での投票予約を強要したと言う。この安藤某は、「選挙毎にウロツク選挙ブローカーのお定まりの顔だけが忙しさに駆けずり廻つてゐる」(『読売新聞』1932年2月6日付)との報道の通り、典型的な“選挙ブローカー”³⁵だったようである。この買収は、安藤某が本多の事務所も訪問し、買収金を貰いに行ったことで露見した(『東京朝日新聞』1932年2月17日付房総版)。なお『東京日日新聞』1932年2月17日付房総版によると、安藤某と日暮は、取り調べの後、千葉刑務所に収容された。

選挙後の報道は、専ら篠原陣営の選挙違反で占められている。例えば『東京朝日新聞』1932年3月1日付房総版は、特に前述の中村勝五郎を巡る選挙違反行為が詳細に報じられている。即ち東京に逃亡していた「資産家」中村勝五郎の行方が判明し、近く召喚・取り調べ・起訴されると言う。この他、『東京朝日新聞』1932年3月5日付房総版によると、篠原派の買収として、船橋町の金子新之助(20円)・宮本菅五郎(20円)・高橋竹次郎(20円)、行徳町の岩村良之助(20円)が略式罰金刑を言い渡されたと言う。当時の千葉県知事は、東京高等師範学校卒業後、警視庁警視として官僚生活をスタートさせた大久保留次郎(台湾総督府警務局長)だったが、「吉植庄一郎、森、鈴木、川島、今井各代議士は大久保知事、鈴木内務部長を交へ秘策を進め」(『東京日日新聞』1932年1月23日付房総版)たと報じられている通り、政友派知事である。その大久保知事の下、民政党候補への選挙干渉は激しく、結果として民政党候補の選挙違反が数多く報じられると思われる。

- 1 池田宏樹『明治・大正期の地方政治と社会』（彩流社 2014年）103頁。
- 2 浜口雄幸内閣の崩壊から犬養毅内閣の成立に関しては、村井良太『政党内閣制の展開と崩壊成立——一九二七～一九三六年——』（有斐閣 2014年）第2章及び第3章、小山俊樹『憲政常道と政党政治——近代日本二大政党制抗争と挫折——』（思文閣出版 2012年）第6章及び第7章が詳しい。
- 3 櫻井良樹「選挙分析から見た昭和初期における野田市域と東葛飾郡」（『野田市史研究』第12号 2001年）139頁、144～146頁。
- 4 『千葉毎日新聞』1931年12月22日付。
- 5 政友会地方支部に関しては、小山博也「制限選挙制度下における政党支部組織——埼玉県政友会支部について——」（高橋勇治・高柳信一編『政治と公法の諸問題』＜東京大学出版会 1963年＞）が、民政党地方支部に関しては、大西比呂志『横浜市政史の研究——近代都市における政党と官僚——』（有隣堂 2004年）第6～7章が詳しい。
- 6 犬養内閣では、前田米蔵（東京府第6区）が商工大臣に就任する。佐藤剛「川島正次郎論」（『政治経済』1959年11月＜林政春『国会議員の風雪 25年——自民党幹事長川島正次郎氏の政界コース——』〔東京タイムズ千葉支局 1959年〕＞所収）37頁によれば、その前田と出会ったのはこの時期であったと言う。しかし、この両者が接近するのはまだもう少し先のことで、詳しくは第10章で指摘したい。
- 7 立澤捨吉は「石油雑貨荒物書籍商」を営む「町内屈指の有力者」（『房総 町村と人物』＜多田屋書店 1918年＞219頁）で、松戸町会議員を務めていた。
- 8 野田市郷土博物館蔵『染谷静男家文書』A-0203-29。
- 9 「河村源内宛犬養毅他有志書状」（我孫子市教育委員会蔵『河村貞喜家文書』435）。
- 10 前掲『染谷静男家文書』A-0203-17。
- 11 前掲櫻井「選挙分析から見た昭和初期における野田市域と東葛飾郡」146～148頁。
- 12 「1936年2月付染谷亮作宛高原正高立候補挨拶」（前掲『染谷静男家文書』B-014-20）
- 13 昭和9年1月「政事結社調」（岡山県立記録資料館蔵＜国立国会図書館憲政資料室蔵＞『松本学関係文書』R13）。但しこの史料で登場する結社は、「政党本部支部又ハ後援団体等ニシテ届出アリタルモノ」に限定されている。
- 14 市制施行80周年記念・企画展展示図録『松井天山の鳥瞰図と市川市域』（市立市川歴史博物館 2015年）25頁。
- 15 『千葉県の歴史通史編 近現代2』（千葉県 2006年）362～371頁が詳しい。
- 16 「河村源内宛川島正次郎葉書」（前掲『河村貞喜家文書』432）。
- 17 前掲「政事結社調」（『松本学関係文書』R13）。
- 18 「立憲政友会公認候補」（『政友』第378号＜1932年2月＞）51頁。
- 19 奥健太郎『立憲政友会の研究——党内派閥の分析を中心に——』（慶応義塾出版会 2004年）273頁。
- 20 上山和雄『陣笠代議士の誕生——日記にみる日本型政治家の源流——』（日本経済評論社 1989年）191頁によれば、代議士の地盤涵養は次の4点に集約されると言う。即ち第1はインフラ整備などの公共的問題への働きかけ、第2は代議士個人やそのグループを巡る利権、第3は斡旋や便宜、第4は公共的・私的な紛争の調停である。
- 21 前掲「政事結社調」（前掲『松本学関係文書』R13）によれば、1934年1月時点で、中正会の存在は確認出来無い。大澤はこの後、1936年1月県会議員選挙及び1937年4月第20回総選挙で共に落選することから、次第に政治的影響力を低下させていくと思われる。
- 22 『房総人名辞書』（千葉毎日新聞社 1909年）486頁によると、三橋は農科大学（現北海道大学農学部）出身の農林業経営者である。『東京日日新聞』1932年2月10日付房総版によると、彼は「初めて」選挙運動に携わったと述べるが、実は1902年第7回総選挙（大選挙区制）で千葉県第10郡部（鎌ヶ谷村等）から無所属で立候補、落選した過去を持つ。『鎌ヶ谷市史資料編IV 近現代1』（鎌ヶ谷市 1995年）347～351頁には、三橋の選挙運動を示す地方新聞（『新房総』）が収録されている。なお今回の総選挙後の1932年9月10日、三橋は政友会所属の貴族院多額納税者議員（千葉県選出）に当選する（『房総日日新聞』1932年9月11日付）。従って三橋はその資金力で本多を支えたのであろう。

- 2³ 前掲『染谷静男家文書』A-0202-15。
- 2⁴ 前掲『染谷静男家文書』A-020-14。
- 2⁵ 前掲「染谷静男家文書」B-014-22。
- 2⁶ 「昭和七年立憲政友会所属議員派閥調べ」（前掲『松本学関係文書』R13）。
- 2⁷ 浅野和生「戦前期における地方選出代議士の選挙区での活動—熊本第一区、大麻唯男の研究—」（大麻唯男伝記研究会編『大麻唯男 論文編』〈財団法人櫻田会 1996年〉）77頁は、大麻の演説会の場所が地盤地域に限定されていると指摘した。
- 2⁸ 『千葉県史通史編 近現代 2』（千葉県 2006年）292頁（市原博執筆）によると、1931年6月、上総銀行は千葉合同銀行（現在の千葉銀行）に吸収されたと言う。
- 2⁹ 前掲櫻井「選挙分析から見た昭和初期における野田市域と東葛飾郡」146～148頁。
- 3⁰ 浅野和生「戦前選挙における町村単位の集団投票—第十六回～二十回総選挙における熊本一区の投票結果の分析—」・前掲浅野「戦前期における地方選出代議士の選挙区での活動」・同「戦前期熊本における中央型政治家と地方型政治家」（前掲『大麻唯男 論文編』）。
- 3¹ 既に指摘した通り、新聞報道上、篠原の演説会の開催を殆ど確認出来無かった。篠原陣営の演説会開催は、恐らく計画的では無く、突発的なものが多かったのではないだろうか。
- 3² 升味準之輔『日本政党史論』第5巻（東京大学出版会 1979年）268頁。
- 3³ 司法省刑事局「昭和三・五・七年施行衆議院議員選挙事犯調査表」（前掲『松本学関係文書』R10）。
- 3⁴ 平田奈良太郎『司法省研究報告第19輯 8 選挙犯罪の研究—特に買収犯罪について—』（司法省調査課 1935年）682頁。
- 3⁵ 杣正夫『日本選挙制度史—普通選挙法から公職選挙法まで—』（九州大学出版会 1986年）106頁。

第7章 川島正次郎の成長

1932年2月第18回総選挙で勝利を収めた犬養毅政友会内閣であったが、同年5月15日、5.15事件が発生し、犬養はこの世を去る¹。翌日、高橋是清大蔵大臣が臨時総理大臣として閣僚の辞表を取り纏め、総辞職。5月17日、政友会は議員総会を開催し、後継総裁に鈴木喜三郎を選出。引き続き政権担当の意欲を示したが、軍部は政党内閣に反対していた。元老西園寺公望は様々な政治情報を総合的に組み合わせて判断した結果、政党内閣を断念。5月22日に海軍大将の齋藤実を推薦し、26日、政党・官僚・軍部などの各勢力が閣僚に名を連ねたことから、いわゆる「挙国一致」齋藤内閣が誕生したのである。千葉県の場合、6月28日、在任6ヶ月で大久保留次郎は交代させられ、内務省土木局河川課長の岡田文秀が転任する。このような非政党内閣の環境の中²、川島は代議士として大きく成長していくこととなる。

第1節 君津郡川島正次郎後援会の結成

(1) 海軍参与官就任と選挙区の為の政治活動

連続3期当選を果たした川島だが、その直後の3月3日、一人息子の正孝を肺炎で亡くした(『千葉毎日新聞』1932年3月5日付)。妻の幸を亡くして以後、その子正孝は祖母などによって育てられていたが、これで川島は天涯孤独の身となった。以降、戦前期、川島の身内に関する報道は確認出来ない。唯一の例外として、後年の報道だが、『東京朝日新聞』1937年4月28日付千葉版は「准二世」として甥の宮男(25歳)を紹介している。宮男は、日本橋で鼈甲商を営む川島の実兄鐵太郎の長男である。この記事によると、宮男は小学生の頃から川島の選挙運動に従事し、戸別訪問も経験済みだと言う。そして17歳の時に家業を継ぐことに反発し、川島の下へと身を寄せる。宮男は「本当の親父のやうな気がします」とコメントを寄せると共に、川島から教えられたこととして、「人には誰にも欠点がある、その欠点を一々取り上げてゐたら文句ばかりいつて居なければならぬ、だから欠点は忘れてその人の良いところを見て付合はなければならぬ」との言葉を紹介する。但し、これ以降、宮男の存在が語られることは無かった。筆者が川島の元秘書(1959年～1970年)の鈴木信也氏にインタビュー(2015年6月11日)した際、宮男の存在は「聞いたことが無い」と述べておられる。推測の域を出ないが、鈴木氏が川島の秘書になるまでの間、何らかの形で命を落としたものと思われる。

さて代議士3回生の川島は、第2章で示した通り、川島の選挙資金を指南した中島守利と共に、政友会鈴木派の中でも鳩山一郎に接近し、1932年7月時点、その系列下の代議士となっていた³。しかし1933年になると、鳩山の下を離れ、

犬養毅総裁の下で党幹事長を務めた森恪に接近していたようである⁴。この点は、第6章で指摘した政友会本部からの推薦状からも読み取れる。川島の伝記において、川島が森の直系代議士として記述されている理由は⁵、ここに求められよう。いわば川島の党内環境が変化し始めたのである。但し森は1932年12月11日に病死することから、何れ川島は厳しい党内環境に晒されることになる。

この時期の川島の活動は、以下の2点に集約される。第1は、海軍省参与官の就任である。周知の通り、5.15事件（1932年）後、新たに海軍大将の齋藤実が挙国一致内閣を組閣したが、まだ党内主流派の鳩山派に名を連ねていた川島は、この齋藤内閣の末席に迎えられる。そもそも『千葉毎日新聞』1932年5月31日付は、農林省または商工省参与官への就任を有力視していた。当時、当選4～5回で政務次官、当選3回で参与官が通例だったらしく⁶、いわば順当な人事ではあった。但し配属省庁に関しては、前述の通り、必ずしも一定していない。例えば『読売新聞』1932年5月31日付千葉版によると、文部省参与官候補として擬せられている。この報道を受けて、川島派の県会議員で川島の選挙事務長を務めたことのある梨本太兵衛、川島の支援者である松戸町会議員の岡田兼吉の両名は「金ピカ服はこちらで仕度して進せると、首を長くして吉報の到るを待ち構へ」ており、川島の参与官就任に大きな期待を寄せていた。また『東京日日新聞』1932年6月1日付房総版においても、同様に「今日の閣議で正式に発令される」と文部参与官への就任を報じている。これに対して川島は「実は二、三日前に鳩山さんから君に来てもらふからといふお話はあつた」と裏事情を話し、「第一はスポーツは大いにやらねばいかんな、昨年僕が海外に行つて来た時、一番痛感した」と抱負も述べている。「鳩山系のちやきちやき」と評されていた川島は、文部参与官に意欲を出していた。ここからも、1932年時点の川島が鳩山派代議士であることが窺える。一方、『東京朝日新聞』1932年6月1日付房総版は、ラジオニュースで「司法省参与官」就任が報じられたと言う。すると川島を取り囲む支持者が「川島おごれ」と声を上げたのに対し、川島が「何がいい」と答えた。川島が参与官に就任することは既定路線だったが、配属省庁に関しては、極めて流動的であった。従って川島の能力や見識が買われての参与官就任では無かったと言えよう。

実際には、文部省でも司法省でも無く、岡田啓介海軍大臣の下、海軍省参与官に就任した。戦後の川島の回想によると、自ら海軍省を志願したようだが⁷、前述の新聞報道を鑑みれば、必ずしもそうでは無かったようである。川島の盟友川口為之助（県会議員）は「川島氏はいつの総選挙にも苦戦を伝へられながら、蓋を開けて見ると予想外の投票で、しかも危な所で当選してゐる、後援者の大物が少い代りに隠れた同情者のあるためでせう、これは選挙区民のために不断の努力を払ふと云ふので、選挙区の人気は素晴らしいものだ、我党代議士中で、若くして前途春秋に富む同君の参与官は、政治家としての第一階梯に達した」（『読売新聞』1932年6月1日付千葉版）とコメントを寄せた通り、海軍省参与官川島正

次郎が誕生したことで、自身の政治歴を一層と高めることに成功したのである。『千葉毎日新聞』1932年6月3日付によると、梨本の邸宅に支援者幹部が集まり協議。その結果、かつて政友会代議士の今井健彦（千葉県第2区）が農林省参与官（犬養毅内閣）に就任した際、選挙区有権者有志が「金ピカ服」を贈ったことに倣い、川島支援者幹部が5円、有志が1円ずつ拠出して合計300円ほど集め、川島の「金ピカ服」を新調することとなったと言う。『千葉毎日新聞』1932年6月2日付は、参与官就任に当り、川島を「新進気鋭の士」と紹介している。また『読売新聞』1932年6月2日付千葉版は、参与官として初登院した燕尾服姿の川島の写真を掲載している。川島は「選挙民諸君の御援助の賜だ、大いに感謝する」と述べた上で、「唯特別な感激を覚え、懸命に御奉公するだけだ」とのコメントを残し、議場に向かう。

海軍参与官時代の川島の動向を新聞報道で確認しよう。例えば『東京日日新聞』1932年8月16日付房総版によると、8月13日、海軍省参与官として連合艦隊の戦技演習を見学する為、館山湾に入港。この時、川島は、肩章を付けた参与官服に短剣を帯び、海軍棒を被り「スマート」な姿で「お国入り」を果たす。同紙は川島がこれを千葉県第1区の選挙民に「是非見せたかった」に違いないと報じる。例えば『東京朝日新聞』1932年11月6日付房総版によると、7日、南行徳村新浜御猟場において開催された岡田海相の鴨猟に同伴した。この他、政府委員として、帝国議会の各種委員会に出席したことも見逃せない。例えば「昭和七年法律第一号中改正法律案（満州事件に関する経費支弁の為公債発行に関する件）外四件委員会」（1932年6月11日）において、政友会の佐藤庄太郎（福島県第3区）の質問に対して、「航空機ノ機数員数ハ軍事上ノ機密ニ属シテ居リマスカラ、秘密会等ニ於キマシテモ御説明ハ差控ヘタイ⁸⁾」と答弁する。政府委員としての議会答弁もまた、有権者に川島の政治活動の裾野の広さを認識させたものと思われる。なお、この委員会では、ライバル本多貞次郎が出席していたが、一言も発言していない。

ところで川島とその側近は、参与官時代の思い出として、次の2つを挙げる。1つは川島自身、「私は齋藤、岡田両海軍大将と鈴木政友会総裁との間をあっせんし、再び政党内閣が出来るように両者の秘密会談も試み、一時は海軍もその決意をした⁹⁾」と回想する。川島は政党内閣の復活に一役買い、大きな役割を任されていたらしい。但し、これは、齋藤内閣の崩壊により、実現しなかった。森恪の伝記にも同様の記述があることから¹⁰⁾、信憑性は高いと思われる。もう1つは川島の専修大学同期生の黒川鍋太郎によると、「選挙費を高利貸から借りたために債鬼から参与官の俸給を差し押へられたのである。川島への俸給袋は赤紙が貼られ、詳細な計算書がついていて最低生活費だけが差し押へから免れて渡された¹¹⁾」と言う。川島は連続当選3回を誇るが、相当、資金繰りには苦慮しており、政治資金の調達は困難を極めていたようである。

川島の政治活動の第2は、それまでの議会報告演説会は影を潜め、新たに選挙

区の為に汗をかくようになった点である。新聞報道は、川島を「かゆいところへ手の届くように面倒を見る」（『東京日日新聞』1932年3月19日付房総版）人物として報じるようになった。従って川島が選挙区の為に動いた形跡は、数多く報じられる。例えば『東京朝日新聞』1932年5月29日付房総版によると、犬養毅内閣期、鈴木隆の斡旋の下、県会議員の川俣義郎（君津郡選挙区）と元県会議員の原四郎治（君津郡選挙区）の子息に当たる原徳治が乗合自動車新規路線の営業許可を県に出願した時のことである。これに危機を感じた君津自動車会社は、社長の長谷川新之助を始め、経営陣は民政党支持者であるにも関わらず、鈴木と「仲のよくない」川島に接近。川島は君津自動車の為に「暗中飛躍」を試みたと言う。この鈴木と川島の争いは長期化し、最終的には政友会県支部幹事長の川口為之助に「白紙委任」した結果、5月27日に加納屋にて、川口の立会いの下、川島派と鈴木派の代表者が会見・折衝。鈴木を通じた新規路線営業許可の出願取り下げが決定されたのである。「この喧嘩の軍配は川島派に上りケリが着いたが、今後、川島、鈴木両政友代議士の仲は一層悪くなる」と報じられた。しかし鈴木が納得する筈も無く、「最後の猛運動」（『東京朝日新聞』1932年5月31日付房総版）を行い、最後まで粘り強く出願を模索していく。川島にして見れば、たとえば民政派の有権者であっても、その要求の実現に奔走した。このような積み重ねにより、選挙区の為に汗を流す代議士イメージが形成されることとなる。

川島は選挙区の為に汗をかき続ける。例えば『千葉毎日新聞』1932年6月16日付によると、千葉市カフェー組合は、県知事の大久保留次郎に対して、新営業規則施行延期の陳情をする為、上京して川島と本多の両代議士に面会。花柳病検診の義務化関連の文言などの「御取り消し」を求め、大久保への陳情書提出を依頼したと言う。そして『千葉毎日新聞』1932年6月3日付によると、県が内示した「カフェー及女給営業新取締規則」に反対する千葉市カフェー組合は、6月1日、上京して川島に面会したと言う。そこで川島は、県会議員の一瀬房之助（千葉市選挙区選出）を紹介し、彼を介して県に陳情するよう回答したのである。組合は県保安課長に取締規則の緩和を陳情したが、保安課長は「業者が新規則を狭義に解釈」しているとし、「何人が来て陳情しても絶対に変更せぬ方針である」と述べ、拒絶した。川島の仲介は功を奏さなかったものの、カフェー組合が本多では無く、川島を千葉県1区の代議士の中でも影響力のある存在と認識していたことが読み取れる。

この他にも、『房総新聞』1933年9月10日付によると、川島の系列下の県会議員である梨本太兵衛は、松戸町・国分村・八柱村の有志約10名を連れ、東京府内務部長の藤田に面会。八柱村から東京市営墓地に繋がる道路整備の陳情を行う。千葉県会議員が東京府内務部長に会えたのも、恐らく川島の存在があったからと思われる。また『東京朝日新聞』1934年4月10日付千葉版によると、9日、川島は県庁を訪問して岡田知事と面会。県営水道問題に関して、「大体来月上旬までには認可になるよ」と確信ある口調で述べたと言う¹²。当時、参与官であっ

た川島は、恐らく事前に情報を入手していたのであろう。水道問題を巡る川島の発言は、その政治力の高さを選挙区に知らしめるのには十分なものであった。実際、5月30日、内務大臣及び大蔵大臣から千葉県知事に対して、県営水道許可指令が発せられている。

このように川島は海軍省参与官を務めると共に、選挙区の為に汗をかき続けた結果、代議士としての活動の幅を広げていった。しかし裾野が広がった為、その政治資金の出处を巡り、様々な疑惑も報じられるようになる。例えば『読売新聞』1932年12月15付は、東京市のガス疑獄事件の余波を受けて暴露された問題、即ち墓地敷地買収問題を大きく報じる。東京市の墓地移動の際、東葛飾郡八柱村を売り込もうとし、多額の運動費がばら撒かれた疑惑である。元県会議員の齋藤三郎、彼の政治資金の調達者でもある田中村の大地主の吉田甚左衛門らが警視庁に召喚され、事情聴取を受けることとなった。かつて東京市秘書課長及び商工課長を務めていた川島は、東京市会に多くの知己がいた為、事情聴取を受けた訳では無いものの、墓地移動にも関係していたと言う。また『東京朝日新聞』1932年12月22日付によると、川島の選挙応援を続けてきた母校専修大学弁論部は、「最近の政治家としての行動に選挙民を裏切る行為あり」との理由で、「行動批判演説会」開催ビラを船橋で数千枚配布した。そもそも船橋は川島の「多年の金城湯池であり、しかも応援者が糾弾するといふのが異常の衝動を与え」た。即ち12月22日18時、政友会院外団が演説会楽屋に押し掛け、「同志川島の糾弾を、しかも船橋で開くとは如何なる理由か」と詰め寄る。すると主催者の森口某は「学園内における川島氏の不信行為を忠告するためだ」と弁明し、院外団は「学園のことなら学園内でやるべきだ、演説をやるならやつて見ろ」と切り返した。その結果、演説会は中止され、聴衆は「鳩が豆鉄砲を食ったやう」な顔で帰途に着いたと言う。残念ながら、川島の「不信行為」の詳細は分からない。何れにせよ川島が代議士3回生としてキャリアを持つからこそ、その周りには様々な人々の疑惑が吸い寄せられていくのであろう。

(2) 後援会の結成—1934年4月君津郡県会議員補欠選挙—

当時の川島の成長と軌を一にして、彼は東葛飾郡を飛び出し、影響力を拡大しつつあった君津郡において、個人後援会を結成する。地盤で無い地域での後援会の結成は、第4章で示した本多や多田の後援会と大きく異なるものであった。その契機は、1934年4月県会議員補欠選挙（君津郡選挙区）に求められる

そもそも『東京朝日新聞』1934年3月13日付千葉版によると、君津郡には代議士に率いられた3つの政治団体が存在していたと言う。即ち鈴木隆系の君津政友倶楽部、多田満長の民政同志会、川島系の君津政友同志会である。鈴木が主幹者である君津政友倶楽部に関しては、既に第4章表4で示した通り、この団体は彼の連続当選5回の原動力の1つであったと思われる。多田の民政同志会も、第4章表4で登場している。正式には「君津民政同志会」（君津郡木更津町・

1929年12月5日届出)と呼び、近藤彌三郎(1911年9月及び1915年9月県会議員選挙で連続当選)がその主幹者である。個人後援会では無いが、君津郡に所在する民政党系の地域政治団体の1つであった。川島の君津政友同志会は、第6章で示した通り、鈴木君津政友倶楽部から川島支持派が分離・独立して結成した政治団体である。これらが各々、補欠選挙に向けて候補者擁立を目指していく。

前述の『東京日日新聞』1934年3月13日付千葉版によると、鈴木君津政友倶楽部は11日、木更津町玉屋旅館で第1回選考会を開催。県会議員の高野伴蔵及び川侯義郎、前県議員らが協議した結果、第1候補は小糸村長の松崎長次、第2候補は周南村の川上覚蔵に決定した。鈴木と「犬猿の間柄」である川島の君津政友同志会は11日、佐々木和彦の邸宅で候補選考会を開催し、前木更津町長の伊藤勇吉を候補者に決定。しかし伊藤は考慮したいと即答を避けた。一方、多田の民政同志会は、木更津町会議員で宗政病院長の宗政東作と周南村の郡酒造組合長の伊藤治郎を候補に推した。そして18日、木更津町の寶家別館で第2回選考会を開催し、伊藤治郎の立候補を決定する予定であった。この他、代議士以外のレベルにおいても、候補者擁立が模索されている。例えば『読売新聞』1934年3月16日付千葉版によると、13日、佐貫町の力屋において、農会長・整理組合長ら10数名が集会し、候補者を1名擁立することを決定。14日から吉野村長の鈴木一、竹岡村長の池田友一、天神山村長の近藤京爾らが郡内各町村の代表者を訪問し、候補者擁立に取り組んだと言う。また『東京日日新聞』1934年3月31日付房総版によると、君津郡水産会は、13日から開催される「水産デー」催し物に関する打ち合わせの際、水産会として「水産業者の代表者」を県議員候補者として擁立することを決定。委員会を設置して候補者を詮衡することとなった。但し、これらの動きは具体化せず終わり、結局は代議士だけが候補者を擁立していく。

『東京朝日新聞』1934年3月17日付千葉版によると、鈴木率いる君津政友倶楽部が第1候補として推す松崎長次自身は「色気たつぷり」なものの、家族や親戚が「強硬」に反対しており、17日中に立候補の可否を回答することとなった。また第2候補の川上覚蔵も「相当難色」を示した。どうやら鈴木系は候補者難に陥っていたようである。川島率いる君津政友同志会は本人の「諾否を問題とせず」伊藤勇吉を推薦し、各方面の有志から選挙費用の「寄附」を仰ぐ段階に入ると共に、木更津町内の有力者に伊藤の立候補同意の依頼状も送付している。前述の通り、伊藤本人は考慮したいと回答しているにも拘わらず、いわば周囲が伊藤の外堀を埋める形で、立候補が既成事実化しつつあった。多田率いる民政同志会は、18日、彼を交えて木更津町寶屋旅館で第2回の選考会を開催することとなっていた。こうして見ると、本人の意向はさて置き、川島の君津政友同志会が候補者擁立に関して一歩リードしていた。加えて『千葉毎日新聞』1934年3月29日付が示す通り、君津郡の政友会の「重鎮」元県議員の藤平量三郎の一派

も川島の推す伊藤の支持を声明。そこで川島は 28 日、縷々、登場しているが、金谷村出身で、川島と専修大学同期生の黒川鍋太郎を木更津町に派遣。打ち合わせの結果、4 月 2 日または 3 日、木更津劇場で伊藤氏推薦演説会を開催することになった。

これに対して多田は、『読売新聞』1934 年 3 月 28 日付千葉版によると、川島を訪問し、「妥協」を「申込み」、伊藤勇吉の擁立中止を提案したが、川島はこれを「拒絶」したと言う。川島は補欠選挙に勝つ絶対の自信があった。そこで多田は、『東京朝日新聞』1934 年 4 月 5 日付千葉版が示す通り、急遽、現職木更津町長の石川善之助を擁立した。同紙によると、石川の父貞次郎は伊藤に「相当の後援」を与えた人物だったようである。しかし川島は意に介することなく、大安 5 日に立候補を届け出、8 日に木更津劇場で正式推薦会と演説会の開催を決定し、川島と伊藤仁太郎（東京府第 3 区）が弁士を務める予定であった。こうして川島の推す伊藤と多田の推す石川の一騎打ちの様相を呈していく。確かに『東京朝日新聞』1934 年 4 月 6 日付千葉版が示す通り、残る鈴木君津政友倶楽部に見れば、そもそも自派議員である小泉吉五郎の死に伴う補選だけに「黙視するは意気地なし」として、貞元村の元県会議員の原徳治の擁立を模索する等、何とか食らいつこうとした。事実、8 日、「最後の」（『東京日日新聞』1934 年 4 月 6 日付房総版）候補者詮衡会に望みを掛けたが、川島や多田と比べると、劣勢は否めなかった。

川島の推す伊藤陣営は、町長時代に「女房役」（『東京朝日新聞』1934 年 4 月 6 日付千葉版）であった前助役の近藤徳三郎を選挙事務長とし、佐々木和彦の邸宅を選挙事務所とした。一方、多田の推す石川陣営は、選挙事務所を「木更津カフェー跡」（『東京日日新聞』1934 年 4 月 6 日付房総版）に設置し、選挙事務長は元神納村長で多田の選挙事務長も務める多田隆太郎が就いた。次に『東京日日新聞』1934 年 4 月 7 日付千葉版を見ると、演説会の様子が窺える。伊藤陣営は、8 日 18 時から木更津劇場で推薦会並びに演説会（弁士は政友会本部総務の高橋熊次郎〔山形県第 1 区〕・伊藤仁太郎・川島）を開催すると言う。この他、久留里町・湊町・佐貫町・大貫町・青堀町でも、代議士 1 名・院外団 1 名が出席して演説会を開催する予定と言う。これに対して石川陣営は、8 日 13 時、推薦演説会（弁士は松田源治〔大分県第 1 区〕・田島勝太郎〔福岡県第 2 区〕・高田転平〔栃木県第 1 区〕・小川郷太郎〔岡山県第 2 区〕・多田）を開催することとなった。補欠選挙の推薦演説会にも拘わらず、川島・多田がそれぞれ代議士を引き連れて選挙運動に関与していることから、この戦いは、海軍省参与官の川島と君津郡を地盤とする多田の、正に面子を賭けた代理戦争の構図となった。

こうした中、『東京朝日新聞』1934 年 4 月 8 日付千葉版によると、木更津町の青年有志が組織する「暁鐘会」は、前町長と現町長による争いを「将来に救ひ難い禍根を残す」ものと捉え、両候補に立候補辞退を勧告した。結果、『東京朝日新聞』1934 年 4 月 10 日付千葉版が示す通り、伊藤は暁鐘会の要請、更には自

身の親族からの出馬「再考」要求を受けて、9日朝、立候補辞退を決意する。候補者難に陥っていた鈴木君津政倶楽部は、「対抗」する川島の候補が退いたことを受けて、立候補者擁立を断念。ここに多田の民政同志会の推す石川だけが立候補することになった。川島の候補者擁立は、最終段階に入り、失敗したのである。

そこで『東京日日新聞』1934年4月10日付千葉版を見ると、興味深い記事が確認出来た。即ち川島が政友同志会を改組し、川島後援会を新たに組織するとの内容であった。これは、代議士が地域の既成政党系列の政治団体をそのまま呑み込み、自身の後援会として編成替えしたことを意味する。政友同志会から川島後援会への移行は、幹部全員の決議を経て行われた。立候補を辞退した前述の伊藤は、後援会の幹事長に推されたが、後援会の前身が政友会系であったことから、「政党入りはしたくない」との本人の意向により、顧問に就任する。千葉県第1区の中で、初めて地盤を飛び出し、代議士個人後援会が組織されたのであった。

再び補欠選挙に目を移すと、既に応援代議士も依頼しており、このまま候補者が出せずいると、川島にとって「政友会の恥辱」(『読売新聞』1934年4月11日付房総版)になることから、黒川鍋太郎を通して、別の候補者擁立を模索していく。まず『千葉毎日新聞』1934年4月12日付の通り、11日、黒川が上京して、川島と今後の対応について協議。その結果、『東京朝日新聞』1934年4月12日付千葉版が示す通り、「川島代議士の代理」黒川・阿部某が10日夕刻に木更津を訪問。旧政友同志会幹部の佐々木和彦・清水某・堀切某・長谷部某などと協議した結果、今回の伊藤の立候補辞退は「木更津町の平和保持」の名の下に行われたものであった為、“木更津町から”は候補者を出さない代わりに、松丘村の齋藤清一郎(前県会議員)や吉野村の齋藤行蔵(前県会議員)等の擁立を模索する。ただ上手く行かなかったことから、11日14時、海軍省から川島は佐々木に電話をかけ、経過や選挙情勢を聴取した上で、川島は「今回は断念せよ」と命令し、候補者擁立を正式に見送ったのである。

結果、『千葉毎日新聞』1934年4月14日付が示す通り、民政党の推薦する現木更津町長の石川善之助のみの立候補となり、無投票当選となった。川島は個人後援会と言う新しい集票回路を手に入れたものの、選挙自体は不戦敗を喫したのである。この選挙過程からは、次の3点が読み取れる。第1は、川島・多田・鈴木の3代議士が君津郡でそれぞれ政党系列の地域政治団体を率いていた点である。個人後援会が結成されていた1930年代中期であっても、それは依然として地域政治団体は後援会と併存していた。これは、第4章表4と合致する。第2は、その川島率いる君津政友同志会が川島後援会に変質した点である。これは、櫻井良樹の指摘¹³、即ち制限選挙期の政治団体が代議士個人後援会に変質したと実態に相当する。但し、その契機は普選では無く、1934年県会議員補欠選挙における候補者擁立を巡る相克であった。地域により、その背景は多様だったようである。第3は、その川島後援会は、川島の地盤である東葛飾郡では無く、君津

郡であった点である。第4章で示した通り、多田及び本多の後援会は、何れも地盤の東葛飾郡だけでのみ結成されていたことから、その目的は票の掘り起しの為では無く、寧ろ地盤の票固めの為であった。しかし川島の場合は地盤では無い。地盤の票固めでは無く、票の掘り起しの為に後援会を結成したものと思われる。事実、君津郡での川島の得票数は伸びていく。即ち1928年2月第16回総選挙46票→1930年2月第17回総選挙199票→1932年2月第18回総選挙1,224票→1936年2月第19回総選挙1,243票と着実に集票力が高まっている。君津郡は東葛飾郡、更には千葉市及び千葉郡に引き続き、いわば川島の“第3の地盤”化しつつあったと言えよう。

(3) 後援会の在り様

多田や本多の後援会は確かに存在していたものの、第5章及び第6章の分析で明らかな通り、1930年2月第17回総選挙及び1932年2月第18回総選挙での演説会や各種配布印刷物等の中には、それらの“見える”活動は一切、確認出来無かった。しかし前述の君津郡川島正次郎後援会の場合、その活動の一端が報じられている。

即ち年明け1月に県会議員選挙、2月に衆議院が任期満了を迎える状況下、『東京日日新聞』1935年12月12日付千葉版を見ると、君津郡川島正次郎後援会長で共同購買株式会社社長の黒川鍋太郎が書類送検されている。『東京日日新聞』1935年12月21日付千葉版を見ると、この黒川は平島栄・楠木齋・鈴木徳松の3人を妹の経営する君津郡金谷村の鍛冶屋旅館に招き、「来春の県議選には沿岸漁業者から代表者を出さねばならぬ」として饗応すると共に、「人格者で、官職を去る時も岡田首相に慰留された」川島を紹介したパンフを作成・配布したと報じられている。後日、黒川は逮捕され、木更津刑務所支所に収容。『読売新聞』1935年12月28日付千葉版によると、最終的には木更津区裁判所から禁固2ヶ月を言い渡された。

この一連の事件からは、後援会の“見えない”活動の在り様を考察し得る。1つは、後援会が県会議員選挙の候補者擁立に関与していたことである。地域の有力者を饗応しているに過ぎないが、後援会の扱う範囲は総選挙だけでは無かったようで、代議士のいわば名代としての役割も担っていたのではないだろうか。2つは、後援会が選挙運動解禁以前の段階において、違法行為であるにも拘わらず、文書発送等の政治活動に従事していた点である。後援会が存在したことで、公的に選挙運動が出来ない期間であっても、後援会はこのような“見えない”活動を通して、代議士を恒常的に支援していたのではないだろうか。つまり後援会の“見えない”活動とは、違法性・恒常性を孕みながら、総選挙や地方選挙に直結する補助的集票行為に他ならなかったと思われる。

第2節 千葉郡川島正次郎後援会の結成

千葉市及び千葉郡と川島正次郎の関わりは、第3章で示した通り、1928年2月第16回総選挙の時、県会議員の川口為之助との出会いに遡る。以降、川島は両地域で政治的影響力を増していく。事実、川島の両地域での集票数が拡大の一途を辿っていくことは、既に第5章及び第6章で示した通りである。

地盤である東葛飾郡を越えて、君津郡で後援会を手に入れた川島は、千葉郡でも後援会を持つに至る。即ち『千葉毎日新聞』1935年1月5日付を見ると、11日、大和田町の萱田飯綱神社において、千葉郡二宮町・大和田町・睦村・豊富村の4町村の有志が川島正次郎後援会を結成すると言う。これら4町村は、表1の通り、川島の得票率が次第に上昇しており、川島を強力に支援する有権者が多かったようである。特に1932年2月第18回総選挙時点を見ると、豊富村44%を除き、川島は残り3町村で何れも50%以上の得票率を占め、平均値でも51%を記録する等、圧倒的な強さを誇っていた。川島は集票力の強い地域で、第4章で示した多田や本多の後援会とは異なり、町村の垣根を越え、個人後援会を持ったのである。

この記事は、後援会結成の背景も述べている。即ち「従来、選挙区民と選出代議士とは一旦選挙を終るや、別人の如く没交渉となるのは、全然選挙の意味を没却するものにして、代議士にして常にその地方の実情を確認せざれば、最もよく民情に徹底せる政策の実現に難く、常にこれを鞭撻し支援することで真の選挙の意義を一層効果あらしむる」と報じている。ここからは、選挙後も代議士と有権者の結び付きを維持する為の組織として、後援会が捉えられている。いわば千葉郡川島後援会は、代議士と有権者を直接的に結び付ける組織であり、第4章で示した本多のような介在型後援会とは趣が異なると言えよう。だからこそ後援会の会長には、地方議員では無く、君塚東一郎なる人物が就任したのである。結成大会には500人が参加し、当日、この君塚が後援会結成の趣旨を述べると共に、川島に後援会名簿を贈呈した。この後、川島の謝辞及び時局問題講演会が開催された。しかし残念ながら、これ以上、千葉郡川島後援会の実態を窺わせる史料は、管見の限り、発見出来なかった。

では千葉郡川島後援会が結成された結果、前述の4町村の得票率は如何なる変化を見せたのであろうか。同じく表1を見ると、後援会結成以前の1932年2月第18回総選挙と後援会結成以後の1936年2月第19回総選挙を比べた場合、睦村を除く3町村で、何れも得票率を下げていることが窺える。ここだけを見れば、千葉郡川島後援会は、成果を挙げられなかったことになる。しかし注意しなければならないのは、既に第6章で示した通り、1932年2月第18回総選挙の際、これら4町村は政友会候補の地盤協定が成立した地域であった。つまり1932年2月第18回総選挙での川島の得票率の高さ及び鈴木の得票率0%は、地盤協定の産物であり、数値としては異例である。この数値の異例さを踏まえれば、後援会の結成は、総体的に4町村の得票率にプラスに作用したと思われる。千葉郡全

体を見ても、1928年2月第16回総選挙875票→1930年2月第17回総選挙2,918票→1932年2月第18回総選挙3,843票→1936年2月第19回総選挙4,184票と着実に集票力を伸ばしていることから、やはりこの地は川島にとって“第2の地盤”と位置付けられる。

表1:二宮町・大和田町・睦村・豊富村における得票率推移一覧

	1928年2月第16回				1930年2月第17回			
	川島	鈴木	本多	志村	川島	多田	篠原	鈴木
二宮町	10%	31%	6%	49%	21%	38%	13%	12%
大和田町	4%	23%	5%	58%	35%	10%	45%	0%
睦村	17%	29%	1%	43%	10%	3%	48%	29%
豊富村	14%	26%	13%	42%	18%	8%	42%	9%
4町村平均	11%	27%	6%	48%	21%	15%	37%	13%
	1932年2月第18回				1936年2月第19回			
	川島	鈴木	多田	本多	川島	多田	篠原	本多
二宮町	55%	0%	5%	9%	46%	8%	23%	9%
大和田町	54%	0%	3%	5%	43%	3%	37%	9%
睦村	51%	0%	4%	25%	58%	0%	26%	5%
豊富村	44%	0%	6%	14%	30%	29%	25%	9%
4町村平均	51%	0%	5%	13%	44%	10%	28%	8%

出典:各回の衆議院事務局『衆議院議員総選挙一覧』より作成
注:但し各回の当選者のみに限定した

- 1 犬養毅内閣から齋藤実内閣の成立に関しては、村井良太『政党内閣制の展開と崩壊——九二七～一九三六年——』（有斐閣 2014年）第3章及び第4章が詳しい。
- 2 三浦茂一・高林直樹・長妻廣至・山村一成『千葉県の百年』（山川出版社 1990年）228～232頁（山村一成執筆）によると、この時期、千葉県における農民運動も分裂し、その右派が国家社会主義へ転向すると言う。
- 3 「立憲政友会所属議員派閥調 昭和七年」（岡山県立記録資料館〈国立国会図書館憲政資料室蔵〉『松本学関係文書』R13）。
- 4 「政友会系統別」（前掲『松本学関係文書』R12）。
- 5 林政春『川島正次郎』（花園通信社 1971年）158頁。
- 6 小畑伸一『政界一寸先は闇—ある川島担当記者の手記—』（黄帆社 1972年）181頁。
- 7 川島正次郎「春縁放談」（林政春『国会議員の風雪 25年—自民党幹事長川島正次郎氏の政界コース—』〈東京タイムズ千葉支局 1959年〉）29頁。
- 8 帝国議会会議録検索システム「昭和七年法律第一号中改正法律案（満州事件に関する経費支弁の為公債発行に関する件）外四件委員会議録 第五回 昭和七年六月十一日」4頁。
- 9 前掲川島「春縁放談」（前掲林『国会議員の風雪 25年』）29頁。
- 10 山浦貫一『森恪 改訂版』（森恪伝記編集会 1941年）835～836頁。
- 11 黒川鍋太郎『川口先生悲吟帖』（千葉公報社 1968年）200頁。
- 12 県営水道設置を巡る政治過程に関しては、川島ら代議士の動向を含め、池田宏樹『大正・昭和期の地方政治と社会』（彩流社 2014年）148～153頁が詳しい。
- 13 櫻井良樹『帝都東京の近代政治史—市政運営と地域政治—』（日本経済評論社 2003年）第6章第3節。